

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

## 神田Ⅱ遺跡

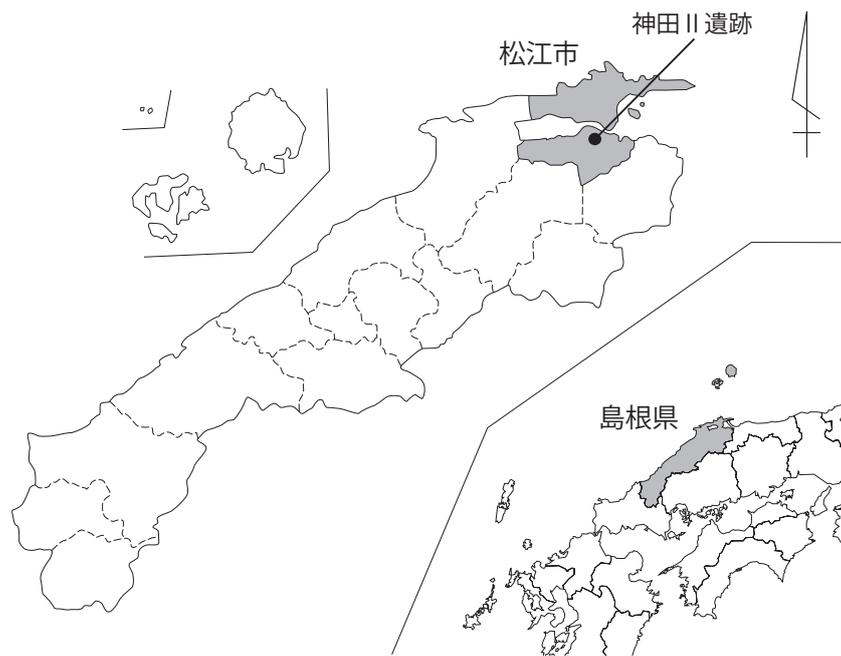
令和 3 (2021) 年 3 月

島根県 松江市

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

神田Ⅱ遺跡



令和3(2021)年3月

島根県 松江市

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団





	次 長	稲田 信
まちづくり文化財課	課 長	飯塚 康行
埋蔵文化財調査室	室 長	尾添 和人
文化財総合コーディネーター		丹羽野 裕
調査係	係 長	川上 昭一
	主 幹	川西 学
	学 芸 員	三宅 和子
	嘱 託	門脇 誠也
実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長	星野 芳伸
埋蔵文化財課	課 長	宮本 英樹
調査係	係 長	小山 泰生
	調 査 員	徳永 桃代 (担当者)
	調 査 補 助 員	木村由希江

7. 調査に携わった発掘作業員

井川智、重田綾子、高田遼和、高橋脩朔、中村慎市、福田紘治、本田忠敬

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書および遺構の浄書は、以下のものを行った。

木村由希江、坂本玲子 (遺物整理員)

9. 報告書作成にあたっては、以下の方からご指導・ご教示を頂いた。記して謝意を表する。

松江市松江城調査研究室 西尾克己

松江市鹿島歴史民俗資料館 館長 赤澤秀則

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 高速道路調査推進スタッフ調整監 角田徳幸

10. 本書の執筆は第1章第1節を松江市埋蔵文化財調査室が、第1章2節から第4章を徳永が執筆した。編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て徳永が行った。

11. 本文・図版中の表記に用いた遺構略号は次のとおりである。

SB: 掘立柱建物跡 SP: 掘立柱建物跡に伴う柱穴 P: 柱穴 SD: 溝

12. 本書の遺構番号は、調査時に設定したものを報告書作成にあたり一部変更している。

13. 本書で用いた方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第三系の値である。また、レベル高は海拔標高を示し、本文中では標高○mと記した。

14. 本書で用いた地層、出土遺物の色名は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に拠った。

本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

〔弥生土器〕 松本岩雄・正岡睦夫 1992 『弥生土器の様式と編年』 木耳社

〔土 師 器〕 青木遺跡発掘調査団 1978 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ (本文編)』

〔須 恵 器〕 大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」 『島根考古学会誌』 第11集  
島根考古学会

大谷晃二 2003 『島根県古代文化センター調査研究報告書 16 宮山古墳群の研究』

大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『平田市埋蔵文化財調査報告書 8 上石堂平古墳群』島根県出雲土木建築事務所・平田市教育委員会

①島根県古代文化センター 2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』

②島根県教育委員会 2013 『史跡出雲国府跡 9- 総括編 -』

\*古代の須恵器の型式分類については①を古代C分類として用いている。古代の須恵器・土師器の編年については、②を国府編年として用いている。

16. 註と引用・参考文献は各章末に掲載した。

17. 掲載した遺構図の縮尺は各図の縮率とスケールを配した。遺物実測図の縮率は原則、土器・石材は 1/3、石核・剥片は 1/2 で掲載した。須恵器の断面は黒塗り、灰釉陶器の断面は網掛け、そのほかは白ヌキで示した。

18. 本書に掲載した遺構図・遺物図は IllustratorCC2021・CS6(Adobe 社) を用いて浄書し、図版レイアウト及び原稿執筆などの編集作業は InDesignCS6(Adobe 社) を用いて行った。

19. 測量データ・出土遺物・実測図・写真等の資料は松江市で保管している。

# 本文目次

## 例言

### 第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 報告書作成作業の経過	3

### 第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

### 第3章 調査成果

第1節 試掘調査の成果	7
第2節 本調査の成果	12

### 第4章 総括

第1節 第1・2次(平成16年度)の調査成果	37
第2節 第3・4次(平成18年度)の調査成果	46
第3節 神田Ⅱ遺跡の様相	48

## 写真図版

## 報告書抄録

# 挿図目次

第 1 図	調査位置図	1
第 2 図	神田Ⅱ遺跡の範囲と周辺の地形図 (1:2500)	2
第 3 図	調査地と周辺の遺跡 (1:25,000)	5
第 4 図	神田Ⅱ遺跡 試掘調査位置図	7
第 5 図	T-1 調査区 平面図・断面図	8
第 6 図	T-1 出土遺物実測図	9
第 7 図	T-2 調査区 平面図・断面図	10
第 8 図	T-2 出土遺物実測図	11
第 9 図	調査グリッド図	12
第 10 図	神田Ⅱ遺跡 現況等高線と調査区位置図	13
第 11 図	神田Ⅱ遺跡 遺構全体図	15
第 12 図	神田Ⅱ遺跡 土層図	16
第 13 図	SB01 平面図・断面図	17
第 14 図	SB01 出土遺物実測図	17
第 15 図	SB02 平面図・断面図	19
第 16 図	SB02 出土遺物実測図	19
第 17 図	SB03 平面図・断面図	20
第 18 図	SB04 平面図・断面図	21
第 19 図	SB04 出土遺物実測図	21
第 20 図	SB05 平面図・断面図	22
第 21 図	SB05 出土遺物実測図	22
第 22 図	SB06 平面図・断面図	24
第 23 図	加工段 2～4 平面図・断面図	25
第 24 図	加工段 3・4 出土遺物実測図	26
第 25 図	加工段 5 平面図・断面図	28
第 26 図	SD01 平面図・断面図	29
第 27 図	SD01 出土遺物実測図	29
第 28 図	P3～P6 平面図・断面図	29
第 29 図	P3～P6 出土遺物実測図	29
第 30 図	P7～P10 平面図・断面図	31
第 31 図	P7～P10 出土遺物実測図	31
第 32 図	包含層出土遺物実測図 (1)	33
第 33 図	包含層出土遺物実測図 (2)	34
第 34 図	包含層出土遺物実測図 (3)	35
第 35 図	調査区位置図	38
第 36 図	第 1・2 次 (H16 年度) 調査 遺構全体図・土層図	39
第 37 図	SB01～SB05 平面図・断面図	41
第 38 図	SB01～SB04 出土遺物実測図	42
第 39 図	SK02 平面図・断面図	43
第 40 図	SK02 出土遺物実測図	43
第 41 図	遺構内・遺構外出土遺物実測図	44
第 42 図	第 3・4 次 (H18 年度) 調査 出土遺物実測図	47
第 43 図	第 3・4 次 (H18 年度) 調査 遺構全体図	47
第 44 図	国府・古代道推定ラインと神田Ⅱ遺跡の位置関係図	49
第 45 図	神田Ⅱ遺跡 遺構全体図	50～51

# 挿表目次

表 1.	神田Ⅱ遺跡調査実績一覧	37
表 2.	掘立柱建物跡 推定年代一覧	51
表 3.	遺物観察表	52～56

# 写真図版目次

写真 1.	本調査風景	3
写真 2.	本調査指導会風景	3
図版 1.	第 5 次 (試掘調査) 調査地調査前全景 (東から) T-1 調査前風景 (西から) T-1 完掘状況 (南西から) T-2 完掘状況 (西から) T-2 P2 検出状況 (北から)	
図版 2.	第 6 次 (本調査) 1 区完掘状況 (北西から) 1 区完掘状況 (南東から) SB01-SP04 半掘状況 (南東から) SB01-SP04 完掘状況 (東から)	
図版 3.	第 6 次 (本調査) 2 区完掘状況 (南西から) 2 区完掘状況 (東から) P10 半掘状況 (東から) P10 完掘状況 (東から)	
図版 4.	第 6 次 (本調査) 3 区完掘状況 (南東から) SB05-SP01 半掘状況 (北から) SB05-SP01 完掘状況 (北から) SB06-SP02 半掘状況 (北から) SB06-SP02 完掘状況 (北から)	
図版 5.	第 2 次 (H16 年度) 調査 調査地全景 (北から) SB01・SB02・SK02 完掘状況 (北から)	
図版 6.	第 2 次 (H16 年度) 調査 SK02 遺物出土状況 (北から) SB03 完掘状況 (北から) 調査区東側ピット群完掘状況 (北西から)	
図版 7.	第 3・4 次 (H18 年度) 調査 T-2 検出状況 (南から) T-2 貯蔵穴半掘状況 (南西から) T-2 貯蔵穴土層断面検出状況 (南東から) T-4 完掘状況 (西から) T-5 完掘状況 (西から) 西側擁壁設置箇所 (南から) 中央擁壁設置箇所 (西から)	
図版 8.	遺物写真 第 5 次 (試掘調査) T-1 出土遺物 第 5 次 (試掘調査) T-2 出土遺物 (1)	
図版 9.	遺物写真 第 5 次 (試掘調査) T-2 出土遺物 (2) 第 6 次 (本調査) SB01～SB05 出土遺物	
図版 10.	遺物写真 第 6 次 (本調査) 加工段 3・4 出土遺物 /SD01 出土遺物 /P3～P10 出土遺物	
図版 11.	遺物写真 第 6 次 (本調査) 包含層出土遺物 (1)	
図版 12.	遺物写真 第 6 次 (本調査) 包含層出土遺物 (2)	
図版 13.	遺物写真 第 6 次 (本調査) 包含層出土遺物 (3) 第 1・2 次 (H16 年度) 調査 SB01～SB04・SK02 出土遺物	
図版 14.	遺物写真 第 1・2 次 (H16 年度) 調査遺構内・遺構外出土遺物 / 第 3・4 次 (H18 年度) 調査出土遺物	

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

平成31年3月20日、事業者より松江市大庭町字神田1359番1において個人住宅新築に伴う造成工事のため、試掘調査の依頼書が松江市に対し提出された。これを受けて松江市は同年3月27日に現地において試掘調査を実施したところ、遺物包含層と遺構を検出し、遺跡の存在を確認した。この調査結果から、同地を隣接する周知の遺跡である神田Ⅱ遺跡の広がりとして取り扱うこととし、その旨を事業者に伝えた。

事業者と協議を重ねたところ、同地における工事については事業を断念するに至ったが、同地の土地所有者が造成工事を実施する意思を示し、令和元年12月13日付けで埋蔵文化財発掘の届出が松江市に提出された。これを受けて島根県教育委員会に進達したところ、工事による切土範囲においては遺跡に影響を及ぼすため、令和2年1月6日付けで工事着工前に発掘調査を実施するよう通知が出され、届出者にその旨を伝達した。

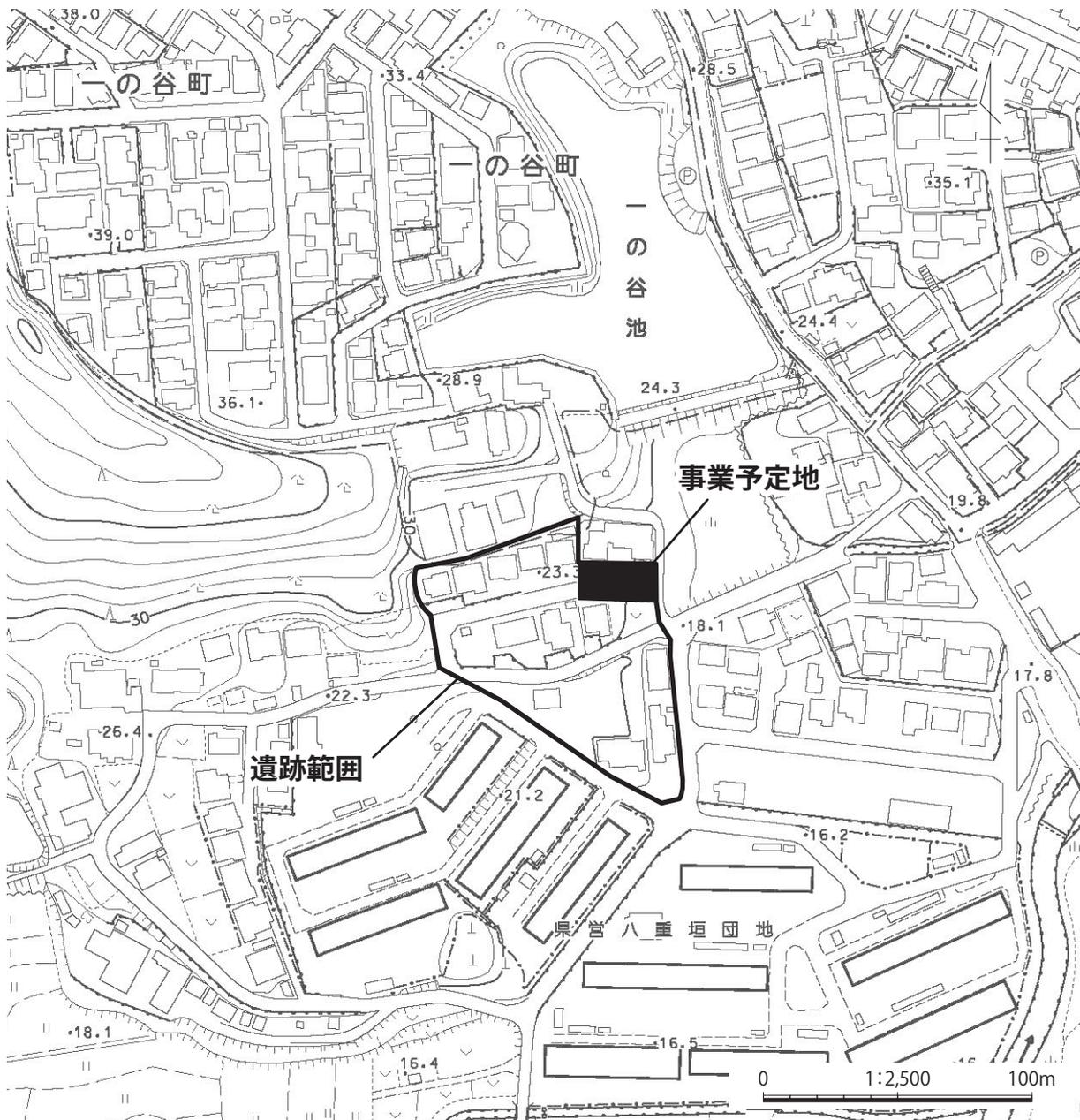
この後、新たな事業者である土地所有者と調査の日程について折衝を重ねた結果、国庫補助事業として令和2年2月から発掘調査を実施するに至ったものである。



第1図 調査位置図

## 第2節 調査の経過

本調査は令和2年2月14日から開始した。事業予定地 369㎡ (第2図)のうち、工事掘削が予定される 107.87㎡が調査対象範囲である。調査の便宜上、工事掘削予定箇所を調査区「1区」、「2区」、「3区」と分け、「1区」の表土掘削から行った。その後、東西方向に土層観察用のトレンチを入れ、表土下に近年まで使われていた畑の耕作土、その下に遺物包含層・地山漸移層・地山を確認した。地山漸移層直上から柱穴を検出した。これにより、表土と近年使用された畑の耕作土は重機で取り除き、遺物包含層を人力で掘削した。地山漸移層上面で多数の柱穴を検出し、これらが掘立柱建物跡であることがわかった。



第2図 神田II遺跡の範囲と周辺の地形図 (1:2500)

「1区」の完掘後、「2区」と「3区」北半分の表土および畑土の掘削を開始した。「1区」を埋め戻さないで「3区」南半分の調査ができないため、まずは「1区」の取り扱い協議を行い、埋め戻した。

「2区」は幅約1mと狭いトレンチ状の調査区で時間的な制約もあり、土層と遺構の関係を迅速に確認する必要があったため、遺物包含層から地山までを人力で一度に掘り下げた。遺物包含層間ではピットを、地山漸移層では加工段を検出した。

「3区」は「1区」同様に東西方向に土層観察用のトレンチを入れ、遺物包含層・地山漸移層・地山を確認した。地山漸移層上面で掘立柱建物跡に伴う柱跡と溝を検出した。遺構を完掘しすべての記録を取ったところで、島根県教育庁文化財課の指導を受け、安全面から3月26日に埋め戻しを行い、すべての調査を終了した。

### 第3節 報告書作成作業の経過

報告書の作成は、遺物の水洗・注記・接合作業から取り掛かり、一部の実測は現地調査に並行して実施した。令和3年1月から遺物の実測、図面・写真などの整理作業を行った。

出土遺物については、各分野の有識者に指導を受けた。あわせて、図面整理作業も行いながら、出土遺物の実測・遺構図の作成を実施した。なお、出土遺物は細片が多く、遺構の時期を示すものについてはなるべく掲載しているが、掲載遺物が出土遺物のすべてではないことをお断りする。また、遺構図の作成について、遺構名は通し番号になるように一部名称を付け直している。

図面のデジタルトレースはイラストレーター CC2021・CS6で行い、写真撮影はフルサイズのデジタル一眼レフカメラを使用し、写真の加工はフォトショップ CC2021・CS6で行った。報告書の執筆と編集作業はインデザイン CS6 を使用して行った。



写真1. 本調査風景



写真2. 本調査指導会風景

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

今回調査を行った神田Ⅱ遺跡は松江市街地の南郊、大庭町に位置する。馬橋川の本支流が作り出した谷底平野に向けて突き出した丘陵上に存在しているが、現在は宅地化が進み従来の地形を想像することは難しい。

調査地は砂礫台地が谷底平野に向かって標高が下がっていく縁辺に存在する。この砂礫台地は乃木段丘と呼ばれ、段丘礫層が大山松江軽石(13万年前以降に降下)に覆われることから十数万年前の最終間氷期の高海水準に対応して形成されたものと考えられている。段丘面は意宇平野西部で標高20mを超え、西方へ向かってわずかに低くなり、上乃木付近では標高15m前後となる。調査地は現地表面で約19～20mを測る。

### 第2節 歴史的環境

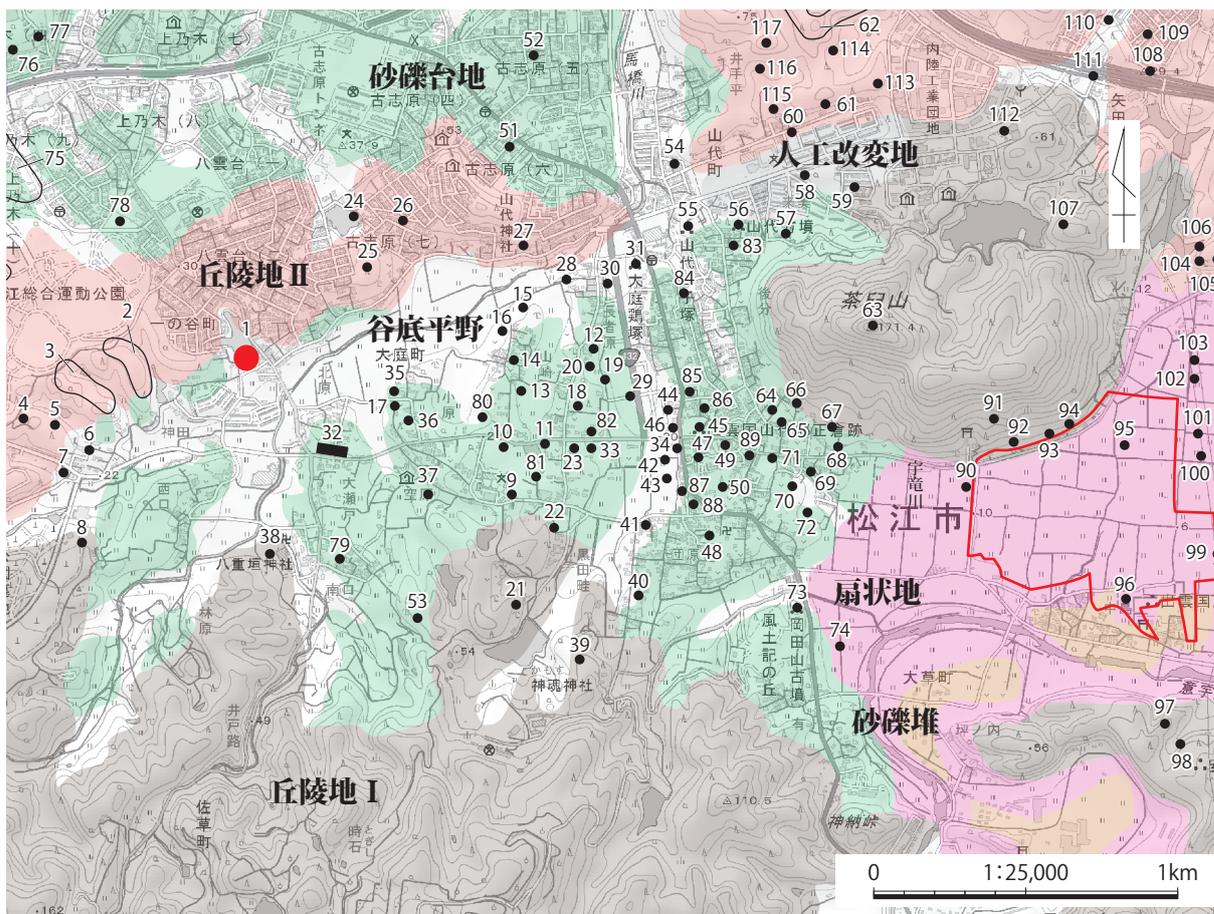
神田Ⅱ遺跡(1)の周辺遺跡について、時代ごとに概略を述べていく。

**旧石器時代** 旧石器時代の遺構は確認されていないが、下黒田遺跡(47)で玉髓製石核と剥片、市場遺跡(66)で黒曜石製細石核、山代郷北新造院跡(来美廃寺)(61)で玉髓製ナイフ形石器が出土しており、付近にこれらの遺物を伴う遺跡の存在を窺わせる。

**縄文時代** 明確なこの時代の遺構や遺物の出土は確認されていないが、向山西遺跡(25)と大庭北原遺跡(32)で落とし穴が検出されている。遺物を伴わないため、時期は不明であるものの、落とし穴は縄文時代での事例が多いため、この時代の遺構である可能性が考えられる。遺跡地図のさらに東側にあたる扇状地に展開する意宇平野では縄文時代後期の土器や石器が出土した才塚遺跡、縄文後～晩期の土器が多く出土した石台遺跡が存在する。

**弥生時代** この時代になると集団活動が活発になるようで、該当する遺跡数も多くなる。集落遺跡は、弥生時代中期の溝状遺構や貯蔵穴を検出した大庭小原遺跡(35)、柱穴を検出した砂口遺跡(36)、後期の溝状遺構を検出した柳堀遺跡(29)がある。

**古墳時代** 弥生時代に続いてさらに集団活動が活発になるようで、集落遺跡だけでなく古墳も多く存在する。集落遺跡では古墳時代前期の竪穴建物跡を検出した大庭小原遺跡(35)、中期の竪穴建物跡を検出した砂口遺跡(36)、奥宇田瀬遺跡(114)では後期の玉作工房跡と思われる竪穴建物跡などを検出している。また、山代沖田遺跡(64)では古墳時代の竪穴建物跡を検出している。古墳は中期に長砂古墳群(75)が存在し、前期同様に土壌に木棺を据え置くタイプの墓であるが、須恵器が供献されている。後期になると、茶臼山の西側に大庭鶏塚古墳(31)、山代二子塚古墳(55)、山代方墳(56)といった大型古墳が造営されるようになる。削平のため墳形が損なわれているが東淵寺古墳(33)も、



- |              |                            |                        |            |
|--------------|----------------------------|------------------------|------------|
| 1 神田川遺跡      | 31 大庭鶏塚古墳                  | 60 来美南遺跡               | 88 下黒田川遺跡  |
| 2 神田遺跡       | 32 大庭北原遺跡                  | 61 山代郷北新造院跡<br>(来美廃寺跡) | 89 山代大畑遺跡  |
| 3 渋ヶ谷遺跡群     | 33 東淵寺古墳                   | 62 南外古墳群               | 90 大坪遺跡    |
| 4 勝負谷遺跡      | 34 大庭植松遺跡                  | 63 茶臼山城跡               | 91 大谷横穴群   |
| 5 措松遺跡       | 35 大庭小原遺跡                  | 64 山代沖田遺跡              | 92 真奈井遺跡   |
| 6 深田遺跡       | 36 砂口遺跡                    | 65 光泉寺遺跡               | 93 聖岩遺跡    |
| 7 勝負谷古墳群     | 37 空原遺跡                    | 66 市場遺跡                | 94 大谷遺跡    |
| 8 小倉見谷横穴群    | 38 鏡池遺跡                    | 67 内堀石塔群               | 95 樋口玉作跡   |
| 9 大庭廻田遺跡     | 39 大石古墳群                   | 68 山代郷南新造院跡<br>(四王寺跡)  | 96 大草玉作遺跡  |
| 10 大庭小学校校庭遺跡 | 40 出雲国造館跡                  | 69 寺の前遺跡               | 97 西百塚山古墳群 |
| 11 B3遺跡      | 41 神魂神社参道遺跡                | 70 小無田遺跡               | 98 東百塚山古墳群 |
| 12 B8遺跡      | 42 川原宮遺跡                   | 71 小無田II遺跡             | 99 出雲国府跡   |
| 13 B9遺跡      | 43 川原宮II遺跡                 | 72 団原古墳                | 100 神田玉作跡  |
| 14 B10遺跡     | 44 大庭原ノ前遺跡                 | 73 岡田山古墳群              | 101 四配田遺跡  |
| 15 B11遺跡     | 45 出雲国山代郷正倉跡               | 74 岩屋後古墳               | 102 向小紋遺跡  |
| 16 B12遺跡     | 46 出雲国山代郷正倉跡<br>(平成4年度調査区) | 75 長砂古墳群               | 103 上小紋遺跡  |
| 17 B16遺跡     | 47 下黒田遺跡                   | 76 長廻遺跡                | 104 上竹矢遺跡  |
| 18 B18遺跡     | 48 黒田畦遺跡                   | 77 長廻II遺跡              | 105 上竹矢古墳  |
| 19 B21遺跡     | 49 黒田館跡                    | 78 矢の原II遺跡             | 106 上竹矢古墳群 |
| 20 B28遺跡     | 50 団原遺跡                    | 79 佐草井頭遺跡              | 107 廻田古墳群  |
| 21 大石横穴群     | 51 山代神社前遺跡                 | 80 鏡田遺跡                | 108 平所II遺跡 |
| 22 秋上家古墳群    | 52 練兵場I遺跡                  | 81 大庭前田遺跡              | 109 井ノ奥古墳群 |
| 23 外屋敷遺跡     | 53 荒神谷・後谷古墳群               | 82 土地田遺跡               | 110 間内越墳墓群 |
| 24 香ノ木池遺跡    | 54 井出平山古墳群                 | 83 山代原古墳               | 111 平所遺跡   |
| 25 向山西遺跡     | 55 山代二子塚古墳                 | 84 山代鍛冶屋遺跡             | 112 十王免横穴群 |
| 26 向山西古墳群    | 56 山代方墳                    | 85 長者原遺跡               | 113 来美東古墳群 |
| 27 向山1号墳     | 57 永久宅後古墳                  | 86 山代郷正倉跡北遺跡           | 114 奥宇田瀬遺跡 |
| 28 下ノ原遺跡     | 58 狐谷遺跡                    | 87 川原宮III遺跡            | 115 来美西遺跡  |
| 29 柳堀遺跡      | 59 狐谷横穴群                   |                        | 116 岩井手谷遺跡 |
| 30 茶臼遺跡      |                            |                        | 117 樋岡古墳群  |

第3図 調査地と周辺の遺跡(1:25,000)

\* 島根県 1973「松江」『5万分の1都道府県土地分類基本調査(地形分類図)』を改変

大型の前方後円墳が想定されている。このほか、後期後半から丘陵斜面に横穴墓も造営されるようになる。

**古代(奈良・平安時代)** 本遺跡周辺では、意宇平野に国府が設置されたことにより、これに関連する遺跡が多く確認されている。規格的に配置された総柱建物群跡と大量の炭化米を検出した出雲国山代郷正倉跡(45・46)、大溝と総柱建物跡や大型の掘立柱建物跡を検出した下黒田遺跡(47)などがある。寺院跡も見つかっており、山代郷北新造院跡(来美廃寺跡)(61)、山代郷南新造院跡(四王寺跡)(68)などがある。また、山代郷南新造院(四王寺跡)(68)に瓦を供給していたとされる瓦窯跡を検出した小無田Ⅱ遺跡(71)がある。この他、措松遺跡(5)と外屋敷遺跡(23)で道路状遺構を検出しており、古代山陰道(正西道)との関係が推測されている。

**中世以降** 中世以降も引き続き多くの遺跡が存在している。13～14世紀の掘立柱建物跡が検出された出雲国山代郷正倉跡(46)があり、時代がこれより下るものの、この遺跡の北西側に同じく溝で区画された掘立柱建物跡を検出した大庭原ノ前遺跡(44)が存在する。ここでは15世紀前半～中頃と16世紀中頃～17世紀前半までの建物跡が確認されている。黒田館跡(49)では15世紀後半～16世紀にかけての豪族の館跡とみられる掘立柱建物跡や溝を検出している。黒田畦遺跡(48)では12世紀～16世紀末頃にかけて存続した豪族の館の一部と考えられる掘立柱建物跡や溝を検出している。

また、古代より出雲全域にわたり勢力を持っていた出雲臣一族が意宇郡を本拠地としていたが、延暦17(798)年国造大領兼帯の禁により祭祀を専業とするようになり、出雲大社のある杵築に本拠地が移ったとされている。ただし、以降もこの地にある神魂神社と松江市八雲町にある熊野大社の重要な祭儀に係わり、明治初期まで黒田畦地区の一隅に宿館を構えた<sup>(1)</sup>と伝えられている。この宿館に推定されているのが出雲国造館跡(40)で、館を区画したと思われる大溝が検出されている<sup>(2)</sup>。

この他、五輪塔と宝篋印塔が集積された内堀石塔群(67)があり、出雲国府の西北部に豪族関連の遺跡がまとまって見つかっている。また、中世の山城として知られる茶臼山城跡(63)は、文献史料からその城主が判然としていないが、15～16世代の陶磁器片が出土している。遺構は縦堀状遺構などを検出しており、出土遺物の年代より古い様相を示す可能性も指摘されている。

註1) 加藤義成 1975「古代祭祀遺跡」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』

註2) 松江市教育委員会 2005「平成14年度調査B地点SD01」『平成14～15年度大庭町管渠工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(出雲国造館跡・正林寺遺跡)』

松江市教育委員会 1993「平成4年度の調査第1調査区SD01」『出雲国造館跡発掘調査報告書』

島根県教育委員会 1982「黒田畦神主屋敷第I調査区SD01」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告I - 松江市大庭町黒田畦字土居・字神主屋敷所在遺跡 - 付・御崎山古墳』

#### 参考文献

林正久 1991「松江周辺の沖積平野の地形発達」『地球科学』Vol.46.No.2

島根県教育委員会 2003『増補改訂 島根県遺跡地図I(出雲・隠岐編)』

## 第3章 調査成果

### 第1節 試掘調査の成果

個人住宅の宅地造成工事に際して、平成31年3月27日に重機による試掘調査を実施した。

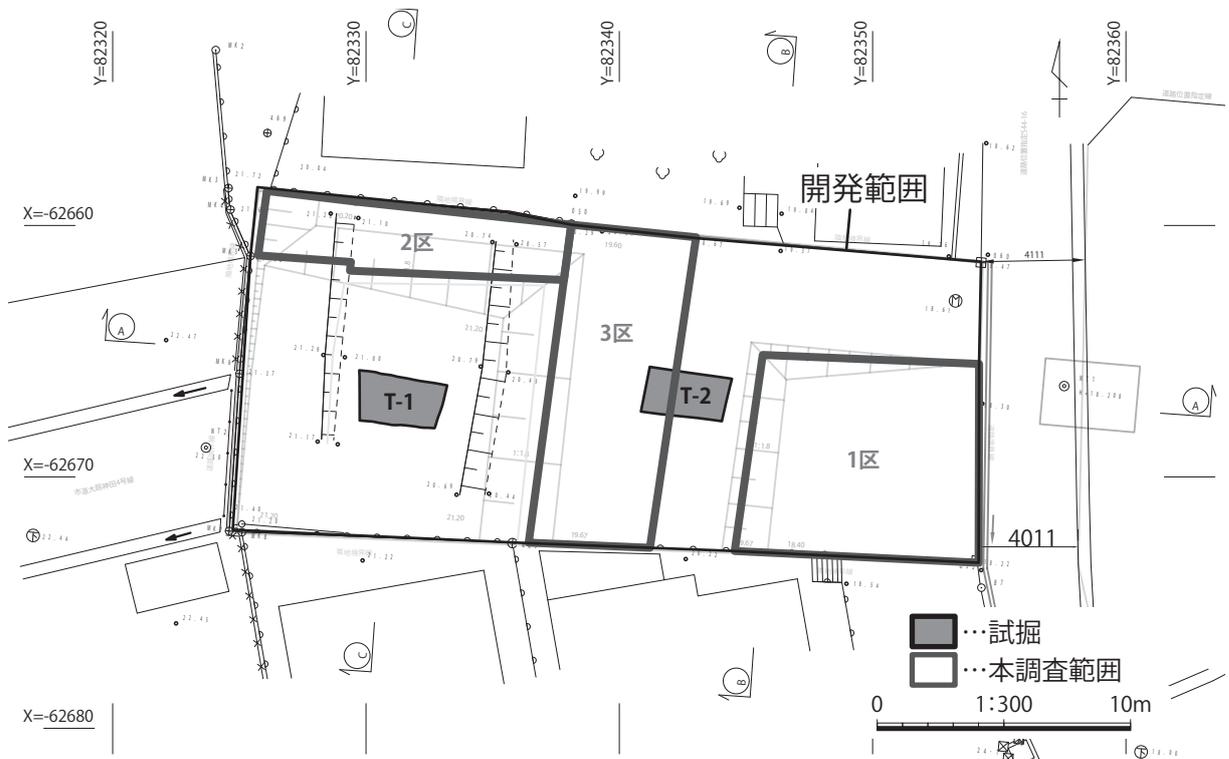
開発予定地は標高約17.75～21.00mを測る東向きの斜面に位置し、西側から「T-1」・「T-2」と呼称する1.5m×3.0mの調査区を設けて調査を行った(第4図)。重機で土層と遺構、それに伴う遺物を確認しながら、地山あるいは遺構検出面まで掘り下げた。調査面積は延べ9.0㎡となった。以下、各調査区の概要を述べる。

#### 第1項 T-1 調査区(第5図)

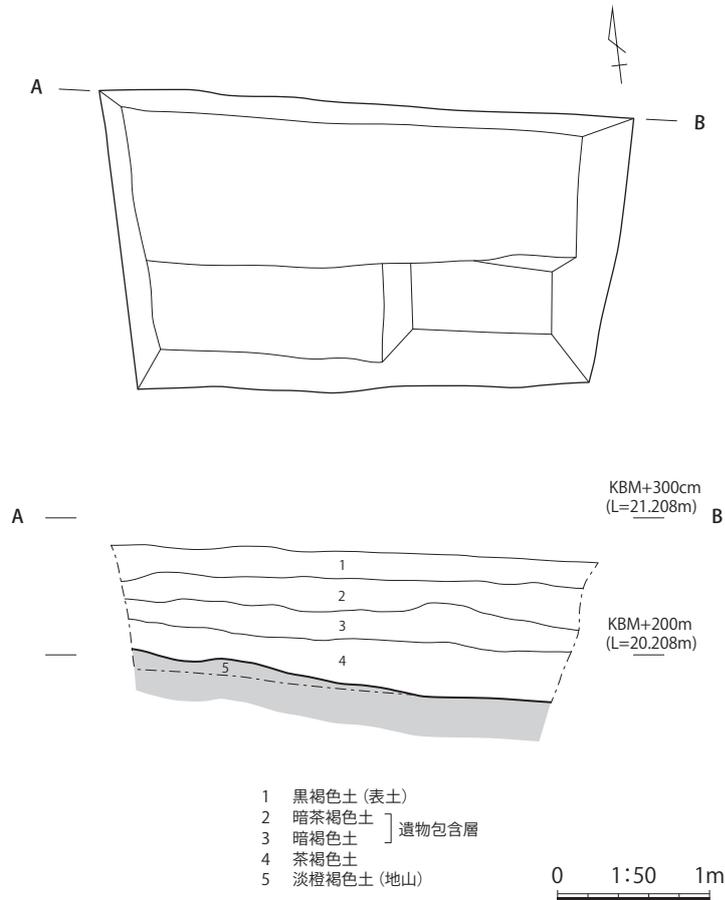
調査地の西側に設定した1.5m×3.0mの調査区である。

現況地表面下18cmまで耕作土である黒褐色土(第1層)を検出した。第2層は現況地表面下18～36cmで検出した暗茶褐色土層である。ここから須恵器片、土師器片が出土した。第3層は現況地表面下36～58cmで検出した暗褐色土層である。ここから須恵器片、土師器片が大量に出土した。第4層は現況地表面下58～86cmで検出した茶褐色土層で、ここからの出土遺物はない。第5層は現況地表面下86cmで検出した淡橙褐色土層で、固く締まっているため地山と判断した。

以上のように第2層、第3層が遺物包含層であることがわかったが、ここでは遺構は確認できなかった。



第4図 神田II遺跡 試掘調査位置図



第5図 T-1 調査区 平面図・断面図

**T-1 出土遺物 (第6図)**

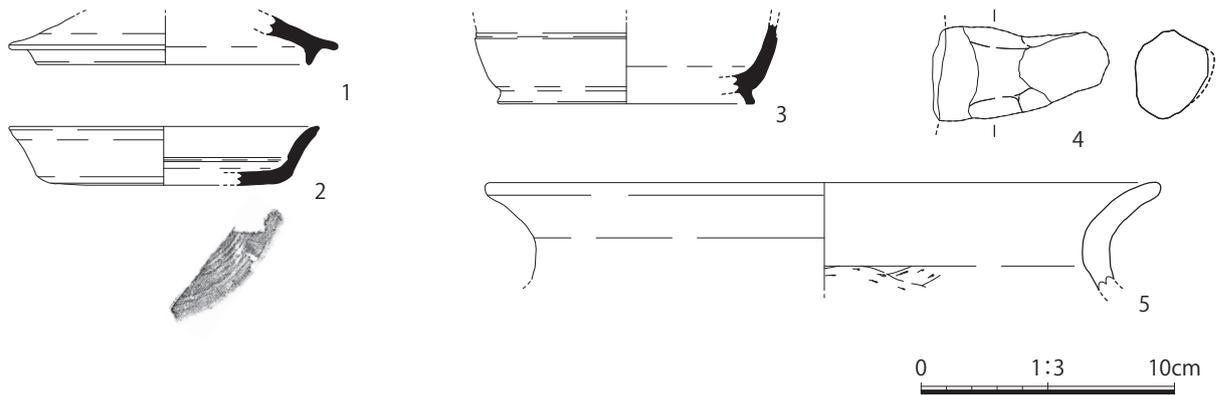
6-1は須恵器蓋環の蓋で、かえりのつく中形の径のものである。つまみは欠損している。古代C分類の蓋I類でAあるいはB型式にあたる。国府編年では蓋環BあるいはCにあたる第1型式に該当するものである。第1型式は7世紀後葉の歴年代が与えられている。6-2は須恵器の皿である。古代C分類の皿I類でB型式にあたる。国府編年では無高台皿と称するもので第3あるいは第4型式に該当するものである。第3型式が8世紀第2四半期、第4型式が8世紀第3～4四半期とされている。6-3は須恵器の壺である。高台が付き、胴部下側に沈線が1条入る。長頸壺か。6-4は土師器で甑の取手である。6-5は土師器の甕の口縁部である。内面頸部以下にケズリ調整が残る。

以上のように、T-1 調査区の遺物包含層には7世紀後葉～8世紀第4四半期の遺物が含まれていることがわかった。

**第2項 T-2 調査区 (第7図)**

調査地の東側に設定した1.5m × 3.0mの調査区である。

現況地表面下18cmまで表土である黒褐色土(第1層)を検出した。第2・3層は現況地表面下18～26cmで検出した暗茶褐色土層で、炭化物を含む。第4層は現況地表面下26～60cmで検出した暗



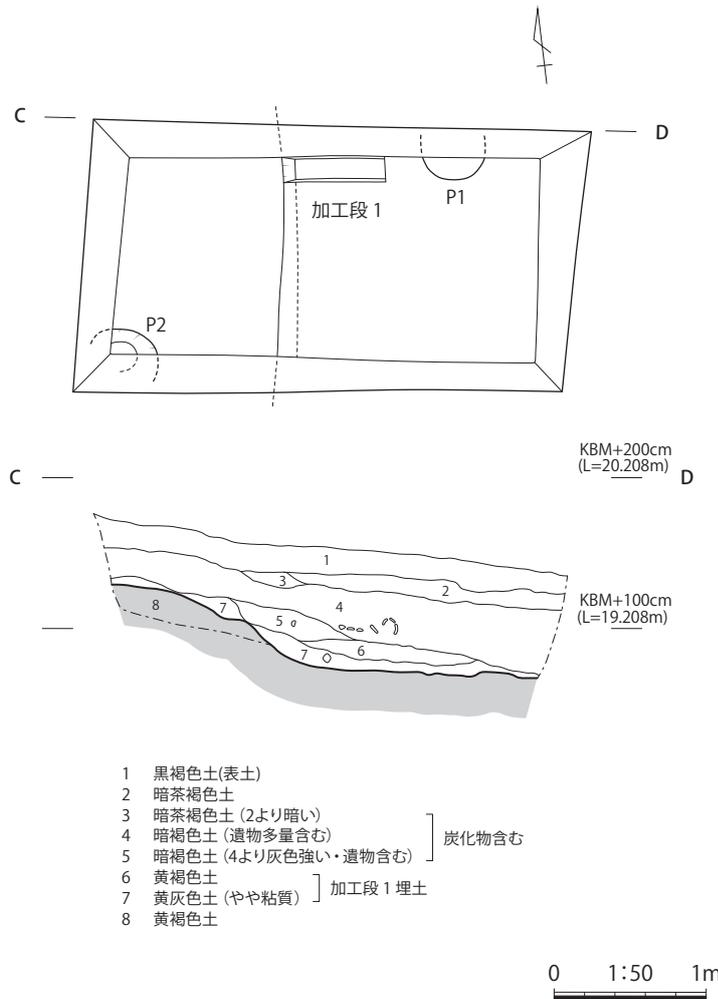
第6図 T-1 出土遺物実測図

褐色土層で、この層には須恵器 (8-5、8-9 を含む) ・土師器片が多数含まれていた。第5層は現況地表面下 45 ～ 55cm で検出した暗褐色土層 (やや灰色が強い) で、第4層と同じく須恵器・土師器片を含む。細片のため図化していないが8世紀代のものと思われる須恵器無高台坏が出土している。第6・7層は現況地表面下 55 ～ 76cm で検出した黄褐色土及び黄灰色土である。細片のため図化していないが、第7層で土師器の土製支脚あるいは甑の取手が出土している。第8層は現況地表面下 76cm の斜面から検出した黄褐色土の地山である。調査区北壁沿いで直径 40cm の土坑 (P1) を、調査区南西隅で直径 50cm の土坑 (P2) をそれぞれ検出し柱穴と判断した。さらに調査区中央部で南北方向に延びる加工段 1 を検出した<sup>(1)</sup>。東側に向かって地山を切るように比高差約 30cm の段差を設けている。細片のため図化していないが、P2 からは土師器片が、加工段 1 からは須恵器片・土師器片が出土した。

第4～7層で出土した遺物は須恵器片からおおむね同時期のものと思われ、土層ごとに時期が分かれるものではない。

### T-2 出土遺物 (第8図)

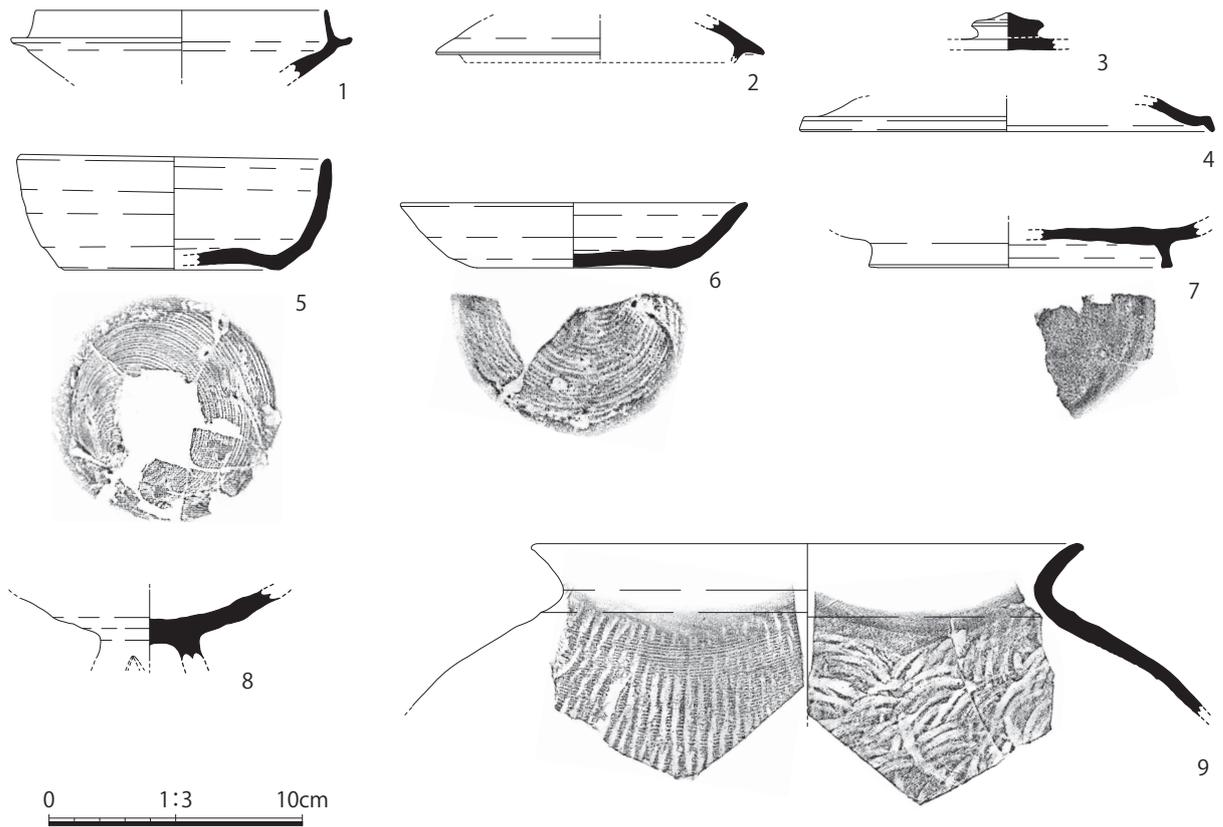
8-1 は須恵器蓋坏の坏身である。蓋をかぶせた状態で焼成したようで受部に重ね焼きの痕跡が残る。大谷編年出雲 4 期にあたり、6 世紀末～7 世紀前葉にかけてのものである。8-2 は須恵器蓋坏の蓋である。おそらくつまみが付くものであるが欠損のため不明である。古代 C 分類の蓋 I 類で A あるいは B 型式にあたる。国府編年では蓋坏 B あるいは C にあたる第 1 型式に該当するものである。第 1 型式は 7 世紀後葉の歴年代が与えられている。8-3 は須恵器蓋坏の蓋つまみ部である。頂部中央の周囲を軽くナデ押さえる算盤玉状を呈するものである。古代 C 分類ではつまみ形態 c2 に属する。このことを勘案すると A4 型式にあたり、端部にかえりがつくものの可能性がある。国府編年では第 1 型式の 7 世紀後葉にあたるものであるか。8-4 は須恵器蓋坏の蓋である。おそらくつまみが付くもので、古代 C 分類の蓋 II 類で外側から端部を面取りする盛り成形と称されるもので C3 型式にあたる。国府編年では蓋坏 C 類に属する S 字状口縁と称されるものである。第 4 型式～第 5 型式にあたるものと思われる。第 4 型式が 8 世紀第 3 ～ 4 四半期、第 5 型式が 8 世紀末～9 世紀前葉という年代が与えられている。8-5 は須恵器の坏である。内面底部に高台が付くものを重ね焼きした痕跡が残る。外面底部は回転糸切り調整で、底部中央が内部から外部へ打突を受けたようである。意図的に欠損を加えられた可能性がある。古代 C 分類の坏 I 類で口縁部は折りを作らない A3 ～ A6 型式にあたるもので



第7図 T-2 調査区 平面図・断面図

ある。国府編年では第3型式から認められるものであるが、第4型式から第5型式にかけて主流となる。第3型式が8世紀第2四半期、第4型式、第5型式は前述のとおりである。8-6は須恵器の皿である。底部は回転糸切り調整である。古代C分類では、内湾気味に立ち上がるA型式にあたる。国府編年では形態から年代を想定することは難しいが、無高台皿が第4型式で出土量が増加する傾向にあるようである。8-7は須恵器の高台付皿である。古代C分類の皿Ⅱ類に属する。皿部が欠損しているため細かい分類は不可能であるが、国府編年では高台付皿が第4型式から新出するため、これ以降のものと考えられる。8-8は須恵器の高坏である。欠損のため1箇所しかスカシが確認できないが、おそらく2方向スカシと思われる。大谷編年では出雲5期あるいは6期にあたるもので7世紀代のものである。8-9は須恵器の甕である。外面は平行タタキ、頸部に近いところにカキ目が施される。内面は同心円状のタタキが施される。

以上のように、T-2調査区には6世紀末～9世紀前葉にかけての遺物が含まれることがわかった。



第8図 T-2 出土遺物実測図

### 第3項 まとめ

調査結果から T-1 調査区では現況地表面下 18cm (KBM+252cm)、T-2 調査区では現況地表面下 26cm (KBM+130cm) より深い場所に密度の濃い遺物包含層が、また T-2 調査区では遺物を伴う遺構が良好に包蔵されていることを確認した。古墳時代後期の遺物が少量含まれるものの、おおむね 8 世紀代の遺構が残されているものと判断できる。隣接する神田Ⅱ遺跡からも同時期の遺物を含む遺構が検出されていることから、今回の開発予定地も神田Ⅱ遺跡の広がりとして取り扱うこととなった。これを受けて本調査を実施した。

註 1) 文化庁文化財部記念物課監修 2010「第Ⅱ章第 4 節弥生時代 B 集落の構成要素」『発掘調査の手引き - 集落遺跡発掘編 -』本文中に「丘陵に立地する遺跡では、斜面に平坦面を確保するために造成をおこなった、段状遺構あるいは加工段などよばれる遺構がある。」とあり、本書では「加工段」と称することとする。

## 第2節 本調査の成果

前述のとおり、試掘調査の結果を受けて本調査を実施した。以下、試掘調査の成果を含めて本調査の成果を述べていく。

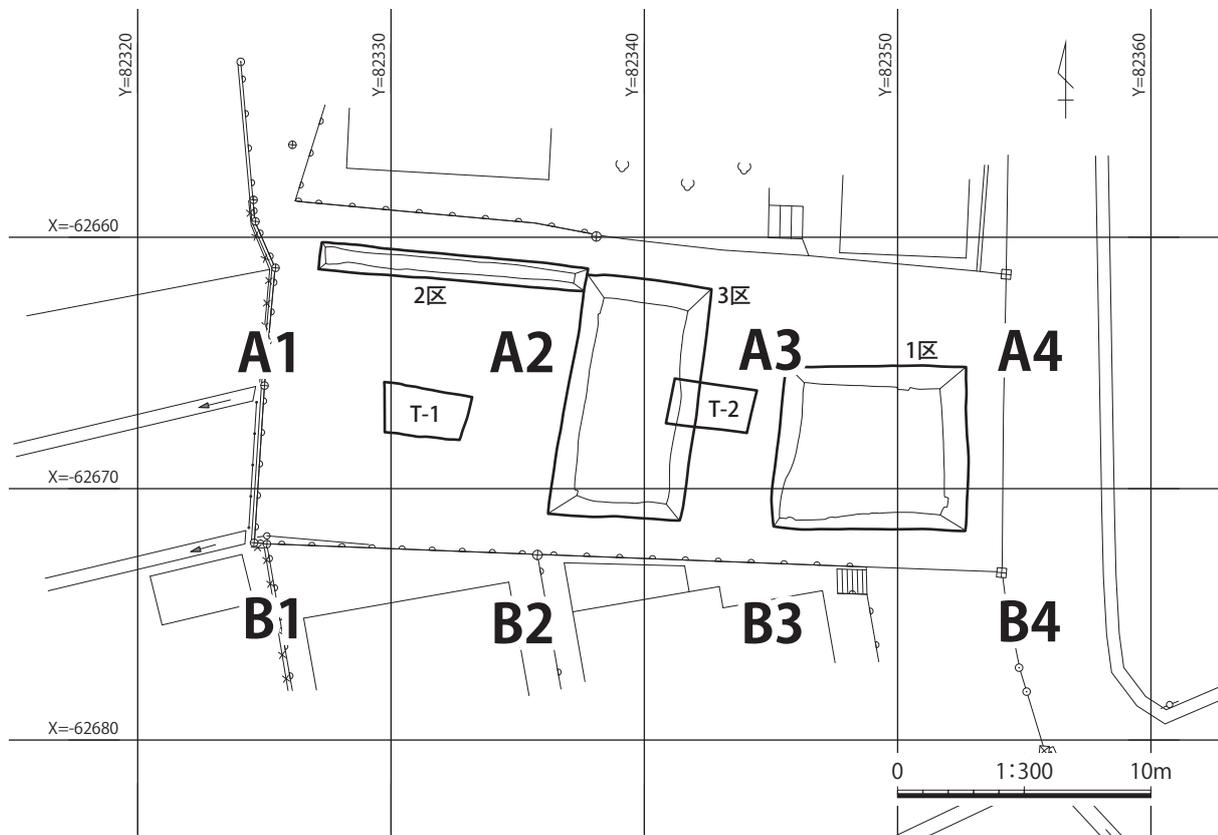
### 第1項 調査方法(第9図)

調査前に地形測量を行った後、表土・近年の畑土はバックホーで取り除き、人力で遺物包含層を掘削、遺構の検出を行った。

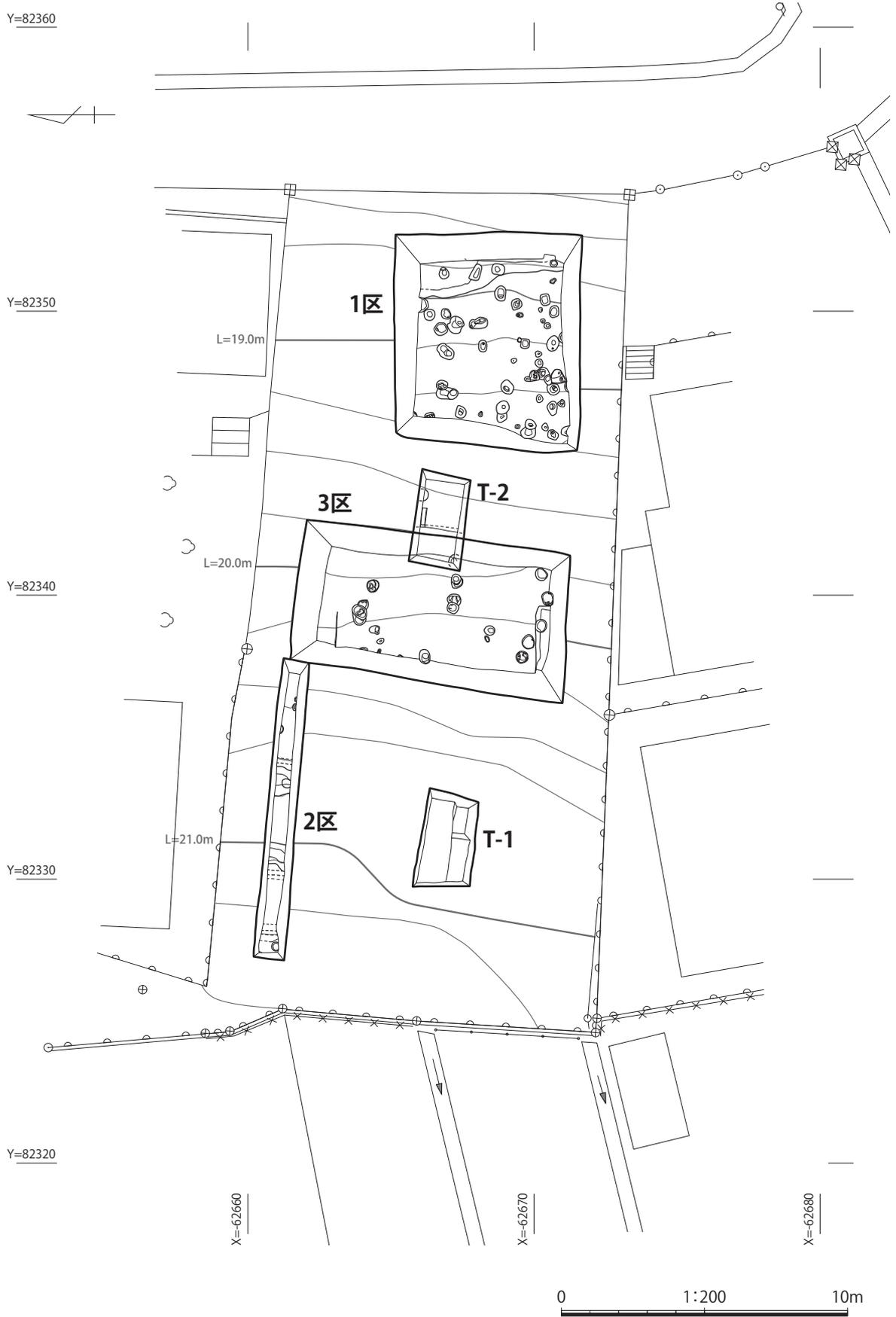
調査区には世界測地系平面直角座標系第三系に基づいた10m四方のグリッドを設定し、遺物の取り上げはグリッドごとに行った。グリッドは北西角X=62660、Y=82320を基点とし、横軸はX座標軸、縦軸はY座標軸に平行とした。列番号は基点から東に向けてアラビア数字順、行番号はアルファベット順に付した。

調査区及び遺構の平面測量はトータルステーションを使用し、その測量図と遺構を照合しながら平面図を作成し、レベルを記入した。土層図はレベルを用いて手測りで縮尺S=1/20を作成し、土色の注記は新版標準土色帖を使用した。

各遺構・土層・全景写真はフルサイズのデジタル一眼レフカメラを使用し、全体写真・土層写真の一部はフィルムカメラにより35mmリバーサルフィルムでの撮影も行った。



第9図 調査グリッド図



第10図 神田II遺跡 現況等高線と調査区位置図

## 第2項 基本層序(第12図)

本調査区は現地表面が標高 18.25m ~ 21.25m で西から東に向かって傾斜している。遺構検出面は標高 17.75 ~ 21.00m で、比高差は約 3m を測る。地山は丘陵南東端(1区南東側)でさらに南東方向に下がっていくようである。これがそのままこの丘陵の南東側に存在する谷底平野にむかって傾斜していくものと思われる。

当調査区の土層堆積状況がよく分かる2区・3区・1区北壁で見ると、第1層~第7層までが現地表面から約 20 ~ 40cmの厚さで存在し、表土と近年までの畑の耕作に係わる土層である。その下の第8層~第12層、第16層~第19層、第22層~第27層が層厚約 10 ~ 40cmの遺物包含層である。この遺物包含層からは主に古代の須恵器・土師器片が出土している。ただし、第13層~第15層は遺物包含層に挟まれるように存在するピットの埋土にあたる。第20層、第21層は加工段に伴うもので、地山漸移層(第28層)が崩れて堆積した土層である。第28層が地山漸移層で、比較的良好に締まった土層である。後述する掘立柱建物跡、加工段、溝、柱穴はこの層の上面から検出した。第29層が地山で、固く締まった土層である。

## 第3項 遺構と遺物

本調査では、遺構が掘立柱建物跡 6 棟(SB01 ~ 06)、加工段 4 基(加工段 2 ~ 5)、溝 1 条(SD01)、掘立柱建物跡に伴わない柱穴 73 基(P3 ~ P75)を検出した。

以下で詳細は述べるが、加工段 5 上面で掘立柱建物跡(SB02-SPO2)あるいはそのほかの柱穴を検出しているほか、土層の観察から加工段 2 ~ 4 では切り合いが認められ、同じような場所で建物の建て替えが繰り返されているようである。

出土遺物は、大半が古代のものであるが、弥生時代後期、古墳時代後期のものがわずかに出土している。遺物包含層から出土したものがほとんどで、遺構に伴うものは少ない。

本項では、これらの検出した遺構について種別ごとに概要を述べ、各遺構から出土した遺物と併せて遺構・遺物の順で報告する。掘立柱建物跡に伴わない柱穴については、遺物を伴う柱穴のみを扱い、出土遺物を掲載することとした。

### 1. 掘立柱建物跡(第11図)

#### SB01(第13図)

**規模と形態** SB01は1区に位置する標高 18.25 ~ 18.75m 付近で検出した梁間 2 間、桁行 3 間の掘立柱建物跡である。この遺構の西側、試掘調査 T-2 調査区で加工段 1 を検出しており、一連のものと考えられる。検出した範囲での規模は、南北棟で 3.25 × 3.9m、面積は 12.68㎡を測る。柱間の芯々距離は、梁行が東から 1.65m、1.6m を測る。桁行が北から 1.44m、1.48m、0.98m を測る。建物の主軸方位は南北で N-2.5° -W である。柱穴は円形または楕円形を呈し、直径は 0.28 ~ 0.68m を測る。柱穴の深さは 0.04 ~ 0.48m である。SPO5 では柱痕跡を確認した。

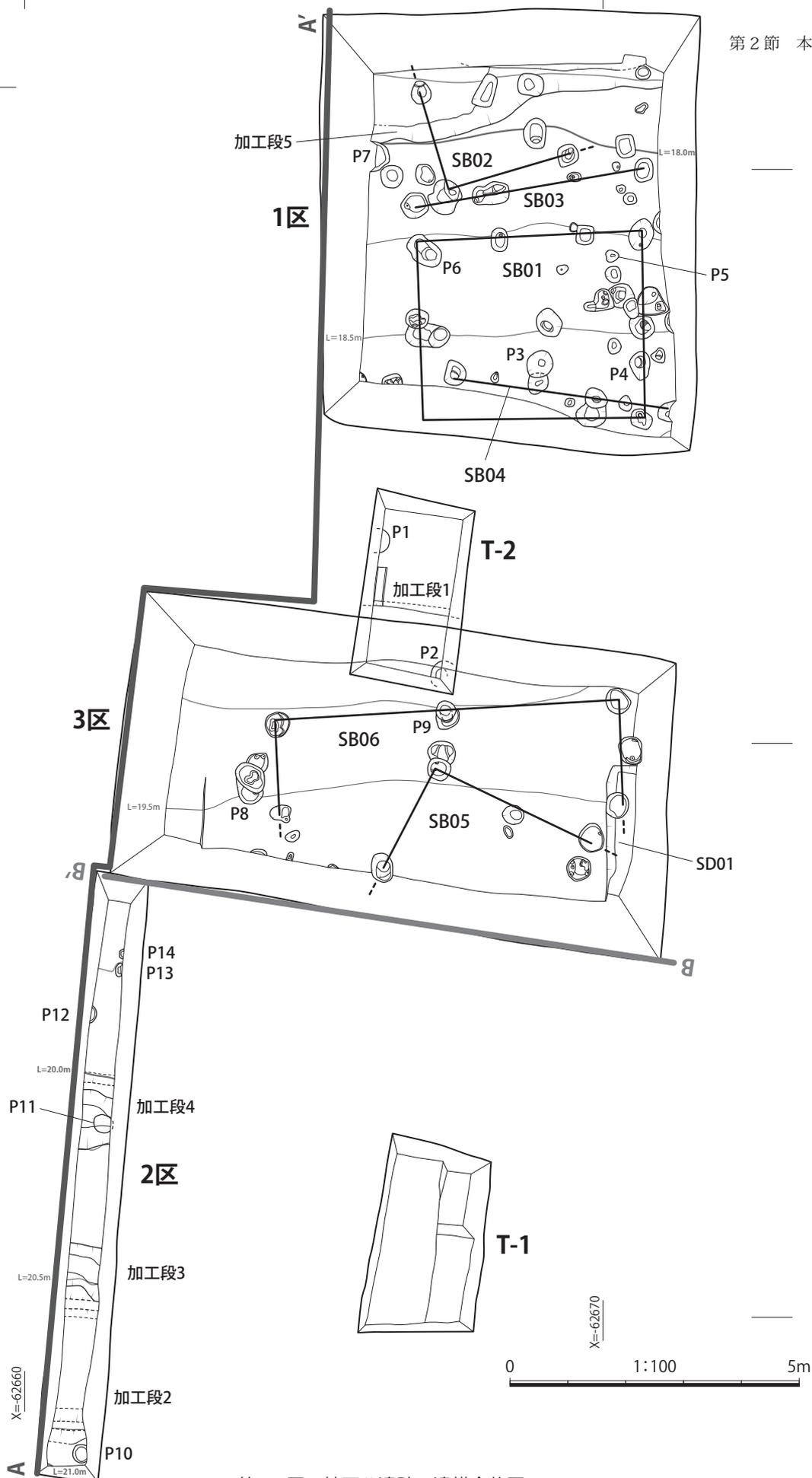
遺物は SPO4 から 2 点、SPO6 から 1 点、SPO8 から 1 点出土した。



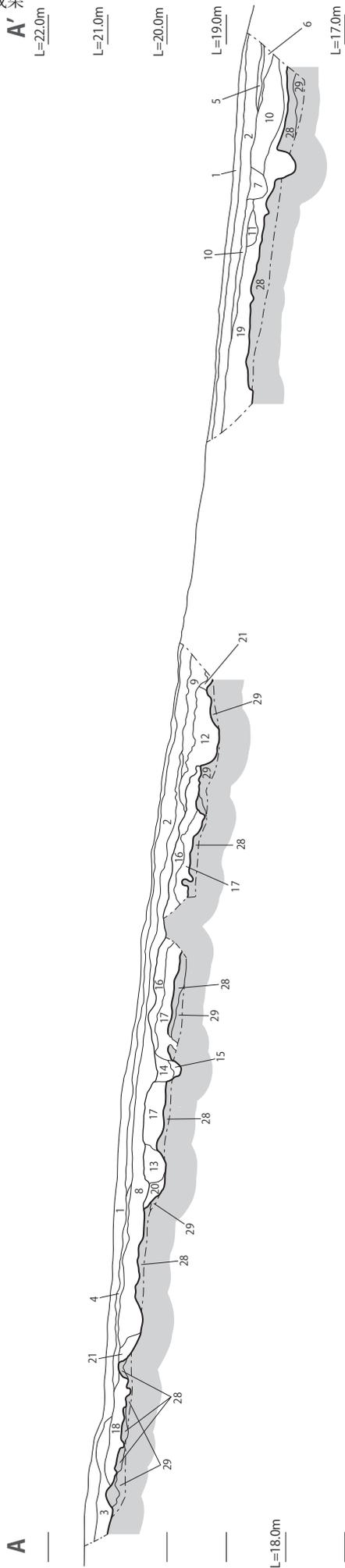
Y=82350

Y=82340

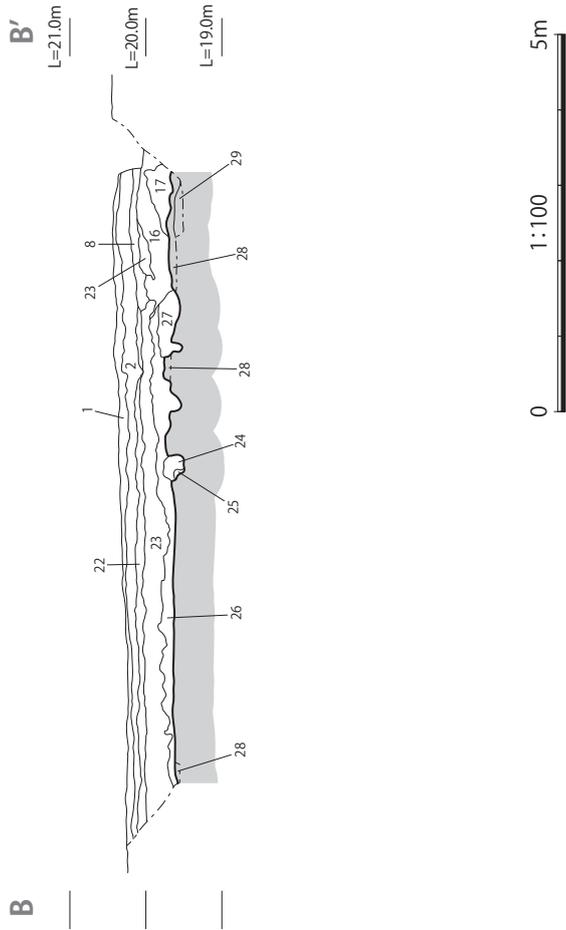
Y=82330

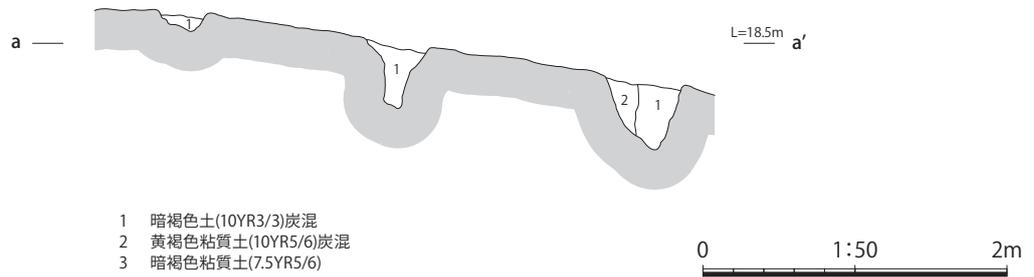
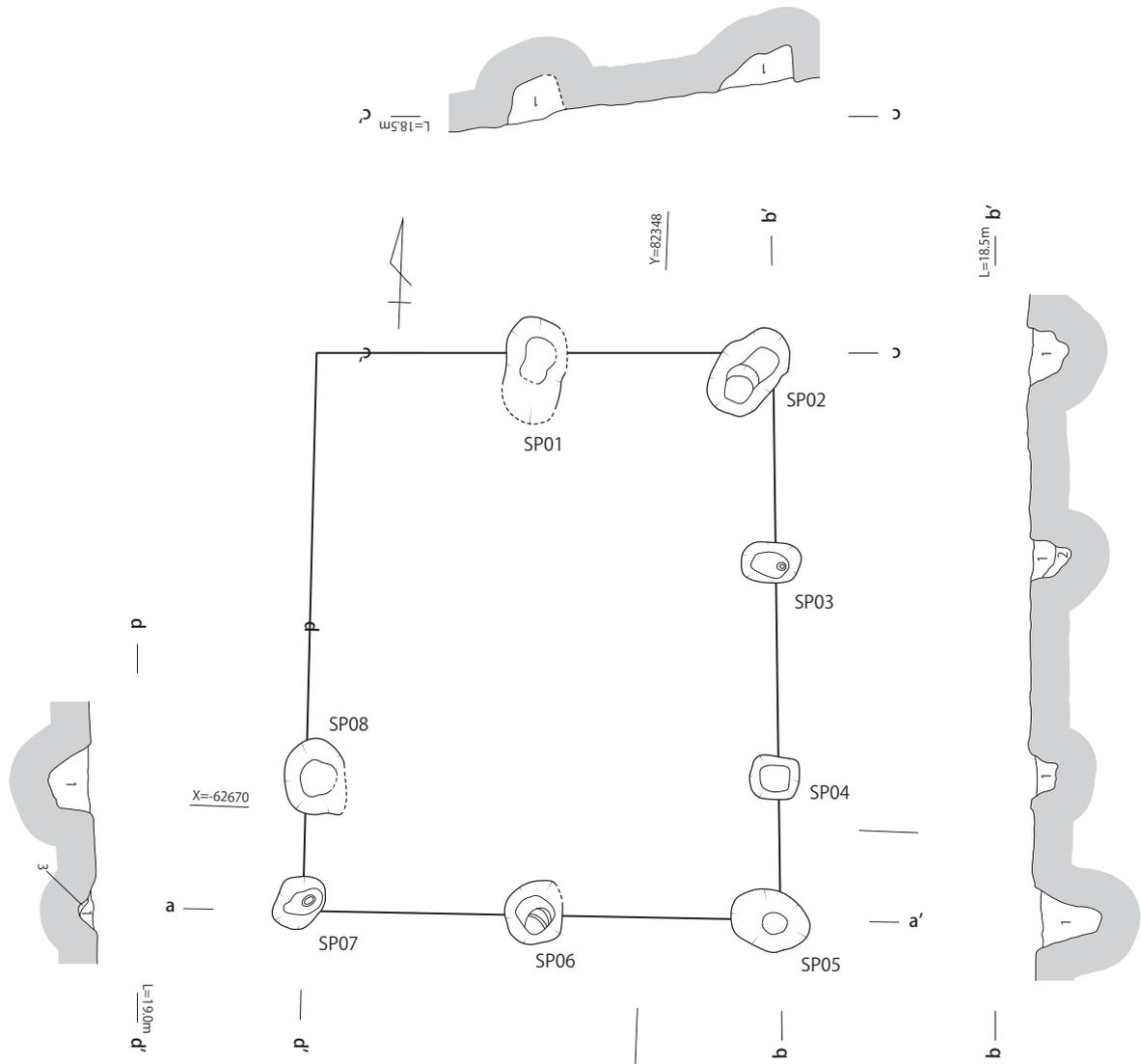


第11図 神田II遺跡 遺構全体図



- 1 表土
- 2 暗褐色粘質土(10YR3/4): 畑土
- 3 褐色土(10YR4/4)に暗黄褐色ブロック混ざる: 畑土
- 4 にぶい黄褐色土(10YR5/4)に明黄褐色ブロック(10YR6/6)少量混ざる: 畑土
- 5 褐色粘質土(10YR4/4)
- 6 褐色土(10YR4/4)に明黄褐色土(10YR7/6)混ざる
- 7 黒褐色土(10YR3/2)に黄色ブロック(2.5Y8/6)少量混ざる(炭・ビニール混): コミ穴
- 8 黒褐色粘質土(10YR3/2)炭混
- 9 黒褐色土(7.5YR3/2)炭・腐土 多量に混ざる
- 10 暗褐色粘質土(10YR3/3)
- 11 暗褐色粘質土(10YR4/4)
- 12 暗褐色粘質土(10YR3/3)
- 13 にぶい黄褐色土(10YR6/4)+褐灰色粘質土(10YR4/1): P11 埋土
- 14 褐灰色粘質土(10YR4/1)+黄褐色土(10YR8/6) } P12 埋土
- 15 暗褐色粘質土(7.5YR3/3)炭混
- 16 にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)炭混
- 17 褐灰色粘質土(10YR4/1)炭混
- 18 灰褐色粘質土(10YR4/2)に少量のにぶい黄褐色土(10YR6/4)混ざる
- 19 暗褐色土(10YR3/3)炭混: 包合層
- 20 にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3) } 加工段埋土
- 21 にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3) }
- 22 にぶい黄褐色土(10YR5/3)
- 23 黒褐色粘質土(10YR3/2)炭混
- 24 暗灰黄色土(2.5Y4/2)
- 25 24と26の混合土
- 26 にぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)
- 27 灰褐色粘質土(7.5YR4/2)
- 28 明褐色粘質土(7.5YR5/6): 地山漸移層
- 29 明褐色粘質土(10YR7/2)混ざる: 地山

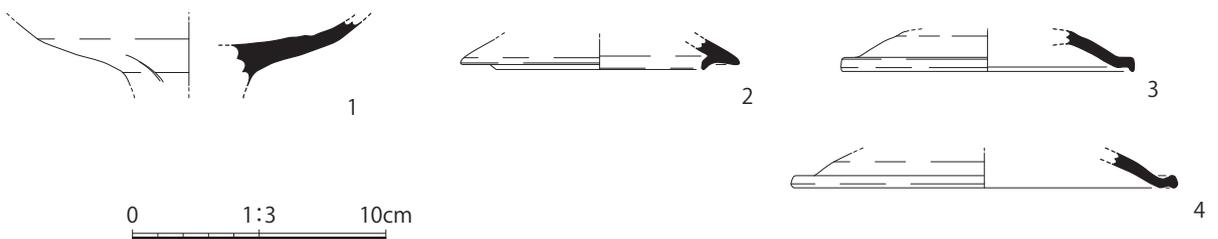




- 1 暗褐色土(10YR3/3)炭混
- 2 黄褐色粘質土(10YR5/6)炭混
- 3 暗褐色粘質土(7.5YR5/6)



第13図 SB01 平面図・断面図



第14図 SB01 出土遺物実測図

### SB01 出土遺物(第14図)

14-1はSP06出土の須恵器の高坏である。坏部の内面に重ね焼きの痕跡が認められ、外周の一部に灰かぶりが残る。おそらく切れ目状のスカシが入るもので、スカシを入れた痕跡が外面に残る。大谷編年で長脚無蓋高坏B6型の出雲6期にあたるものと思われる。年代は7世紀後半のものと考えられる。14-2はSP08出土の須恵器蓋坏の蓋で、かえりのつく径が小さいものである。古代C分類で蓋I類とされるもので、かえりの形態pにあたる。つまみが欠損しているため、おおまかにはA1～A4型式のなかに収まるものと思われる。国府編年では蓋坏B・Cに分類される第1型式に該当するものである。年代は7世紀後葉である。14-3・4はSP04出土の須恵器蓋坏の蓋で、どちらにも外面に重ね焼きの痕跡が認められる。口縁部形態が外面からナデ押すp3形式で古代C分類の蓋II類C3型式にあたるものと思われる。国府編年でいうとS字状口縁と称される蓋坏Cにあたるもので第4～第5型式に該当するものである。年代は8世紀第3四半期～9世紀前葉にかけてのものである。

**遺構の性格と時期** 遺構の時期については、出土遺物から7世紀後半～9世紀前葉と推定される。柱穴の径が比較的小さく、柱間の距離も狭いことから規模の大きな建物は想定できない。国府周辺で確認されている古代の館跡では、柱穴が方形の掘り方を持ち、直径と深さあるいは柱間の距離がもっと大きいことを考えると、一般的な集落で使用される掘立柱建物あるいは建物規模の小さい倉庫といった用途が想定される。

### SB02(第15図)

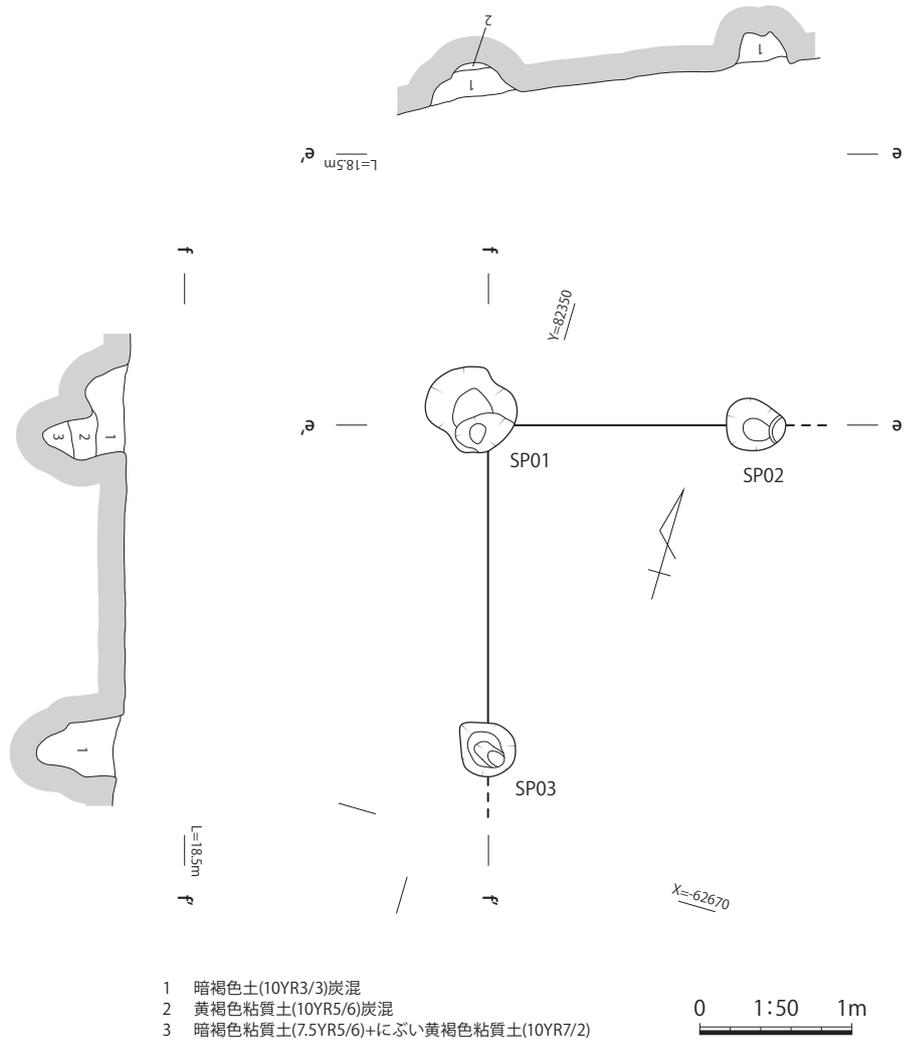
**規模と形態** SB02は1区に位置する標高17.70～18.10m付近で検出した1間以上×1間以上の掘立柱建物跡である。建物の東側が調査区外になるため、実際の規模はもっと大きいものになる可能性がある。検出した範囲での規模は、1.75×2.2mを測り、柱の芯々距離が異なる。建物の主軸方位は南北でN-16°-Wである。柱穴は円形または不整円形を呈し、径は0.35～0.59mを測る。柱穴の深さは0.18～0.54mである。SP02は後述する加工段5と切り合い関係にあり、加工段5(旧)→SP02(新)である。

遺物はSP03から須恵器が5点出土した。

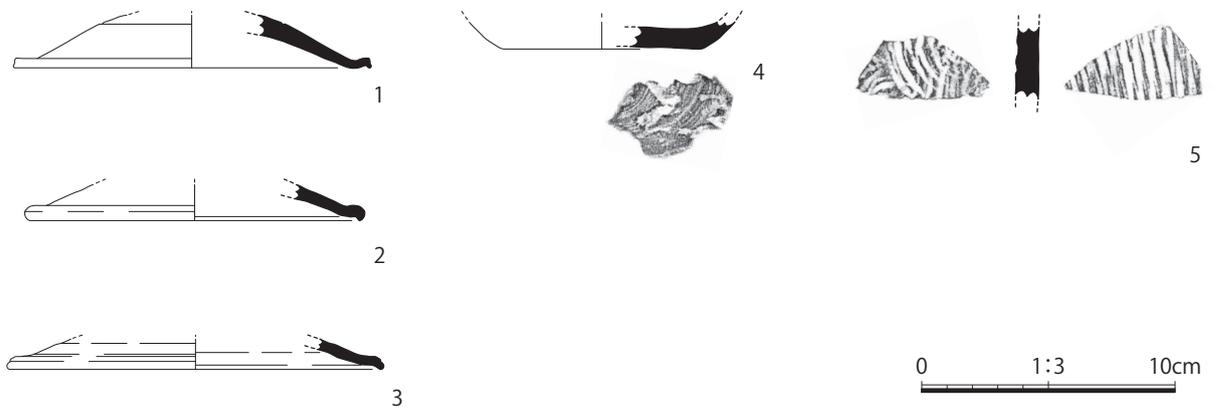
### SB02 出土遺物(第16図)

16-1～3は須恵器蓋坏の蓋である。口縁部形態がp3形式で古代C分類の蓋II類C3型式にあたるものと思われる。国府編年でいうとS字状口縁と称される蓋坏Cにあたるもので第4～第5型式に該当するものである。年代は8世紀第3四半期～9世紀前葉にかけてのものである。16-3は外面口縁部付近に身をかぶせて焼成したような痕跡が残る。16-4は須恵器の坏である。焼成が悪く土師質になっている。古代C分類では坏I類にあたり、おそらく体部が丸みを帯びるA3～A6型式に該当するものと思われる。国府編年では無高台坏Aと称されるもので、第3～第5型式に存在するものである。年代は8世紀第2四半期～9世紀前葉にかけてのものである。16-5は須恵器の甕の胴部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円状のタタキが施される。

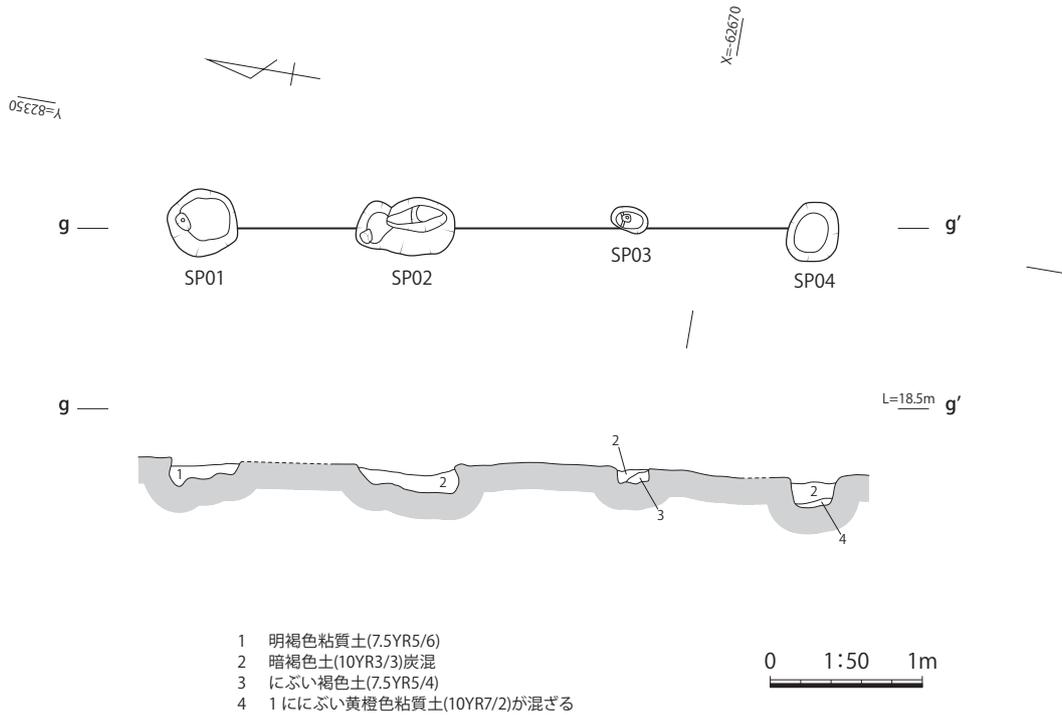
**遺構の性格と時期** 遺構の時期については、出土遺物から8世紀第2四半期～9世紀前葉と推定さ



第15図 SB02 平面図・断面図



第16図 SB02 出土遺物実測図



第 17 図 SB03 平面図・断面図

れる。SB01 と同様に規模の大きな建物は想定できないため、一般的な集落で使用される掘立柱建物あるいは建物規模の小さい倉庫といった用途が想定される。

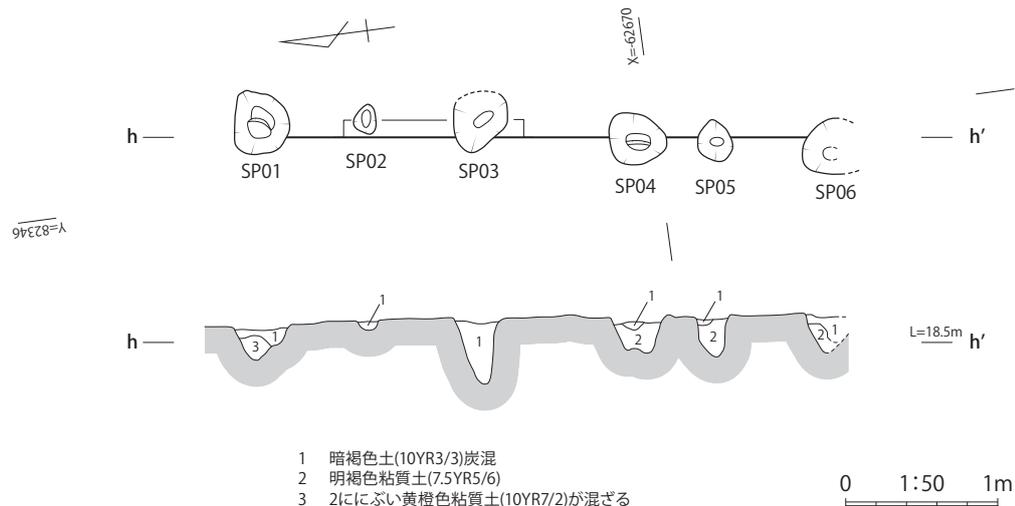
### SB03( 第 17 図 )

**規模と形態** SB03 は 1 区に位置する標高 18.00m 付近で検出した桁行 3 間の掘立柱建物跡である。相対する柱列を調査区内で検出できなかった。柱間の芯々距離は北から 1.48m、1.3m、1.24m で全長 4.02m を測る。柱間の距離に規格性は認められない。柱列の主軸方向は南北で N-9.5° -W である。柱穴は不整円形あるいは楕円形を呈し、直径は 0.16 ～ 0.66m を測る。柱穴の深さは 0.12 ～ 0.2m とかなり浅い。柱穴の上部が削平により失われていると思われる。柱穴からの出土遺物は認められなかった。

**遺構の性格と時期** 遺物の出土がないため、建物の時期は不明である。SB01、SB02 の柱間の距離は短くても 1.5m に近いが、SB03 は SP01-SP02 間が 1.48m と 1.5m に近いものの、そのほかは 1.3m 以下と規模が小さい。このため、SB01、SB02 よりも簡易な建物か、相対する柱列がないとすれば柵列の可能性も考えられる。

### SB04( 第 18 図 )

**規模と形態** SB04 は 1 区に位置する標高 18.60 ～ 18.70m 付近で検出した掘立柱建物跡である。柱間の芯々距離は、北から 0.7m、0.78m、1.0m、0.54m、0.74m を測る。柱列の主軸方向は南北で N-10° -E である。柱穴は不整円形を呈し、直径は 0.15 ～ 0.44m を測る。柱穴の深さは 0.06 ～



第 18 図 SB04 平面図・断面図



第 19 図 SB04 出土遺物実測図

0.43m で SP03 がもっとも深い。SP01-SP02 間と SP04-SP05 間の距離がかなり短いため、SP02 と SP05 は束柱の可能性はある。このことを踏まえると桁行 3 間の建物跡と言える。調査区内に相対する柱列がなく、梁行は不明である。

SP04 から遺物が 1 点出土している。

#### SB04 出土遺物 (第 19 図)

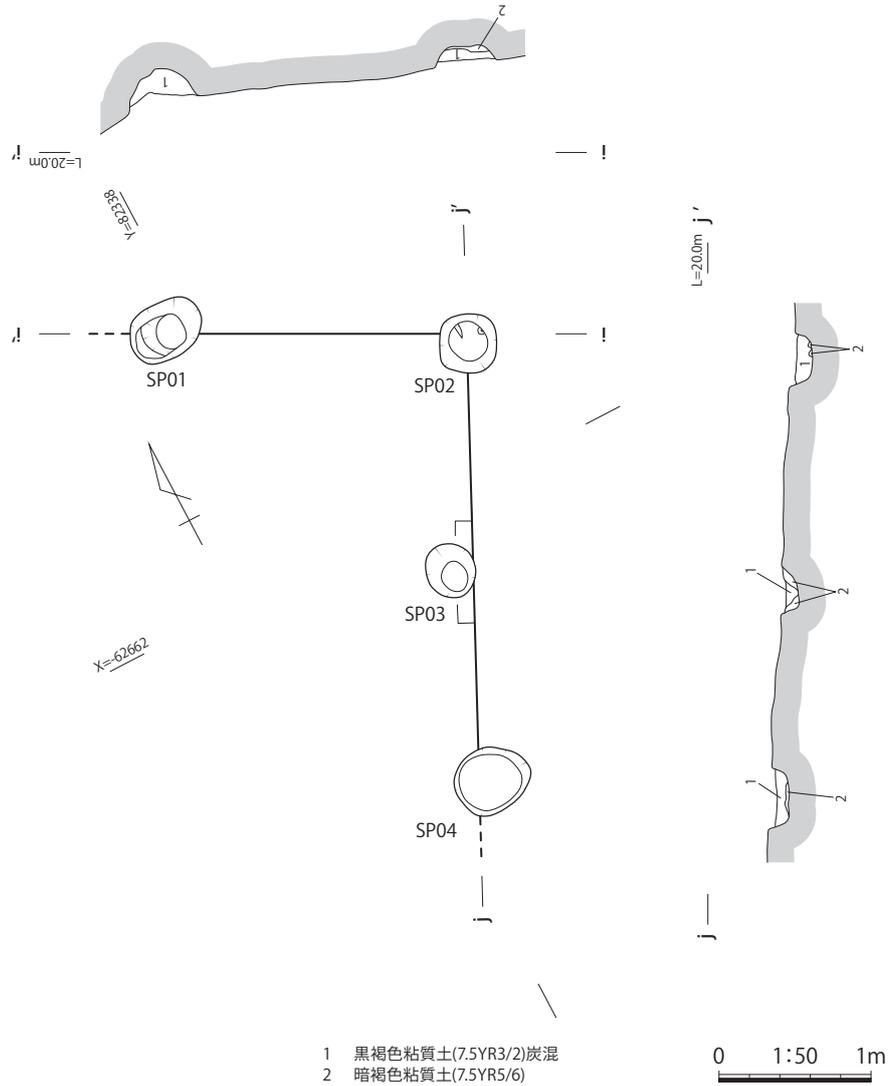
19-1 は須恵器の脚部で器種不明である。内外面ともに回転ナデ調整が施される。蓋坏の坏身にしては器厚が厚く、壺の口縁部にしては作りが雑であるため、脚部と判断した。年代不明である。

**遺構の性格と時期** 年代の分かる遺物の出土がないため、建物の時期は不明である。SP04 と SB01-SP08 の切り合い関係から SB01 より新しいと言える。

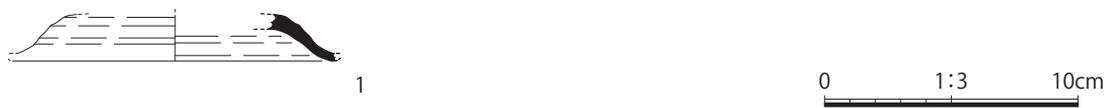
SB03 と同様に柱間の間隔が狭いことから、SB01、SB02 よりも簡易な建物が想定される。また、相対する柱列が調査区内で検出されていないことから柵列の可能性も否定できない。

#### SB05(第 20 図)

**規模と形態** SB05 は 3 区に位置する標高 19.20 ~ 19.70m 付近で検出した掘立柱建物跡である。調査区西側に建物が広がる可能性がある。建物の主軸方向は南北で N-26° -E を測る。梁行 1 間以上、桁行 2 間以上となる。検出規模は、1.94m 以上 × 2.98m 以上、面積は 5.78㎡以上である。梁行は 1.94m で、桁行は北から 1.6m、1.38m を測る。柱穴は円形あるいは楕円形を呈し、直径 0.33 ~



第20図 SB05 平面図・断面図



第21図 SB05 出土遺物実測図

0.52m、深さは0.12～0.26mを測る。柱穴の上部が削平されている可能性がある。

SP01 から遺物が出土している。

**SB05 出土遺物 (第21図)**

21-1 は須恵器の蓋環の蓋である。口縁端部が欠損しているが、古代C分類の蓋Ⅱ類C3型式にあたるものである。国府編年ではS字状口縁を呈する蓋環Cに該当するもので、第4～第5型式にかけてのものと考えられる。年代は8世紀第3四半期～9世紀前葉にかけてのものである。

**遺構の性格と時期** 遺構の時期については、出土遺物から8世紀第3四半期～9世紀前葉と推定される。柱間の距離、柱穴の規模から、SB01と同等の規模の建物が想定される。一般的な集落で使用される掘立柱建物あるいは建物規模の小さい倉庫といった用途が想定される。

#### SB06(第22図)

**規模と形態** SB06は3区に位置する標高19.20～19.30m付近で検出した梁行1間以上、桁行2間の掘立柱建物跡である。建物の検出規模は、1.83m×5.97m、面積は10.93㎡を測る。柱間の芯々距離は、梁行は北側が1.62m、南側が1.83mを測る。桁行は北から2.98m、2.99mを測る。柱列の主軸方向は南北でN-3.5°-Wである。柱穴は不整円形を呈し、直径は0.16～0.66mを測る。柱穴の深さは0.04～0.1mとかなり浅い。柱穴の上部が削平を受けていると思われる。

柱穴からの出土遺物は認められなかった。

**遺構の性格と時期** 遺物の出土がないため、建物の時期は不明である。柱間の距離がもっとも長く、柱穴も比較的大きなものが多い。一般的な集落の建物跡という認識の域を出るものではないが、今回の調査で検出したなかでは、大きな規模の建物である可能性が考えられる。

## 2. 加工段(第11・23図)

加工段は2区で3基(加工段2～4)、1区で1基(加工段5)を確認している。また、前述のとおり、追加調査T-2でも1基(加工段1)を確認している。

加工段2では出土遺物はなく、加工段3と4に伴う遺物が出土しているが、各遺構での遺物の取り上げができなかった。このため、出土遺物については「加工段3・4出土遺物」として、遺構の性格と年代については「加工段2～4」でまとめて述べることにしたい。

### 加工段2

**規模と形態** 加工段2は、加工段3の西端部までとすれば幅約2mの溝状を呈するものである。検出長は南北方向に0.46～0.66mを測る。西側上端部から溝底面までの比高差は44cmを測る。ただし、西側の立ち上がりは、上面に近代以降の畑土が堆積しており、削平を受けた可能性がある。本来ならばもっと比高差があったかもしれない。この加工段2に対応する平坦面が第8層上面となる。この平坦面からは遺構は検出していない。この層上面に近代以降の畑土の堆積があるため、削平を受けた可能性がある。

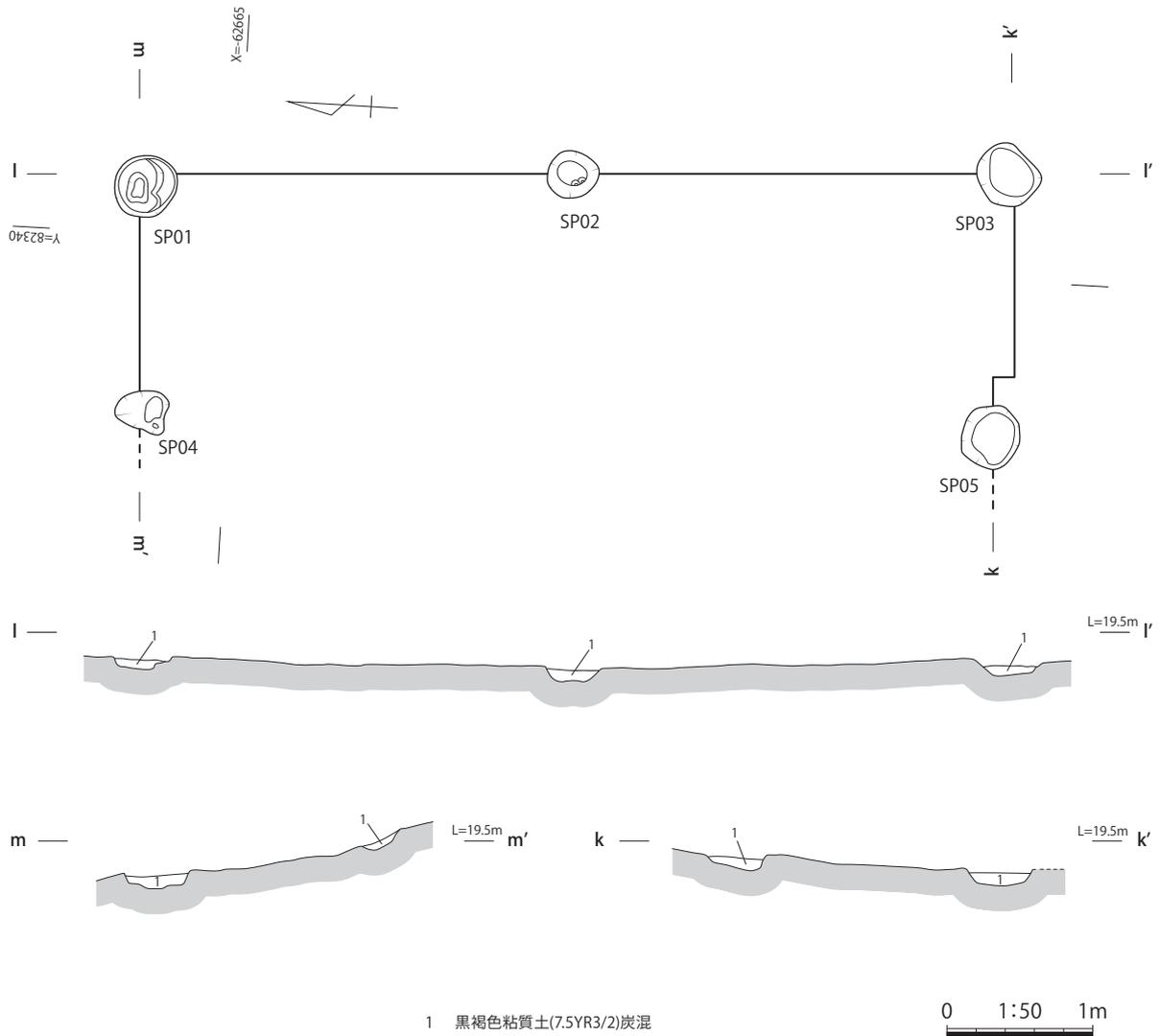
加工段2の埋土である第18層中からは出土遺物は認められなかった。

### 加工段3

**規模と形態** 加工段3は、幅約1.2mの溝状を呈するものである。検出長は南北方向に0.56～0.6mを測る。西側上端部から溝底面までの比高差は42cmを測る。この加工段に対応する平坦面が第16、17層である。この層上面から柱穴P11～P14が掘り込まれている。

### 加工段4

**規模と形態** 加工段4は、幅約1.0mの溝状を呈するものと思われる。検出長は南北に0.52～0.54mを測る。この加工段に対応する平坦面は地山漸移層である。この面に対応する遺構は認めら

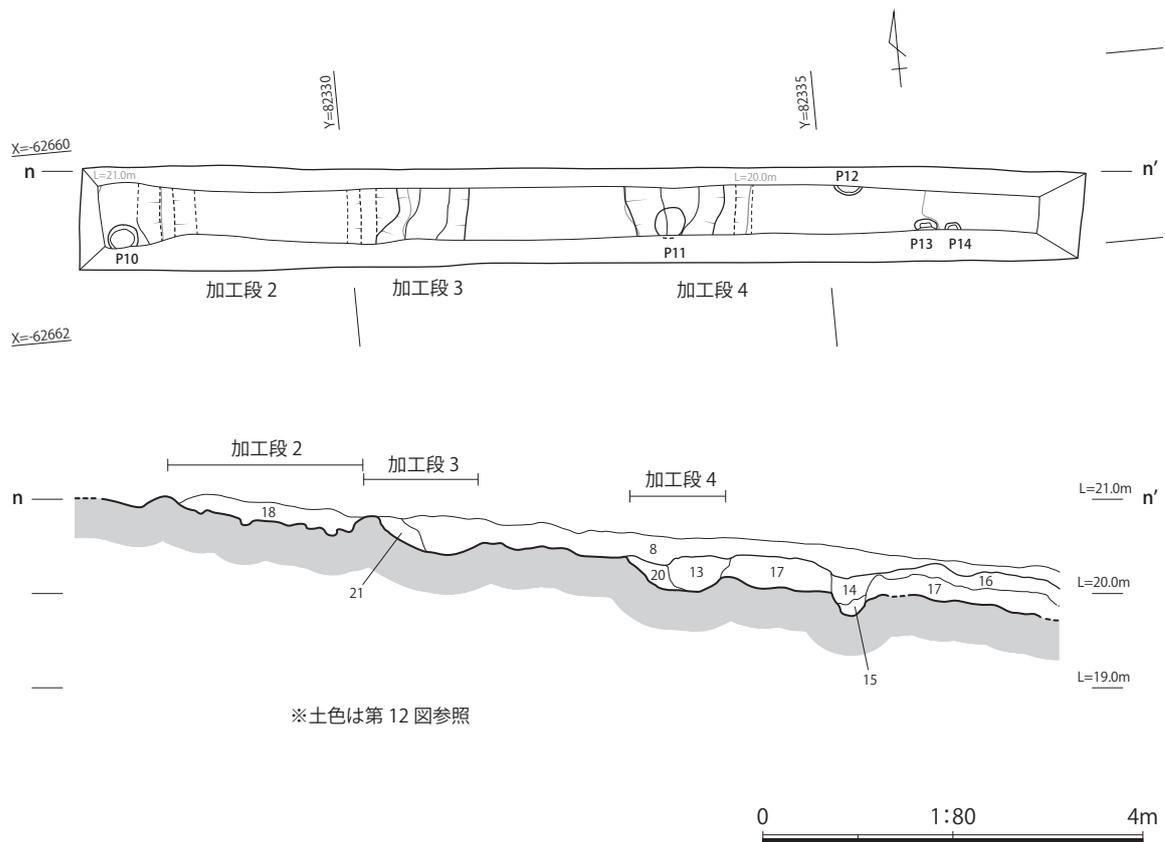


第22図 SB06 平面図・断面図

れなかった。

### 加工段3・4出土遺物(第24図)

24-1は須恵器の坏である。底部欠損のため調整が不明であるが、おそらく古代C分類坏I類A2あるいはA3型式にあたるものと思われる。国府編年では無高台坏Aの第2型式に該当するものと推測する。第2型式が7世紀末葉～8世紀第1四半期にあたる。24-2は須恵器の高台付坏あるいは皿である。古代C分類では坏II B類あるいは皿II類にあたるものと思われる。国府編年では蓋坏Cの高台付坏あるいは蓋皿あるいは高台付皿Aで、第3～5型式に当てはめられるものである。年代は8世紀第2四半期～9世紀前葉になる。24-3～5は須恵器の甕片である。3は肩部、4は胴部中央、5は胴部下側の破片である。いずれも外面に平行タタキ、内面に同心円状のタタキが施される。24-6～7は土師器の甕片である。いずれも内面調整は頸部以下にケズリ調整が施される。24-7は外面頸部から肩部にかけて縦方向のハケ目がやや残る。肩部から胴部にかけての張りが緩いため、古くても古墳時代終末、おおむね古代にかけてのものと考えられる。24-8は用途不明の白来待石の石片である。手斧痕が残る3面の加工面が認められる。白来待石は古墳時代の石棺に使用されたり、中世の中頃



第23図 加工段2～4 平面図・断面図

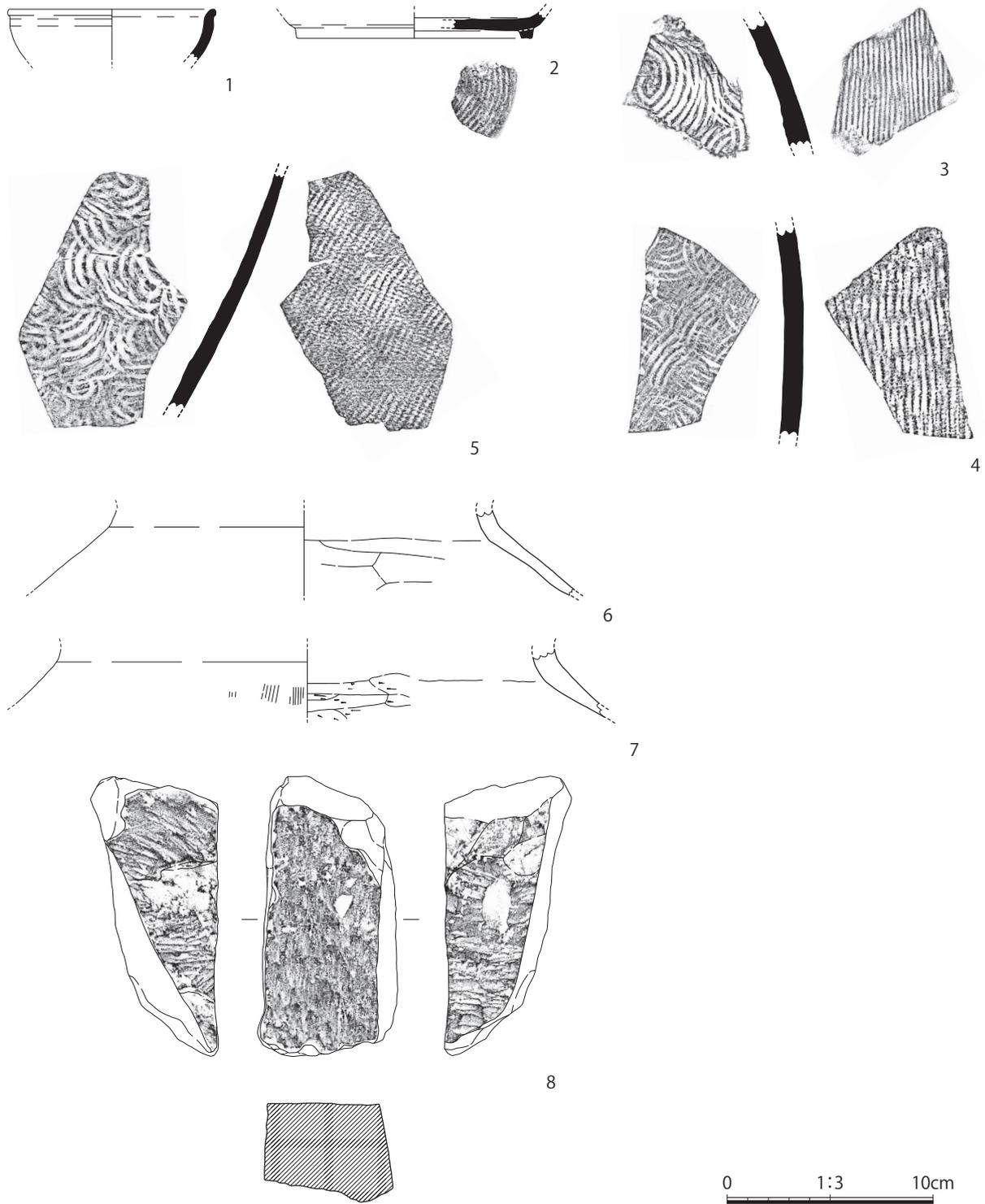
からは五輪塔で使用される例があるが、形状と加工痕から石棺材使用とも五輪塔使用のものとも言い難い<sup>(1)</sup>。

**加工段2～4の性格と時期** 狭小な調査範囲であったため、これらの加工段に対応する建物跡が検出できていない。しかし、加工段に対応する建物があったと考えれば、少なくとも3棟の建物跡が存在している可能性が高い。時期については、加工段2では出土遺物がないため、時期不明である。加工段3と4では各遺構での遺物の取り上げができなかったが、7世紀末葉～9世紀前葉にかけて造られたものと考えられる。土層の観察から加工段4のあとに加工段3が造られていることが分かる。また、加工段2は加工段3埋土である第8層上面を生活面として使用したとすれば、加工段2が最も新しいと考えられる。加工段4→加工段3→加工段2という推移が想定される。

### 加工段5(第25図)

**規模と形態** 1区東端で検出したもので検出長は南北に約5.5mを測る。調査区外に向かって東側に下がっていくようである。北側の比高差は34cm、南側では比高差が18cmとなっている。北側と南側で加工段に切り合いがあった可能性が考えられるが、検出面の精査では判別できなかった。この加工段の埋土上面でSB02に伴う柱穴(SB02-SP02)を検出していることから、SB02より古いものと思われる。出土遺物は認められなかった。

**遺構の性格と時期** SB02が出土遺物から8世紀第2四半期～9世紀前葉と推定されるため、これより古いものと思われる。この加工段に対応する建物が調査区東側に存在するものと考えられ、遺跡の



第24図 加工段3・4出土遺物実測図

範囲がさらに東側に広がることを示唆するものである。

### 3. 溝(第11図)

溝は3区で1条を確認している。

### SD01(第26図)

**規模と形態** 3区南端で検出している。溝は調査区外の西側にさらに長く延びる。また、溝の横断

にあたる南端の立ち上がりも調査区外で確認できなかった。検出長は東西方向に約 2.8m、検出幅約 0.7m、深さ 0.18m を測る。この溝の埋土上面で、SB06 に伴う柱穴 (SB06-SP05) を検出している。

遺物は弥生土器が 1 点出土している。

#### SD01 出土遺物 (第 27 図)

27-1 は弥生土器の甕の口縁部である。風化しているものの、口縁部外面に凹線文がやや残る。また、頸部内面はおそらくケズリ調整が施されたようである。このことから、松本編年 V -1 様式にあたる弥生後期のものと思われる。

**遺構の性格と時期** SD01 は東向きの斜面に対し、東西方向に長軸をもち、他で検出した南北方向に長軸をもつ加工段とは様子が異なる。切り合い関係から、SB06 よりは古い時期の遺構と言える。1 点しか出土していないが、弥生時代後期の遺構の可能性はある。

#### 4. 柱穴 (第 11 図)

建物としての復元ができなかったが、遺物を伴う柱穴とそれに伴う遺物について述べる。

##### P3(第 28・29 図)

**規模と形態と出土遺物** 1 区で検出したもので、やや楕円形を呈する。直径 0.44 ～ 0.50m、深さ 0.37m を測る。SB04 -SP03 を切るように存在する。出土遺物 29-1 は須恵器高坏の坏部と思われる。大谷編年の A7 型に属する出雲 5 期～ 6 期にかけてのものであろうか。そうであれば、7 世紀前半から中葉にかけてのものと言える。

##### P4(第 28・29 図)

**規模と形態と出土遺物** 1 区で検出したもので、楕円形を呈する。直径 0.35 ～ 0.50m、深さ 0.42m を測る。出土遺物 29-2 は須恵器の坏である。古代 C 分類坏 I 類で、底部が欠損しているが、おそらく A3 ～ A5 型式にあたるものと思われる。国府編年では無高台坏 A とされる第 3 型式～第 5 型式に該当するものであろう。8 世紀第 2 四半期～ 9 世紀前葉にかけてのものである。

##### P5(第 28・29 図)

**規模と形態と出土遺物** 1 区で検出したもので、不整形円形を呈する。直径 0.20 ～ 0.22m、深さ 0.15m を測る。出土遺物 29-3 は須恵器の甕の肩部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円状タタキが施される。

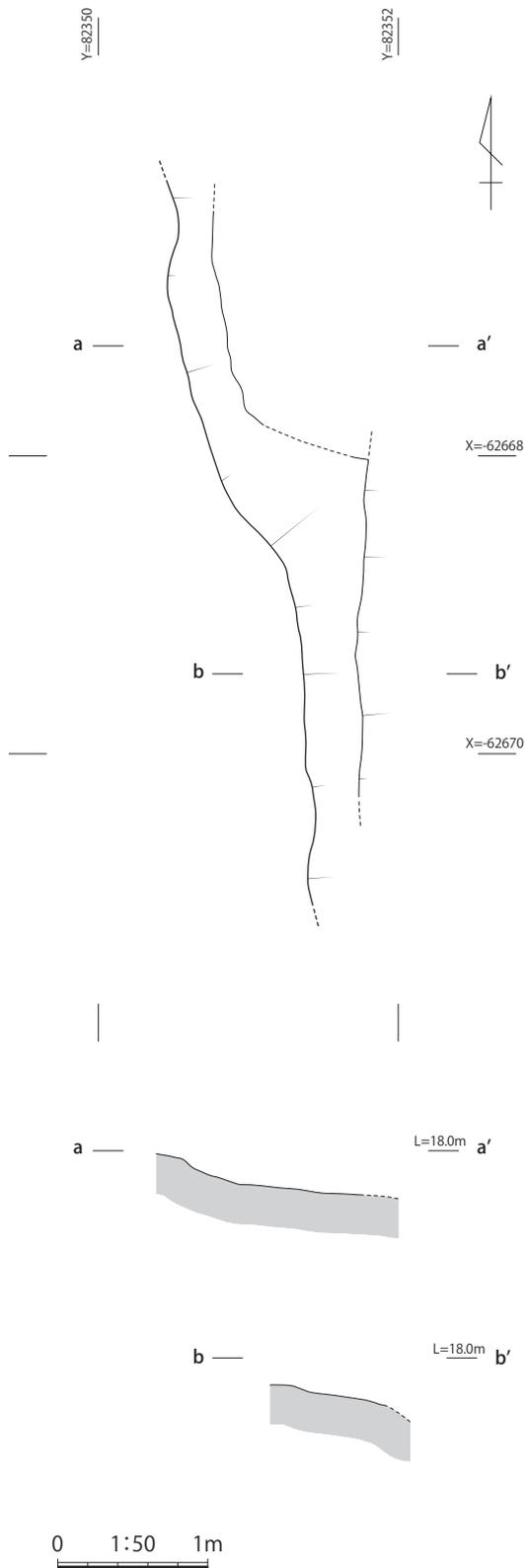
##### P6(第 28・29 図)

**規模と形態と出土遺物** 1 区で検出したもので、不整形円形を呈する。直径 0.39 ～ 0.44m、深さ 0.44m を測る。SB01-SP02 を切って存在する。出土遺物 29-4 は土師器の竈のひれ部である。体部とひれ部の接合部に指頭圧痕が残る。

##### P7(第 30・31 図)

**規模と形態と出土遺物** 1 区で検出したもので、北半分は調査区外になる。おそらく円形を呈する。直径 0.54m、深さ 0.1m を測る。加工段 5 を切って存在する。

出土遺物 31-1 は須恵器の小壺と考えられる。



第25図 加工段5平面図・断面図

**P8(第30・31図)**

**規模と形態と出土遺物** 3区で検出した。おそらく楕円形を呈するが他の柱穴に切られて失われている。直径は0.42～0.56m、深さ0.17mを測る。出土遺物31-2は須恵器の甕底部である。大谷編年という出雲5期あるいは6期にあたるものと思われる。おおむね7世紀代のものと考えられる。

**P9(第30・31図)**

**規模と形態と出土遺物** 3区で検出した楕円形を呈するものであるが、SB06-SP02に切られており一部欠損している。直径0.45～0.33m、深さ0.1mを測る。出土遺物31-3は須恵器の甕で胴部中央あたりの破片と思われる。外面は平行タタキ、内面は同心円状のタタキが施される。

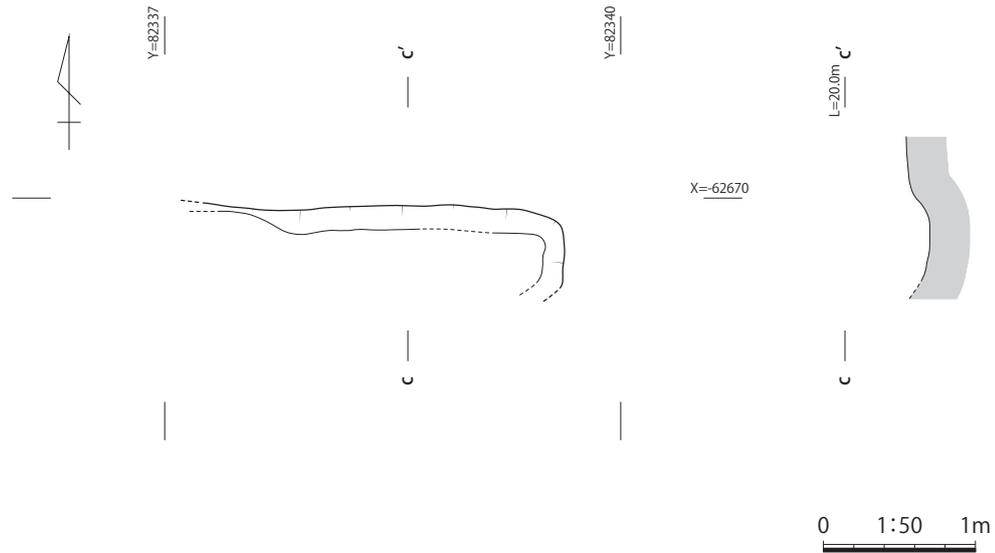
**P10(第30・31図)**

**規模と形態と出土遺物** 2区で検出した円形を呈するものである。南端が調査区外のため一部検出できていない。直径0.32m、深さ0.1mを測る。出土遺物31-4は須恵器の甕の肩部である。焼成時の灰がかかっている。外面は平行タタキの上からカキ目、内面は同心円状のタタキが施される。31-5は土師器甕の口縁部である。風化が激しいが、内面頸部にケズリ調整が施されたようである。

**5. 包含層出土遺物(第32～34図)**

ここでは1区と3区の第19層、第22～27層(第12図参照)から出土した遺物を掲載した。

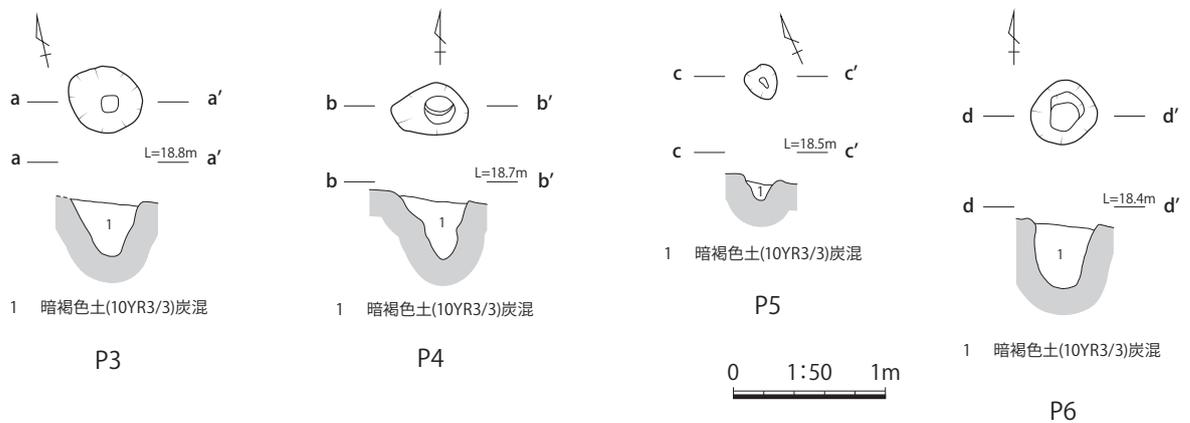
32-1・2は須恵器の蓋坯の坯身である。大谷編年では出雲3期あるいは4期にあたるものと思われる。6世紀後半～7世紀



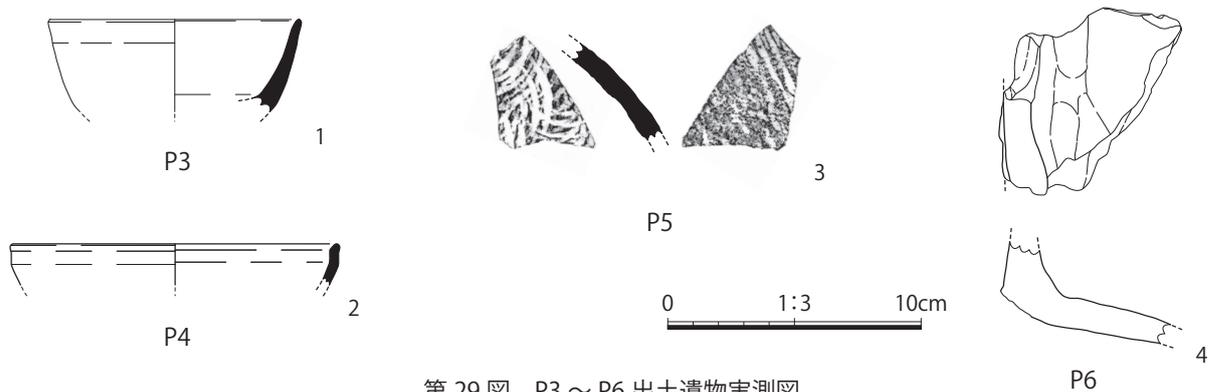
第26図 SD01 平面図・断面図



第27図 SD01 出土遺物実測図



第28図 P3～P6 平面図・断面図



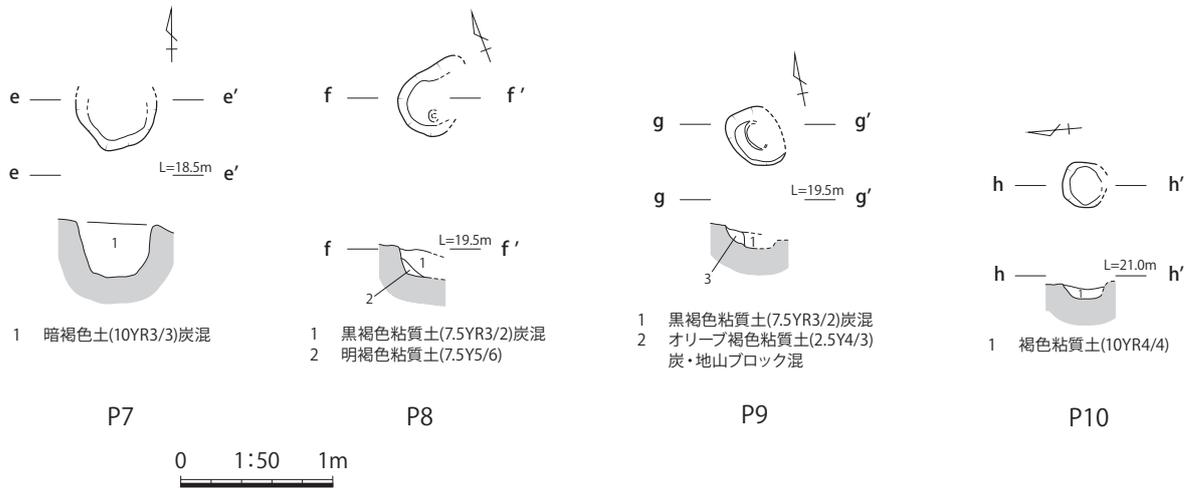
第29図 P3～P6 出土遺物実測図

前葉にかけてのものであろう。

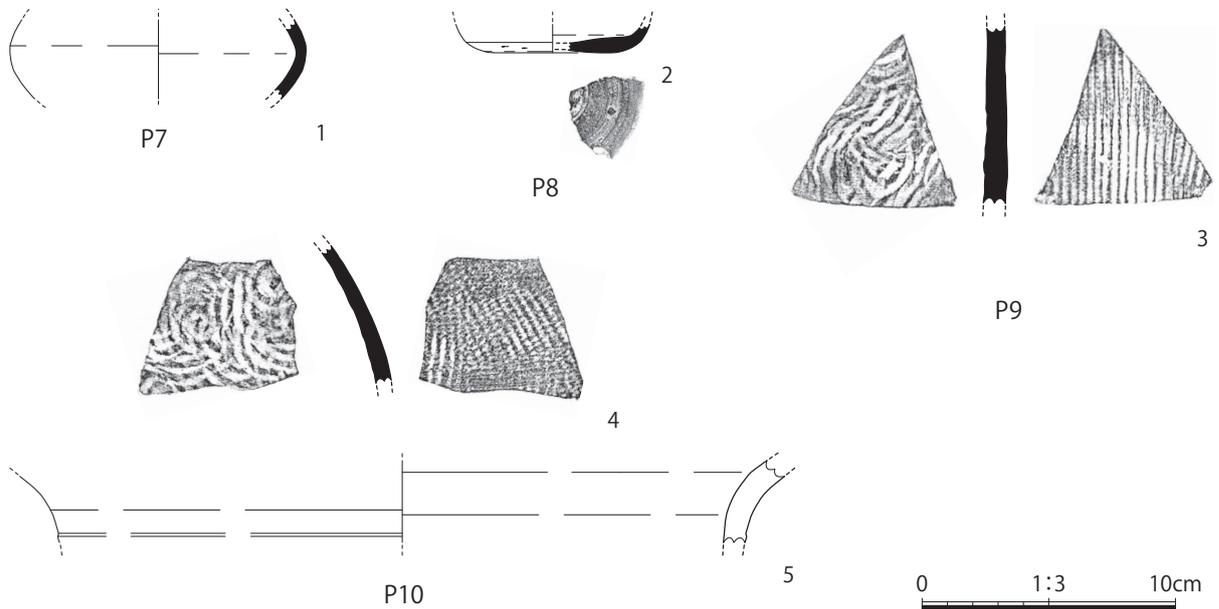
32-3～11は須恵器の蓋環の蓋である。32-3・4は口縁内側に身受けのかえりをもつもので、いずれもつまみとかえり端部が欠損している。古代C分類では、蓋I類A1～A4型式にあたるものである。最大径が小径であることから、乳頭状つまみが付いていたことが想定される。国府編年では、蓋環Bの第1型式に該当するものと考えられる。年代は7世紀後葉である。32-5・6はつまみ、かえり部が欠損しているが、最大径がおそらく小径になる乳頭状のつまみをもつものであろう。古代C分類では、蓋I類A1～A4型式にあたるものである。国府編年では、蓋環Bの第1型式に該当するものと考えられる。年代は7世紀後葉である。32-7は須恵器の蓋環の蓋、つまみ部である。古代C分類のつまみ形態では、頂部をわずかに凹ませるボタン状b2にあたるものである。この形態のつまみをもつのは蓋I類A3型式、蓋II類D1b型式、D2b型式がある。国府編年では蓋環Cの第1型式、第4～5型式に存在する形状である。前述のとおり、第1型式は7世紀後葉、第4～第5型式は8世紀第3四半期～9世紀前葉である。32-8は内外面、断面にも自然釉がかかっており、割れてから被熱したようである。古代C分類では、外側から端部を面取りする盛り成形p1で、蓋II類C2型式あるいはD2a型式、D2b型式にあたる。国府編年では、蓋環Cで口縁部端部の屈曲が弱くなる第3型式に該当するものと思われる。年代は8世紀第2四半期である。32-9・10は、古代C分類で蓋II類C3型式にあたるものである。国府編年では、蓋環CのS字状口縁と称されるもので、第4～第5型式にあたる。年代は8世紀第3四半期～9世紀前葉である。32-11は、つまみと口縁部が欠損している。天井部に回転ヘラケズリの際に付いた沈線が残る。復元すると直径が約15cm以上と大形のものになる。

32-12～19は、須恵器の無高台坏である。32-12・13は古代C分類坏I類A3型式にあたるものと思われる。国府編年では、無高台坏Aで第3型式にあたるもので、年代は8世紀第2四半期である。32-13は外面におそらく同器種による重ね焼きの痕跡が残る。32-14は体部上半部が欠損しているが、底部から丸みを帯びて立ち上がること、底部外面に糸切り調整を施すことから、国府編年無高台Aに属するものと考えられる。第3～5型式にあたる。年代は8世紀第2四半期～9世紀前葉にかけてのものである。32-15～17は、体部上半部が欠損しているため断言できないが、底径が比較的大きいことから、古代C分類坏I類のB1あるいはB2型式の可能性はある。国府編年では無高台坏Bの可能性が考えられる。無高台坏Bであれば、第4型式以降のものとなる。32-18・19は、古代C分類坏I類のB1あるいはB2型式である。国府編年では無高台坏Bの第4型式にあたる。年代は8世紀第3～4四半期である。

32-20～24は須恵器の高台付坏である。32-20・21は古代C分類坏II類A2a型式にあたる。国府編年では蓋環C第2型式にあたり、年代は7世紀末葉～8世紀第1四半期である。32-22は古代C分類坏II類A2b型式にあたる。国府編年では蓋環C第2型式にあたり、年代は7世紀末葉～8世紀第1四半期である。内面底部の焼成痕から同一器種の重ね焼きをしたことが分かる。また、高台の内側に茶褐色の付着物がある。32-23は外面底部に静止糸切りの後ナデ調整を施す。古代C分類坏II類B2型式にあたる。国府編年では蓋環Cの第3型式にあたると思われる。年代は8世紀第2四半



第30図 P7～P10 平面図・断面図



第31図 P7～P10 出土遺物実測図

期になる。32-24 は外面底部に回転糸切り調整を施す。古代C分類環Ⅱ類B3 型式にあたる。国府編年では蓋環Cの第4 型式、年代は8 世紀第3～4 四半期である。

32-25 は須恵器の無高台皿である。古代C分類皿Ⅰ類で、底部から口縁部に向かって直線的に外傾しながら立ち上がるC2 型式に該当するものである。国府編年では無高台皿は第2 型式から存在している。しかし、第2 型式での出土例が少なくこの時期に一般化するものか疑問とされていること、<sup>(3)</sup> 回転糸切り調整が第3 型式から主体となってくることを加味すると、第3 型式～第5 型式のものとしておきたい。年代は8 世紀第2 四半期～9 世紀前葉である。

32-26・27 は須恵器の高台付皿である。32-26 は転用硯とまでは言えないが、内面が一部ツルツルしている。古代C分類皿Ⅱ類で、高台が欠損しているが、底部から口縁部にかけて湾曲、外反しながら立ち上がるB1b～B2b 型式にあたるものと考えられる。国府編年では第5 型式、8 世紀末～9 世紀前葉のものである。32-27 は古代C分類皿Ⅱ類で、体部が欠損しているが、高台が低く底部の最外

周より内側に付く B2a 型式、B2b 型式、C2a 型式あるいは C2b 型式にあたるものと考えられる。国府編年では蓋皿あるいは高台付皿 A と称される。第 4～第 5 型式に存在し、年代は 8 世紀第 3 四半期～9 世紀前葉である。

33-1 は須恵器の低脚無蓋高坏あるいは台付壺の可能性も考えられる。高坏であれば、大谷編年では出雲 5 期にあたるものである。台付壺であれば、8～9 世紀代のものである。

33-2～4 は須恵器の高坏である。33-2 はスカシが 1 か所残る。大谷編年で長脚無蓋高坏 B6 型の出雲 6 期にあたるものと思われる。年代は 7 世紀後半のものと考えられる。33-3 は脚部片で、スカシは確認できない。内面は回転させながらしぼりを加えた痕跡が残る。古代 C 分類の高坏 III A 型式にあたる。国府編年では高坏 B と称される第 3～5 型式のものである。年代は 8 世紀第 2 四半期～9 世紀前葉である。33-4 は脚部片である。

33-5 は 9 世紀代の瓶あるいは小壺と思われる。

33-6 は須恵器の臙の肩部と思われる。33-7 は須恵器の長頸壺の肩部と思われる。自然釉がかかる。33-8 は須恵器の平瓶あるいは壺と考えられる。断面 M 字状の突帯が付く。外面にカキ目が残る。平瓶であれば国府編年の第 5 型式に認められる。年代は 8 世紀末～9 世紀前葉である。

33-9・10 は須恵器の壺である。33-9 は肩部片である。ロクロ成形で内面はナデ調整、外面にカキ目が施される。33-10 は高台が付くロクロ成形のもので、外面にカキ目が施される。

33-11～17、34-1 は須恵器の甕である。33-11～13 は甕の口縁部である。33-14 は甕の頸～肩部で外面に自然釉が付着する。33-15 は肩部で外面は平行タタキ、内面は同心円状タタキが施される。33-16 は胴部で外面は格子タタキ、内面は青海波状タタキが施される。33-17 は胴部の底部付近で、外面は平行タタキ、内面は同心円状タタキが施される。34-1 は胴部の底部付近で、外面は平行タタキのちカキ目、内面は同心円状タタキが施される。

34-2～6 は土師器である。34-2・3 は甕である。内面頸部以下にケズリ調整が施される。34-4 は甕のひれ部で、指頭圧痕が残る。34-5・6 は甕の取手である。

34-7 は用途は不明であるが、還元焼成した窯体状の破片である<sup>(4)</sup>。

34-8 は灰釉陶器の碗である。内外面に一部釉薬が残る。出雲国府では 9 世紀前半から灰釉陶器の利用が始まり、11 世紀以降には数点しか見られなくなることが分かっており、ここで出土したものも 9 世紀前半～11 世紀の間のものと考えられる。

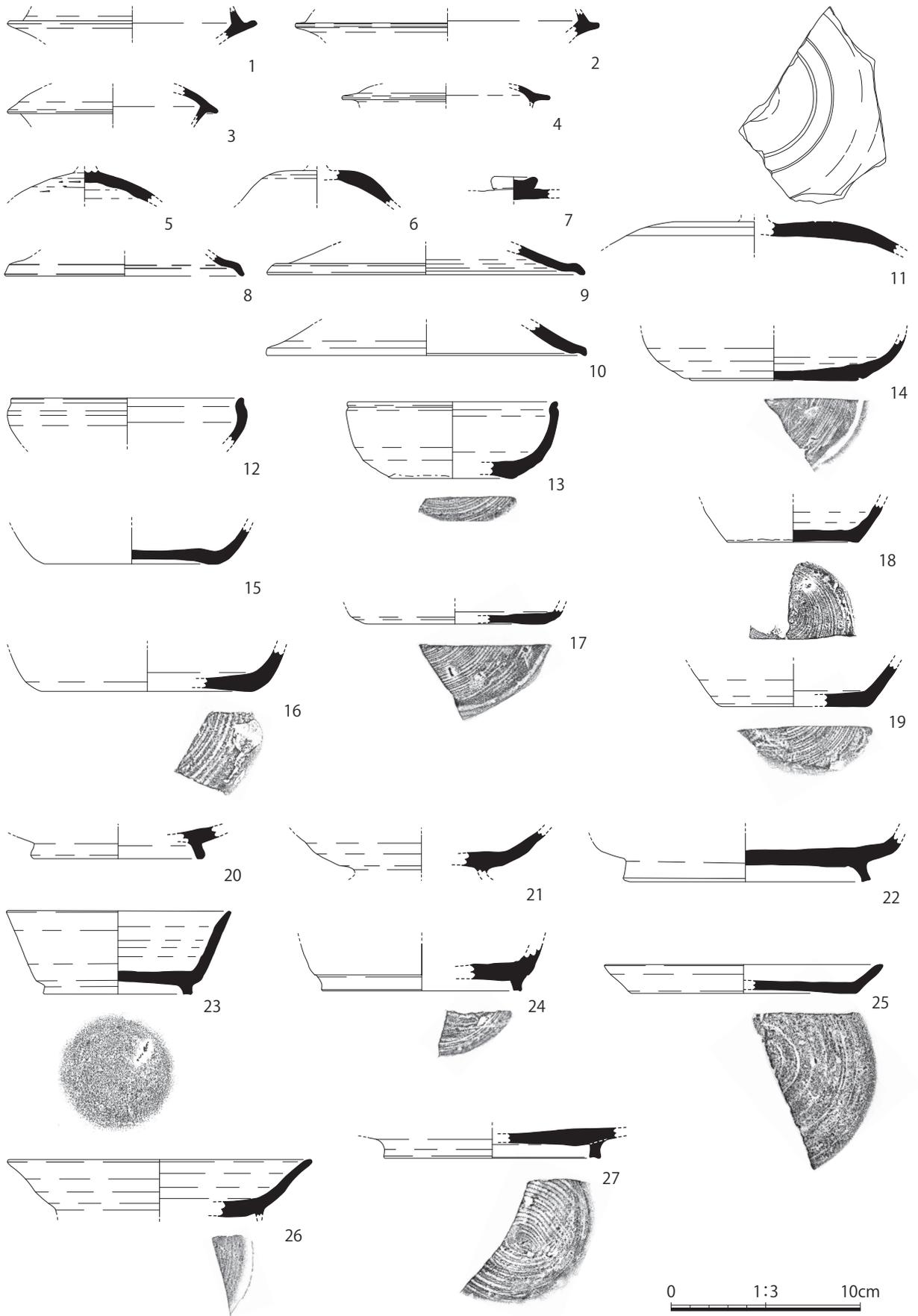
34-9・10 は玉髓片である。34-9 は 2 次加工のある石器である。サイコロ状の玉髓片の縁辺に 2 次加工とつぶれが確認できる。近世の火打石ではない<sup>(5)</sup>。34-10 は 2 次加工がある剥片である。

#### 第 4 項 まとめ

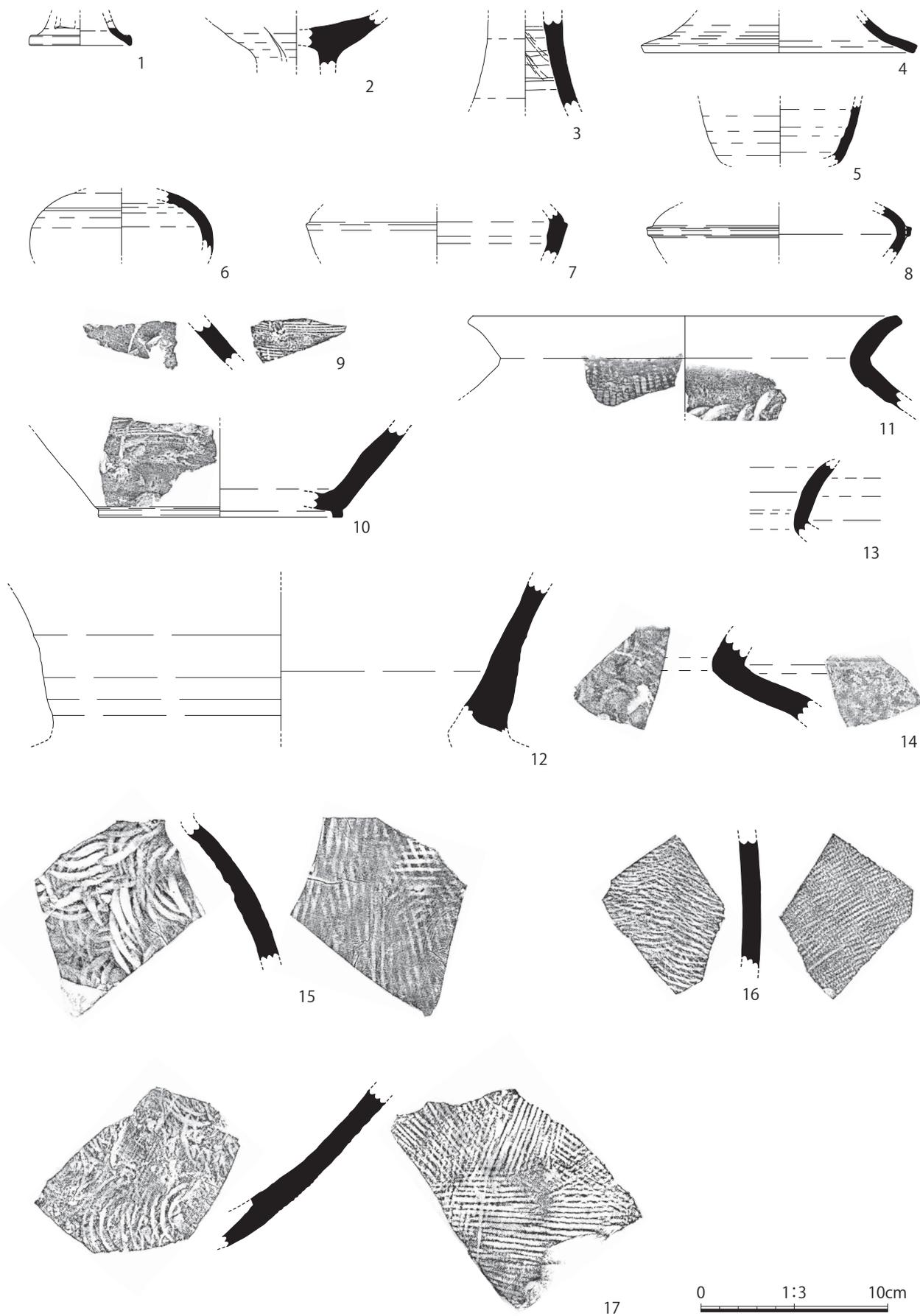
以上のように、本調査では、遺構が掘立柱建物跡 6 棟、加工段 5 基、溝 1 条、掘立柱建物跡に伴わない柱穴 73 基 (試掘調査で検出したものをあわせると 75 基) を検出した。

溝 (SD01) から弥生時代後期の土器が出土しており、本調査ではもっとも古い遺構の可能性もある。

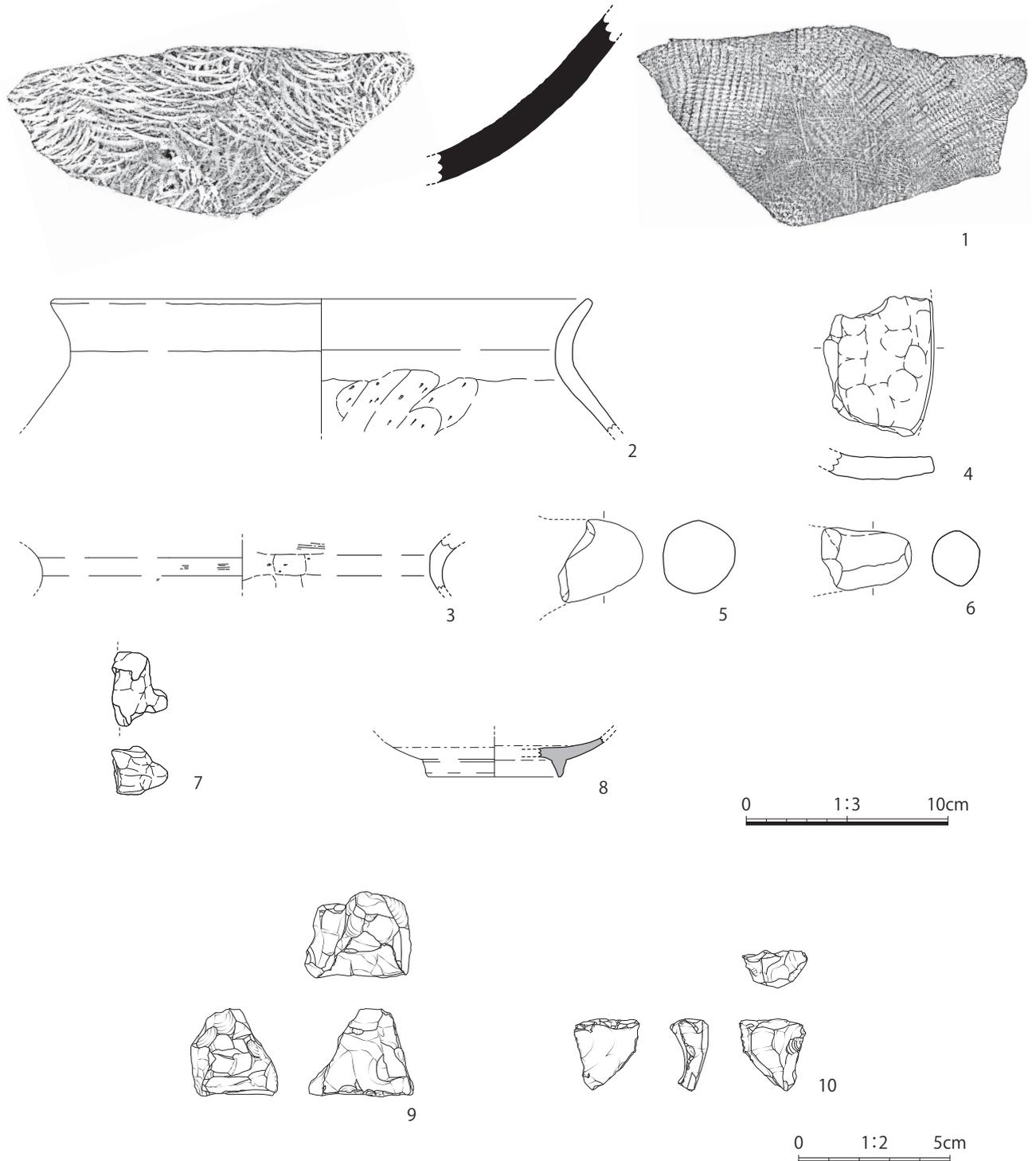
掘立柱建物跡については、各遺構ごとの出土遺物の年代と切り合い関係は、SB01 が 7 世紀後半～



第 32 図 包含層出土遺物実測図 (1)



第33図 包含層出土遺物実測図(2)



第34図 包含層出土遺物実測図(3)

9世紀前葉、SB02が8世紀第2四半期～9世紀前葉、SB03が不明、SB04も不明だがSB01より新しい。SB05が8世紀第3四半期～9世紀前葉、SB06が不明である。このことから、古い遺物を含む順で並べるとSB01→SB02→SB05(SB04はSB01より新しい。)となるが、いずれも9世紀前葉までの遺構と言える。

加工段2～4については、前述のとおり、切り合い関係から加工段4→加工段3→加工段2とい

う変遷が推測される。加工段3・4出土遺物からは、7世紀末葉～9世紀前葉にかけて造られたものと考えられる。加工段5は、切り合い関係からSB02より古いものであることが分かっている。

そのほか柱穴から出土した遺物は、古いもので7世紀前半～中葉のものがあるが、主として9世紀前葉までのもので、掘立柱建物跡で認められるような遺物構成である。

遺物包含層の出土遺物は、古くは6世紀後半～7世紀前葉のものがあるが、おおむね8世紀から9世紀前葉にかけてのものが中心である。新しいもので灰釉陶器が1点出土しているが、前述のとおり、9世紀前半から11世紀の間までのものである。

以上のことから、本調査地では、弥生時代後期に一度人的活動があり、その後、古墳時代後期の6世紀後半から7世紀代にかけて序々にその活動が活発になり始める。そして、8世紀から9世紀前葉に本格的な集落が営まれるようになり、9世紀前半以降はここでの活動が衰退していったことが推察される。

ただし、本調査地で検出した建物跡は、斜面に設けられた小規模なものであるため、集落の本体ではない可能性が考えられる。

註1) 西尾氏・丹羽野氏のご教示による。

註2) 文化庁文化財部記念物課監修2010「第Ⅱ章第4節弥生時代 B集落の構成要素」『発掘調査の手引き-集落遺跡発掘編-』本文中に「この種の遺構は、柱穴の有無や、段となっている壁際の溝の有無など、そのありかたは多様である。掘立柱建物にともなう空間であった場合や、物置のような空間であった場合など、各種の役割が推測されている。」とある。

註3) 島根県教育委員会2013『「第10章第2節3)出雲国府跡出土土器の型式設定と実年代 出雲国府第2型式」史跡出雲国府跡9-総括編-』

註4) 丹羽野氏のご教示による。

註5) 註4)と同じ。

## 第4章 総括

神田Ⅱ遺跡は今回の調査地を含め、これまでに6次に渡り調査が行われており(表1・第35図)、総括にあたって、第1節で第1・2次調査の概要、第2節で第3・4次調査の概要に触れておく。第3節では遺構の変遷と様相を整理したのち、出雲国府、古代山陰道(正西道)と神田Ⅱ遺跡の関連性について若干の考察をしておきたい。

### 第1節 第1・2次(平成16年度)の調査成果

当時の調査概要報告書などを基に調査成果を紹介する。遺構図は当時の概報図面を再トレースしたものを、遺物は遺構に伴うものを中心に遺跡の様相を表すものを抽出して掲載している。

#### 第1項 調査方法と基本層序(第36図)

調査地の現況は畑地で、西から東に向けて緩やかに下がり、さらに調査区の西側では北から南に向けて緩やかに下がる。現地表面の標高は北西部で25.3m、南東部で21.7mを測る。

調査では10mグリッドを設定して、東からA→E区、F→J区、西端部を進入路区として調査を実施した。土層堆積状況は、調査区西部では過去の削平の影響により、畑の耕作土の直下はすぐ地山(第4層)で、この地山面が遺構検出面となっている。しかし、東部では耕作土の下に遺物包含層(第12・15層など)が見られ、この包含層の下が遺構検出面(第10・13層上面)となっていた。遺構検出面は褐色を呈し、炭化物の混入が見られたが、遺物は包含していない。標高の低い東部一帯はわずかな谷状の地形を呈しており、遺跡より古い段階で自然堆積した土層(第6次調査検出の地山漸移層にあたるもの)であると考えられる。

なお、遺物の取り上げについて、緊急調査ということもあり、柱痕と抜取痕との区別はできていない。

#### 第2項 遺構と遺物(第36図)

調査では、掘立柱建物跡5棟(SB01～05)、土墳墓1基(SK02)が確認された。このほか多数のピットを検出している。

以下、遺構ごとに説明をしていく。

##### 1. 掘立柱建物跡

##### SB01(第37図)

**規模と形態** 梁間2間、桁行4間の南北棟で、主軸はN-10°-Wを測る。柱穴はいずれも隅丸方形

表1. 神田Ⅱ遺跡調査実績一覧

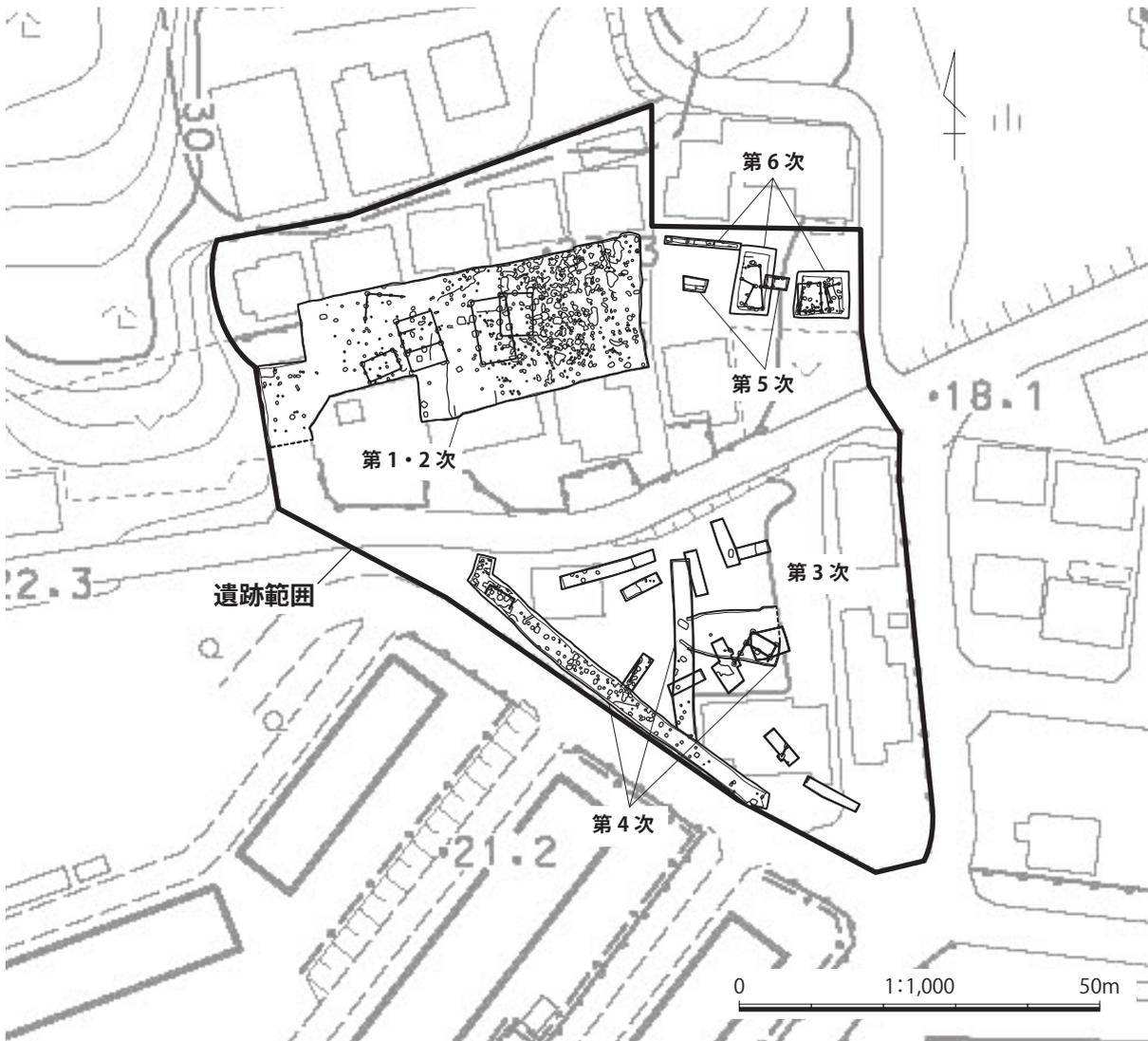
	調査名	調査原因	調査面積	調査期間
第1次	H16年度試掘調査	大庭町宅地造成事業	129.01m <sup>2</sup>	H16年3/25・26、4/7
第2次	H16年度本調査	大庭町宅地造成事業	約880m <sup>2</sup>	H16年6/7～8/25
第3次	H18年度試掘調査	大庭3期宅地造成事業	141.08m <sup>2</sup>	H18年5/8・9、7/5
第4次	H18年度立会調査	大庭3期宅地造成事業	約310m <sup>2</sup>	H18年10/26、11/1・10・13・27
第5次	H31年度試掘調査	個人住宅宅地造成	9m <sup>2</sup>	H31年3/27
第6次	R1年度本調査	個人住宅宅地造成	108.87m <sup>2</sup>	R2年2/14～3/26

を呈する直径 0.8m 前後を測るものである。また柱痕が残るものも認められる。建物の規模は、梁間 4.86m × 桁行 9.1m、面積 44.22㎡を測るものである。柱間の芯々距離は、梁間で 2.424m、桁行で 2.272m と等間隔である。

**SB01 出土遺物 (第 38 図)**

38-1 は須恵器の坏である。古代 C 分類坏 I 類 A4 ~ A6 型式にあたるものと思われる。国府編年は無高台坏 A で、第 3 ~ 5 型式に該当するものと思われる。年代は 8 世紀第 2 四半期 ~ 9 世紀前葉である。38-2 は須恵器の皿と思われる。古代 C 分類皿 I 類で、底部が回転糸切り後未調整であることから国府編年の第 3 型式以降の可能性が高い。

**遺構の性格と時期** 出土遺物から 8 世紀第 2 四半期 ~ 9 世紀前葉の建物跡と考えられる。また、柱穴の中から土師質の土塊が出土しており、胎土中にスサを含む。竈等構造物の一部あるいは土壁の一部のようなものの可能性がある。



第 35 図 調査区位置図



### SB02(第37図)

**規模と形態** SB01と重複するような形で検出された。梁間2間、桁行3間の南北棟で、主軸はN-1.5°-Eを測る。柱穴は直径約0.8m前後の円形のものが多いが、北東角のものだけ1.3m×0.9mの方形を呈する。建物規模は梁間4.54m×桁行6.06m、面積27.51㎡を測る。柱間の芯々距離は、梁間で2.272m、桁行で2.020mと等間隔である。

### SB02 出土遺物(第38図)

38-3は須恵器の坏である。古代C分類の坏I類B1型式にあたるものである。国府編年では無高台Bで第4型式にあたるもので、年代は8世紀第3～4四半期である。

38-4は須恵器の高台付坏である。古代C分類では坏II類B2型式にあたる。国府編年では蓋坏Cの第3～5型式にあたるものと思われる。年代は8世紀第2四半期～9世紀前葉である。

**遺構の性格と時期** SB01を切って存在するため、SB01よりは新しい。出土遺物から、8世紀第3四半期～9世紀前葉に建て替えられたものと推定される。

### SB03(第37図)

**規模と形態** SB01・SB02の西側で検出されたものである。梁間2間、桁行3間の南北棟で、主軸はN-18°-Wを測る。柱穴は大きいもので直径約0.7～0.8m、小さいもので直径0.25～0.6mを測る。大きい柱穴は柱痕跡が残るもの多く、柱痕跡の直径はいずれも0.25mを測る。建物規模は梁間5.151m×桁行7.272m、面積37.46㎡を測る。西側の南北ラインは柱間の芯々距離が、北から1.818m、2.727m、2.727mと等間隔ではない。

### SB03 出土遺物(第38図)

38-5は須恵器の蓋坏の坏身である。大谷編年のA7型、出雲5期にあたるものと思われる。年代は7世紀前半である。38-6は須恵器の蓋坏の蓋である。古代C分類の蓋II類D3a形式にあたる。国府編年では、蓋坏Cの第5型式にあたるものである。年代は8世紀末～9世紀前葉である。

**遺構の性格と時期** SB02と同じ梁間2間、桁行3間の建物であるが、柱間の距離が異なるため、面積はSB02が27.51㎡、SB03が37.46㎡とSB03のほうが規模が大きい。出土遺物から7世紀前半～9世紀前葉の建物跡と推定される。

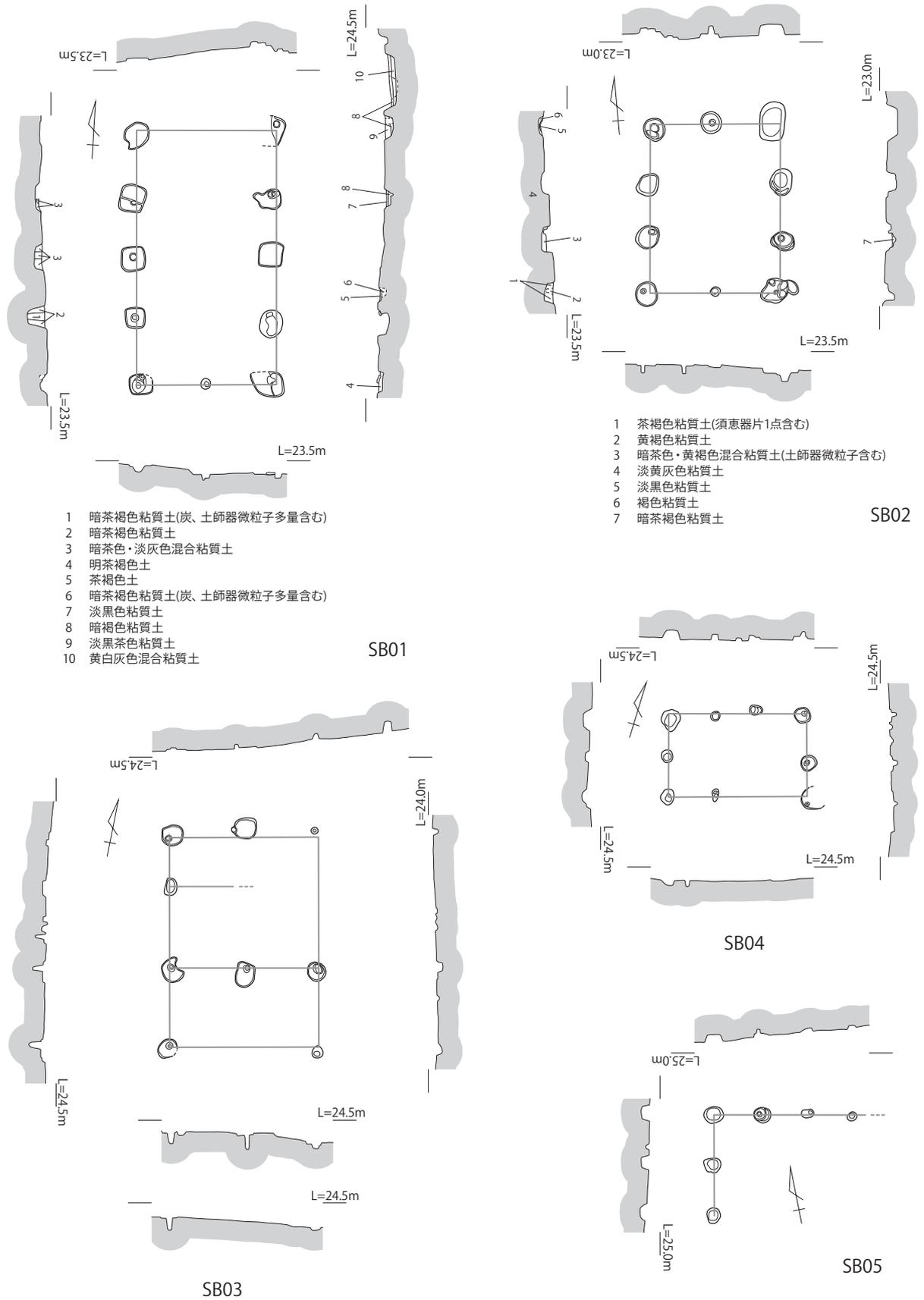
### SB04(第37図)

**規模と形態** SB03の西隣で検出されたものである。梁間2間、桁行3間の東西棟で、主軸はN-66.5°-Eを測る。柱穴の規模はばらつきがあり、大きいものは直径0.4～0.65m、小さいものは直径約0.3m前後を測る。柱痕跡が残るものがあり、その直径は0.2mである。建物規模は梁間2.727m×桁行4.848m、面積13.22㎡を測る。柱間の芯々距離は、消失した柱穴もあるが復元すると、梁間は1.363m、桁行は1.616mでおおむね等間隔であったと考えられる。

### SB04 出土遺物(第38図)

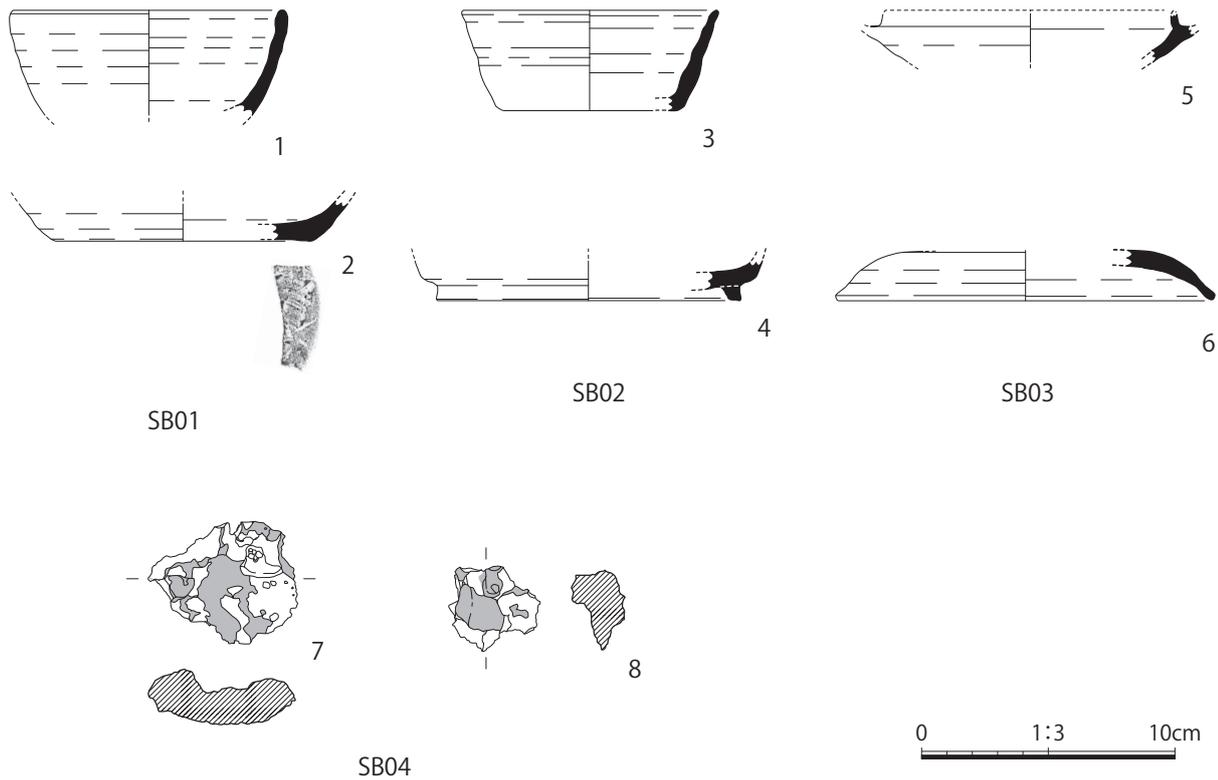
38-7は碗形滓である。平面不整円形で断面は碗形を呈する。炉床土が下面に残存する。磁着はほぼない。38-8は羽口先の溶解物である。磁着はない。

**遺構の性格と時期** 概報によると、かえりの付く須恵器の坏身が出土している。これによるとおそら



\*方位は磁北になっている。主軸は座標北で計測。(第45図参照)

第37図 SB01～SB05 平面図・断面図



第38図 SB01～SB04 出土遺物実測図

く大谷編年の出雲5期のものと考えられる。また、碗形滓と羽口先の溶解物を伴うことから、7世紀前半の小鍛冶の工房跡の可能性が考えられる。

**SB05(第37図)**

**規模と形態** SB03の北側で検出したものである。南側と東側の相対する柱列が消失しているが、復元すると梁間2間、桁行3間以上の東西棟になると想定される。主軸はN-93.5°-Eを測る。柱穴は大きいもので直径0.5～0.6m、小さいものは直径0.35～0.4mを測る。柱痕跡が残るものがあり、その直径は0.18mである。建物規模は、梁間3.636m×桁行5.454m以上、面積19.83㎡以上と想定される。柱間の芯々距離は、梁間、桁行とも1.818mと等間隔である。出土遺物は、細片のため詳しくは不明であるが、古代の須恵器片、土師器片が出土している。

**遺構の性格と時期** 建物の時期は不明であるが、隣接するSB03・SB04とは建物の主軸方向が異なることから、これらの建物とは時期差がある可能性がある。相対する柱列が消失しているため、SB05の後にSB03が建てられた可能性が考えられる。

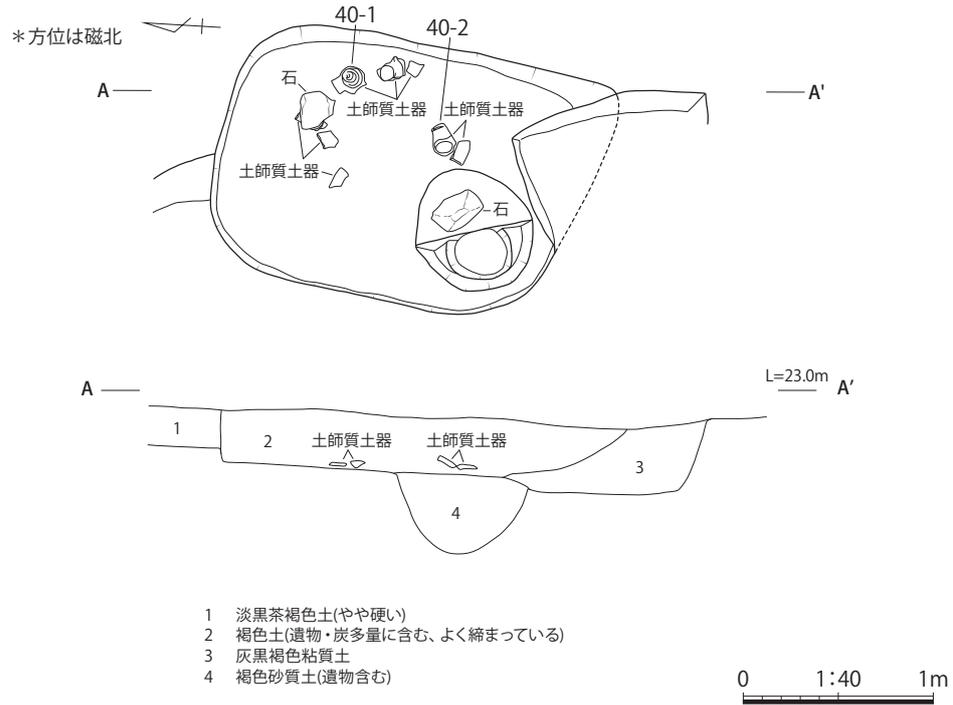
**2. 土壙墓**

**SK02(第39図)**

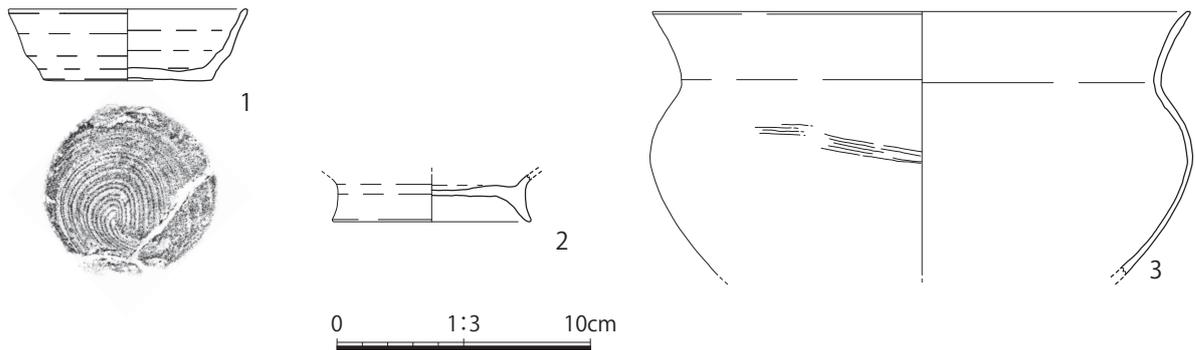
**規模と形態** SB02の北側で検出した方形の土壙である。平面規模は南北2.8m、東西2.0m、深さ0.3mを測る。土壙から土師器杯3個体分と土師器鉢1個体分が出土している。

**SK02 出土遺物(第40図)**

40-1は土師器の杯である。国府編年の無高台杯で第7型式にあたるものと思われる。年代は10世紀前半である。40-2は高台の付く土師器杯である。国府編年では足高高台付杯と称するもので、



第39図 SK02平面図・断面図



第40図 SK02出土遺物実測図

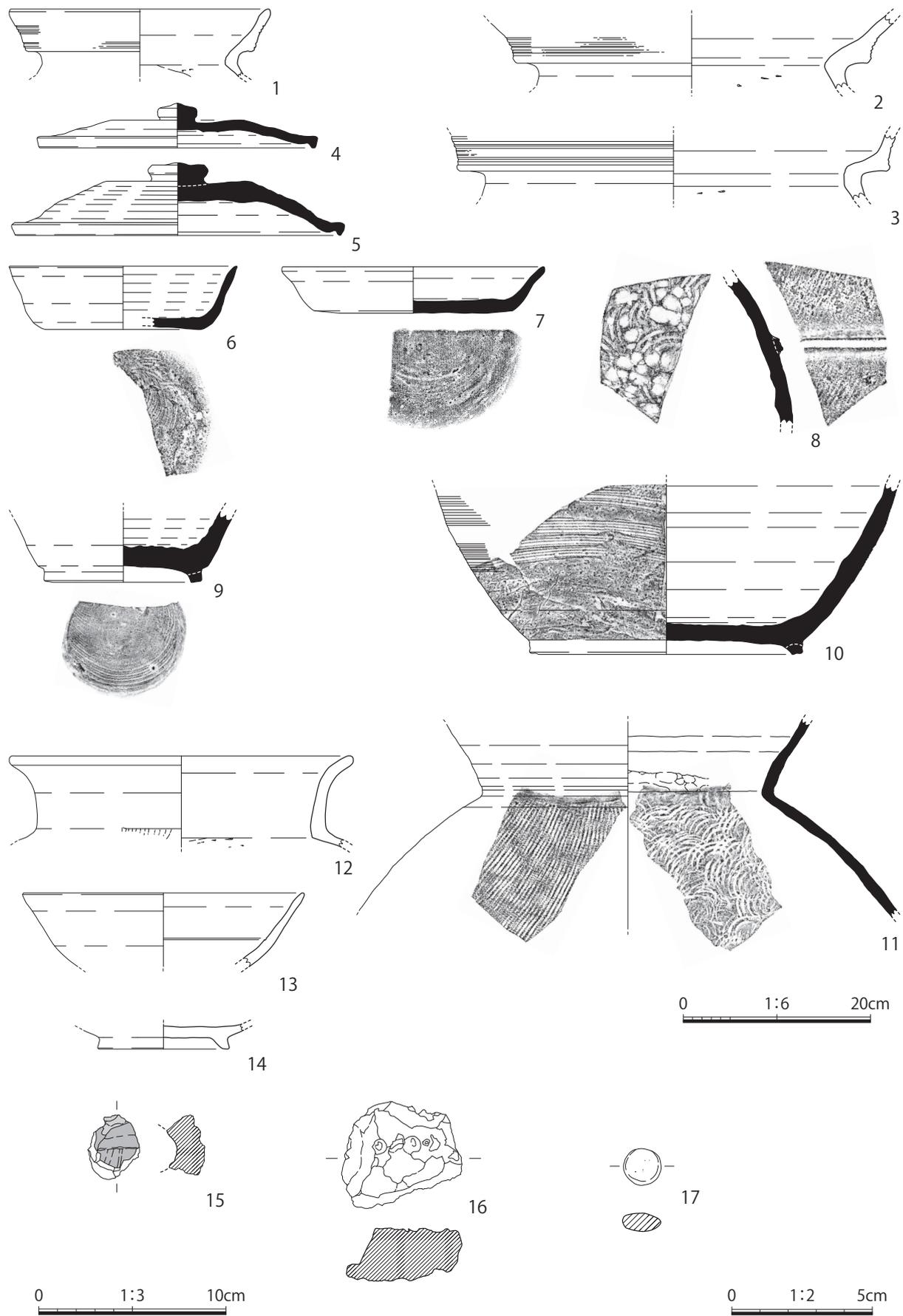
同じく第7型式にあたるものと思われる。40-3は土師器の鉢である。器厚を薄く仕上げ、胴部内面はヘラケズリの跡をナデ消している。内外面は意図的に炭化をさせているようである。

**遺構の性格と時期** 出土遺物から10世紀前半の遺構と言える。古代末から中世にかけて、土壌に土師器坏あるいは碗と鉢を埋納する事例は多く、少なくとも祭祀的な要素をもつ遺構と考えられる。人骨を伴うことも多いことから、概報では土壌墓<sup>(1)</sup>としている。ここでも一応、土壌墓として掲載した。

### 3. 遺構内・遺構外出土遺物(第41図)

ここでは遺跡の様相を表すために必要な遺物を掲載している。ピットあるいは溝から出土したものは、遺構全体図(第36図)に位置を示している。

41-1～3は弥生土器の甕である。口縁部外面にハケ原体による擬凹線が施される。内面頸部以下はケズリ調整が施される。松本編年の第V様式にあたる。41-1・3はピット(B-P25・B-P90)から出土している。41-4・5は須恵器蓋坏の蓋である。古代C分類では、宝珠状のつまみがつく蓋Ⅱ類D2a



第41図 遺構内・遺構外出土遺物実測図

型式にあたる。国府編年では蓋環Cの宝珠つまみ、S字状口縁をもつ第4型式に該当する。年代は8世紀第3～4四半期である。41-6は須恵器の坏である。古代C分類では、坏I類B2型式にあたる。国府編年では、無高台坏Bの第4型式に該当する。年代は8世紀第3～4四半期である。ピット(B-P76)から出土している。41-7は須恵器の皿である。古代C分類では、皿I類B1型式にあたる。国府編年では無高台皿の第3～5型式に該当するものと考えられる。年代は8世紀第2四半期～9世紀前葉である。溝(A-SD01)から出土している。41-8は須恵器の甕である。胴部にM字状の突帯が貼り付く。外面は平行タタキが施される。自然釉が付着する。内面は同心円状のタタキが施される。41-9・10は須恵器の壺である。41-9は長頸壺の底部で、底部外面に回転糸切り調整が残る。古代C分類では長頸壺II類A5型式にあたる。国府編年では、第2～3型式に該当するものと思われる。年代は7世紀末葉～8世紀第2四半期である。ピット(F-P31)から出土している。41-10は須恵器の壺底部である。外面にカキ目が残る。また、外面底部は回転糸切り後ナデ調整が施される。ピット(A-73)から出土している。41-11は須恵器の甕である。外面頸部以下に平行タタキ、内面頸部以下に同心円状のタタキが施される。ピット(B-P79)から出土している。41-12は土師器の甕である。外面肩部にハケ目が薄く残る。内面頸部以下にケズリ調整が施される。ピット(G-P27-4)から出土している。41-13・14は緑釉陶器の碗である。41-13は内外面に施釉がある。ピット(A-P8)から出土している。41-14は底部内面から外面畳付けまで施釉がある。出雲国府では8世紀末から9世紀初頭から少量認められ、9世紀前半から10世紀後半まで使用されている。ここでも、9世紀から10世紀の間のものと考えられる。41-15は羽口の先端である。ピット(B-P35 柱痕跡)から出土している。41-16は碗形滓である。ピット(B-P19)から出土している。41-17は水晶の平玉である。白濁しており、研磨途中のもの可能性がある。ピット(B-P85)から出土している。

### 第3項 まとめ

第1・2次(平成16年度)の調査では、今回の調査地の西側にあたる丘陵の高い場所で掘立柱建物跡5棟、土壙墓1基が見つかった。

古いものでピットから弥生時代後期の土器が出土している。掘立柱建物跡については、各遺構の出土遺物の年代と切り合い関係は、SB01は8世紀第2四半期～9世紀前葉、SB02は8世紀第3四半期～9世紀前葉でSB01より新しい。SB03は7世紀前半～9世紀前葉、SB04は7世紀前半以降、SB05は年代不明であるが、おそらくSB03より古い。このことから、古い遺物を含む順で並べると、SB05→SB03・SB04→SB01→SB02となるが、おおむね9世紀前葉までの建物跡と考えられる。なかでも、SB01～SB03は柱穴が大きく、柱間の距離も広いため、比較的規模の大きい建物跡であることは注目できる。さらに、SB02は主軸がほぼ真北にあることも注視すべき点である。また、SB04からは碗形滓が出土しており、小鍛冶工房があった可能性も重要である。

このほかピット、遺構外から出雲国府で見られるような緑釉陶器・灰釉陶器、水晶の平玉が出土していることも含めると一般的な集落ではない可能性が高い。

## 第2節 第3・4次(平成18年度)の調査成果

当時の概要報告書を基に記載している。遺構図は概報に掲載されたものを再トレースしている。

T-2～4、T-10で隅丸方形の柱穴が検出されており、第1・2次調査で検出した掘立柱建物跡と同一規模の建物跡の存在の可能性が指摘されている。遺跡の残存状況は、どのトレンチでも遺物包含層を挟まずに耕作土直下に地山面があることや、ピットも浅いことから、全域に渡って一度大きく地山が削平されたようである。

### 第1項 掘立柱建物跡(第43図)

**SB01** T-2・4で検出した梁間2間、桁行3間の南北棟で、柱間の芯々距離は約1.8mを測る。検出規模は3.6m×5.4mで面積は19.44㎡になる。主軸はN-30.5°-Eである。柱痕跡の直径は0.24m、掘り方は隅丸方形で1辺0.6～0.7m、深さは0.05～0.26mを測る。出土遺物なし。

**SB02** 第4次調査区の北西側で検出した梁間2間×桁行1間以上の南北棟と推測する。検出規模は3.8m×1.6mで面積は6.08㎡になる。調査区南側に建物が広がるものと思われる。柱間の芯々距離は北東側から西へは2.2m、1.6m、南へは1.6mを測る。主軸はN-22°-Eである。掘り方は隅丸方形で0.8～1.0mを測る。深さ、出土遺物の有無は不明である。

**SB03** T-3で検出した。検出規模1間で柱間の芯々距離は約1.8mを測る。主軸は南北方向でN-23°-Eである。柱痕跡が残るものがある。掘り方は隅丸方形で0.55～0.8mを測る。深さは0.05mである。出土遺物なし。

**SB04** T-10で検出した。検出規模2間で柱間の芯々距離は約1.8mごとの3.6mを測る。主軸は南北方向でN-23°-Eである。柱痕跡が残るものがある。掘り方は隅丸方形で1辺0.7～1.0mを測る。柱痕跡の埋土から土師器の破片が出土しており、古代と推測されている。

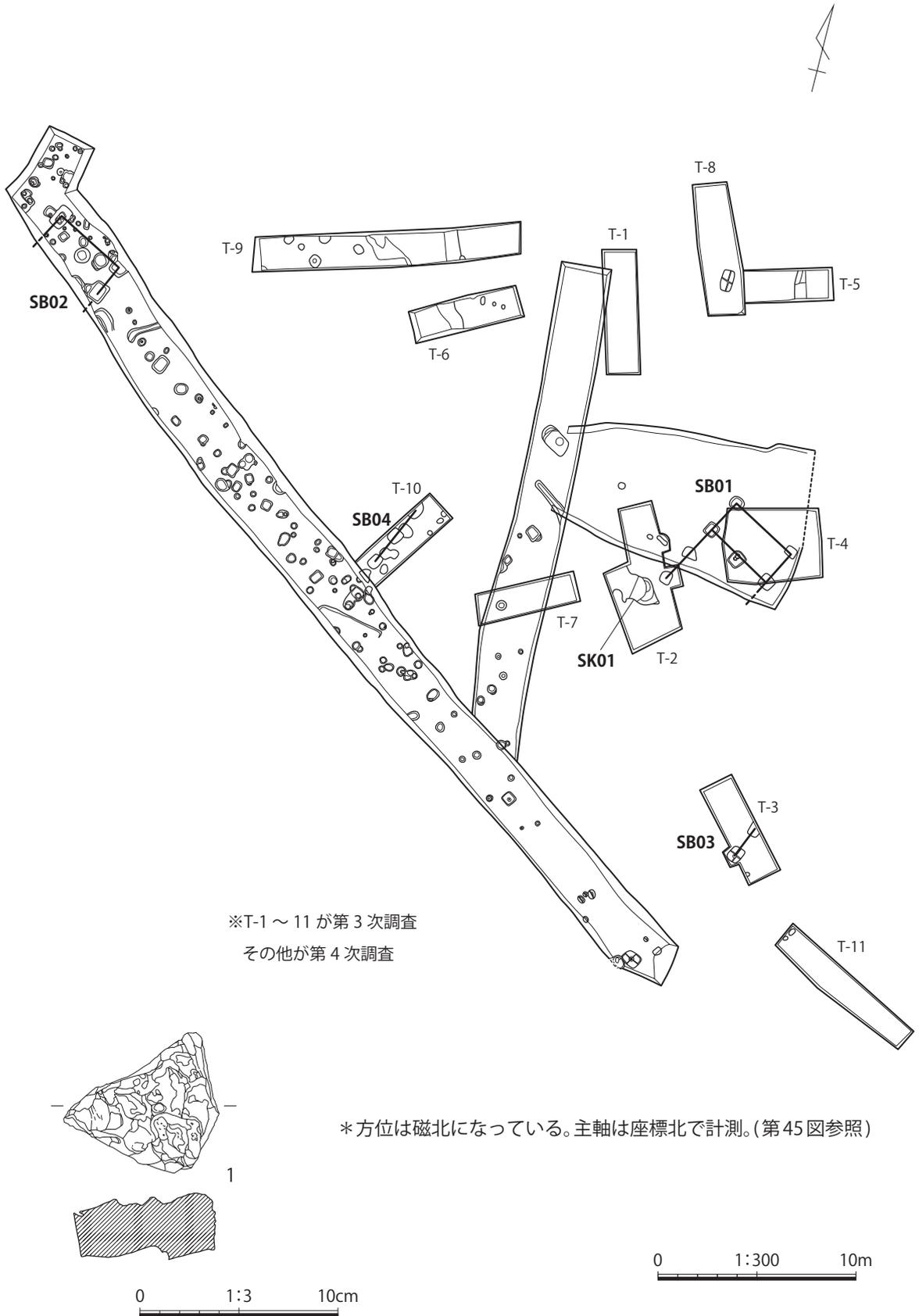
### 第2項 貯蔵穴(第43図)

**SK01** T-2で検出した。検出面では平面不整形であったが、半掘状況から円形の土壇と考えられる。直径1.2m、深さ1.2mを測り、断面は袋状を呈する。遺構の検出面と底部付近の埋土から須恵器の破片が検出されているが、流れ込みの可能性が高い。

### 第3項 まとめ

調査地全体において、地山が削平されているものの、T-1以外のすべてのトレンチから遺構あるいは遺物が見つかっている。特にT-2～4、T-10付近に大型の掘立柱建物跡が存在すると考えられる。遺構に伴う遺物は少なく、遺構検出時に出土したものがほとんどである。かえりの付く須恵器の坏身や蓋坏の蓋、土製支脚や土師器の坏も出土しており、おおむね6世紀末～10世紀までに収まるものと思われる。このほか、製錬の過程でできる流動滓(42-1)も出土している。第1・2次(H16年度)調査で出土した遺物の様相と大きくは変わらない。

以上のことから、第1・2次(H16年度)調査で見つかった遺構群と一連のものとして推測される。



第42図 第3・4次(H18年度)調査出土遺物実測図

第43図 第3・4次(H18年度)調査 遺構全体図

### 第3節 神田Ⅱ遺跡の様相

以上の調査成果に基づいて、神田Ⅱ遺跡の遺構の変遷と様相を整理する。

#### 第1項 遺構の変遷と様相

これまでの調査成果を概観していくと、遺物の出土量から弥生時代後期に一度人的活動が行われ、古墳時代後期の6世紀後半～7世紀代にかけて序々にその活動が活発になり始めたようである。そして、8世紀～9世紀前葉に本格的な集落が営まれていたと考えられる。9世紀前半～11世紀の緑釉陶器や灰釉陶器、中世の五輪塔の可能性のある石材があるものの、その数は少なく、9世紀前半以降は衰退あるいは活動拠点が移動したものと推測される。

古代を主とした掘立柱建物跡については、第1・2次調査と第3・4次調査で検出した建物跡は丘陵の尾根筋に沿うように存在している。これらは柱穴も方形で径が大きく、柱間の距離も広いため、建物規模が比較的大きいものと推測される。これに対し、第6次調査で検出した建物跡は、丘陵斜面に存在し、柱穴の径が小さく、柱間の距離が狭いものが多いため、規模の小さいものであると考えられる。

以上のことから、第1・2次調査と第3・4次調査で検出した建物が集落の本体で、第6次調査で検出した規模の小さい建物跡はこれらに付属する建物と推測される。

#### 第2項 建物の主軸から見る古代官衙遺構と古代道との関係(第44・45図)

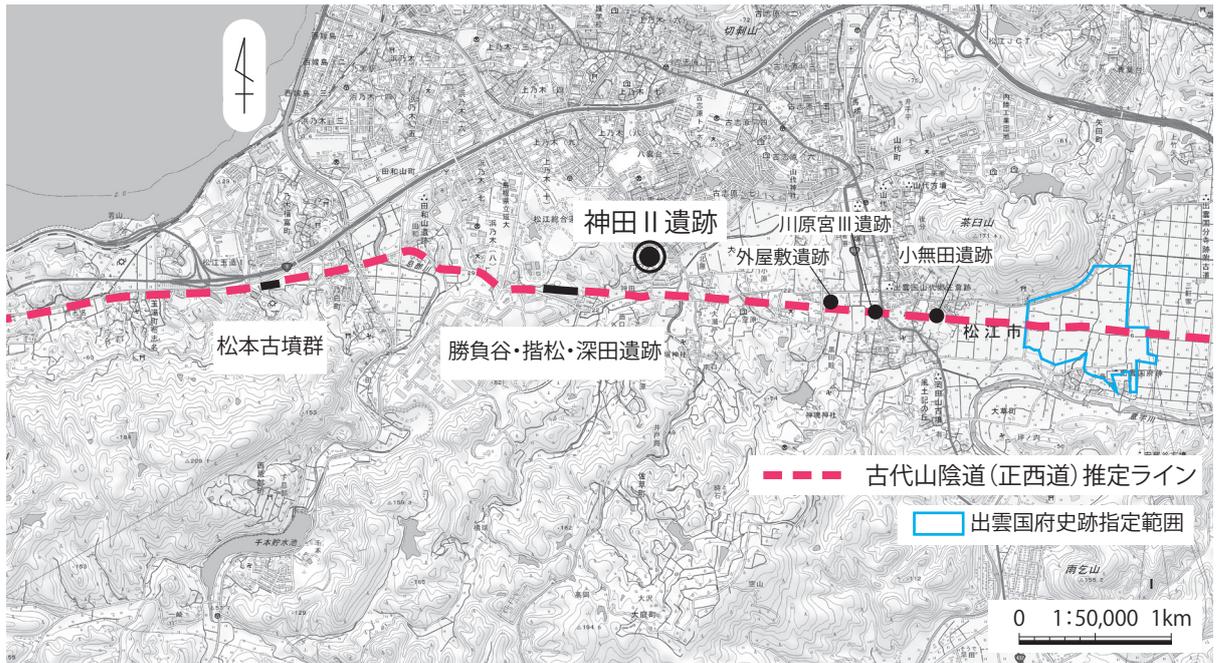
近年、出雲国府周辺の古代遺跡と地域計画についての研究が行われている<sup>(2)</sup>。これによると、国府編年の各型式で建物の主軸方向が大別でき、これが時代を経て造り替えられる古代道の主軸と対応する可能性が推察されている。

神田Ⅱ遺跡は、出雲国府が機能していた時代と同時代の遺跡にあたり、国府から約3km西に位置する。また、国庁の十字街から西側では、以前から想定されていた古代道の推定ライン<sup>(3)</sup>において、小無田遺跡<sup>(4)</sup>・川原宮Ⅲ遺跡<sup>(5)</sup>・外屋敷遺跡のほか、措松遺跡と松本古墳群で道路状遺構が発見されている。神田Ⅱ遺跡の南側約250mのあたりに、この古代道推定ラインが通っている(第44図)。

遺跡の主体となっている掘立柱建物跡の規模と主軸、推定年代をまとめてみた(表2、第45図)。

これによると、建物の主軸にはN-1.5～3.5°-W、N-9.5～18°-W(Eも1棟含む)、N-22～30.5°-E、それ以外と4種類に大別できる。大別される主軸と推定年代の関係は、年代不明のものが多いことと、下限が国府編年第5型式までのものが大半であるため、主軸と年代との関係を読み取ることは難しい。これは建物の存続期間とも関係している可能性も考えられる。ただし、建物の主軸がN-1.5～3.5°-Wの建物群は、古代道(正西道)の方位を意識している可能性は否定できない。

前述したとおり、神田Ⅱ遺跡は、国府と同じ「意宇郡」に属し、緑釉陶器、灰釉陶器あるいは水晶の平玉が出土するなど、一般的な集落ではないことから考えると国府を中心として展開した官衙施設と古代道を取り巻く衛星的集落を想定しても良いと思われる。神田Ⅱ遺跡で検出した建物跡について、主軸で大別されるグループが同時期に存在するものと想定して、これらと古代道の主軸との関係に注意する必要がある。遺跡の南側では古代道が発見されていないため、今後の検討課題である。



第44図 国府・古代道推定ラインと神田Ⅱ遺跡の位置関係図

### 第3項 結語

神田Ⅱ遺跡は、8世紀から9世紀前葉にかけてが全盛期の集落跡であることが分かった。今回の調査では、遺跡全体の調査成果を精査することで、集落内での建物の配置の様子を広くみることができた。これにより、集落の本体と付属建物といった集落内の建物構成が想定できる良好な資料を得ることができた。

また、この集落跡は緑釉陶器や灰釉陶器といった国府で見られるような遺物も出土しており、一般的な集落とは異なる要素を持つ。国府と古代道推定ラインとの位置関係から見て、国府を中心とした衛星的な集落である可能性が考えられる。神田Ⅱ遺跡で見つかった集落跡は、国府を中心に展開した地域開発の過程を探る一助となる貴重な成果と言える。

註1) 中川寧 2001「第6章まとめ 平安時代の墓について」『馬場遺跡発掘調査報告書』日本道路公団中国支社・島根県教育委員会

註2) 平石充・井谷智子 2019「出雲国府周辺の古代遺跡と地域計画」『山陰における古代交通の研究』第2回客員検討会資料

註3) 中村太一 1996「出雲国風土記の空間認識と道路」『日本古代国家と計画道路』吉川弘文館

註4) 松江市教育委員会 2009「埋蔵文化財分布調査概要」

T-1 試掘トレンチで検出したSD01について、近年の研究(註5)で古代道の可能性が指摘されている。

註5) 川上昭一 2019「川原宮Ⅲ遺跡 SF01」『山陰における古代交通の研究』第2回客員検討会資料

#### 参考文献

松江市教育委員会 2004『神田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

松江市教育委員会 2006『大庭3期宅地造成事業に伴う埋蔵文化財分布調査概要』

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 2016『大庭センターハイツ宅地造成工事に伴う発掘調査報告書 外屋敷遺跡』

松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興財団 2006「措松遺跡」『渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』

建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1997『松本古墳群・大角山古墳群・すべりざこ古墳群』

X=62640

X=62650

X=62660

X=62670

X=62680

X=62690

Y=82350

Y=82340

Y=82330

Y=82320

Y=82310

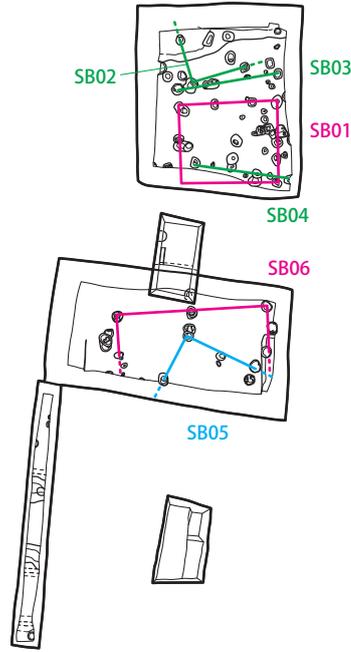
Y=82300

Y=82290

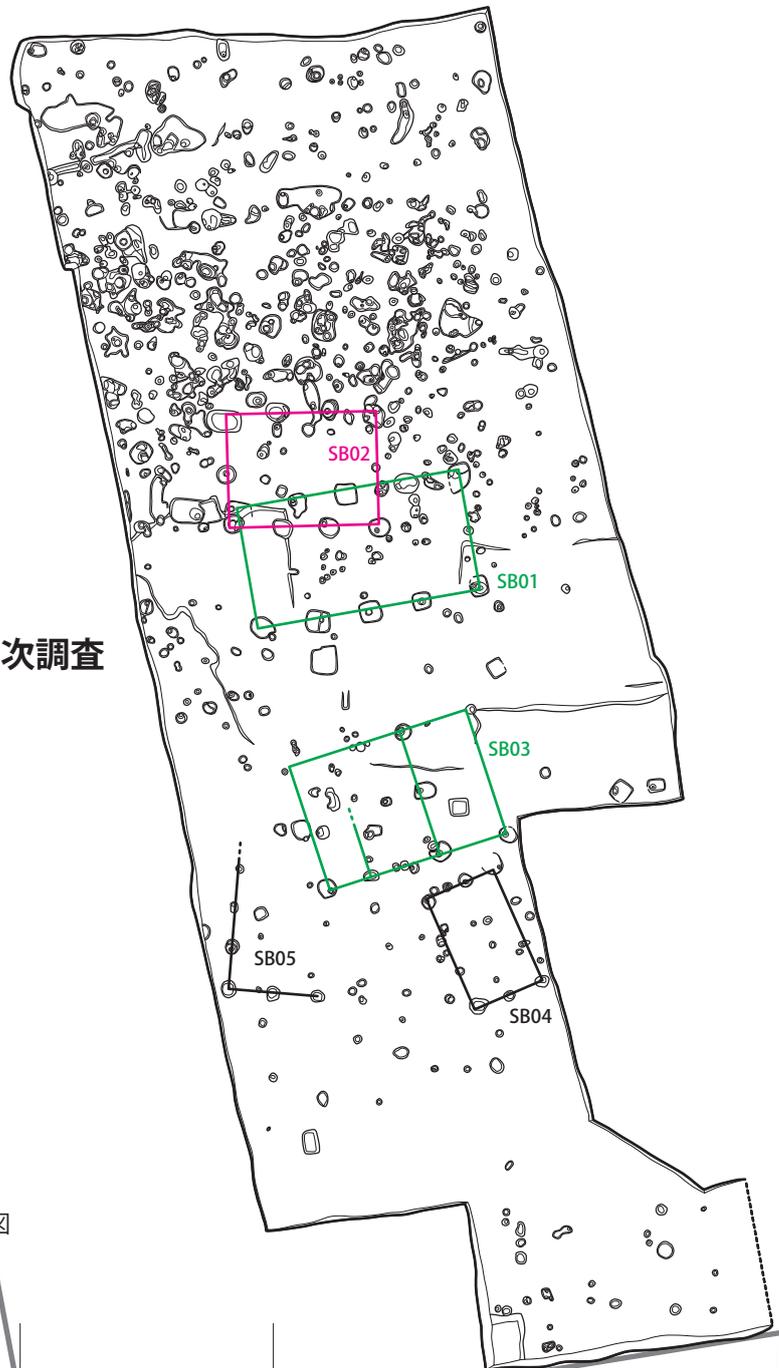
Y=82280



### 第5・6次調査



### 第1・2次調査



遺跡範囲

第45図 神田II遺跡 遺構全体図

X=-62700

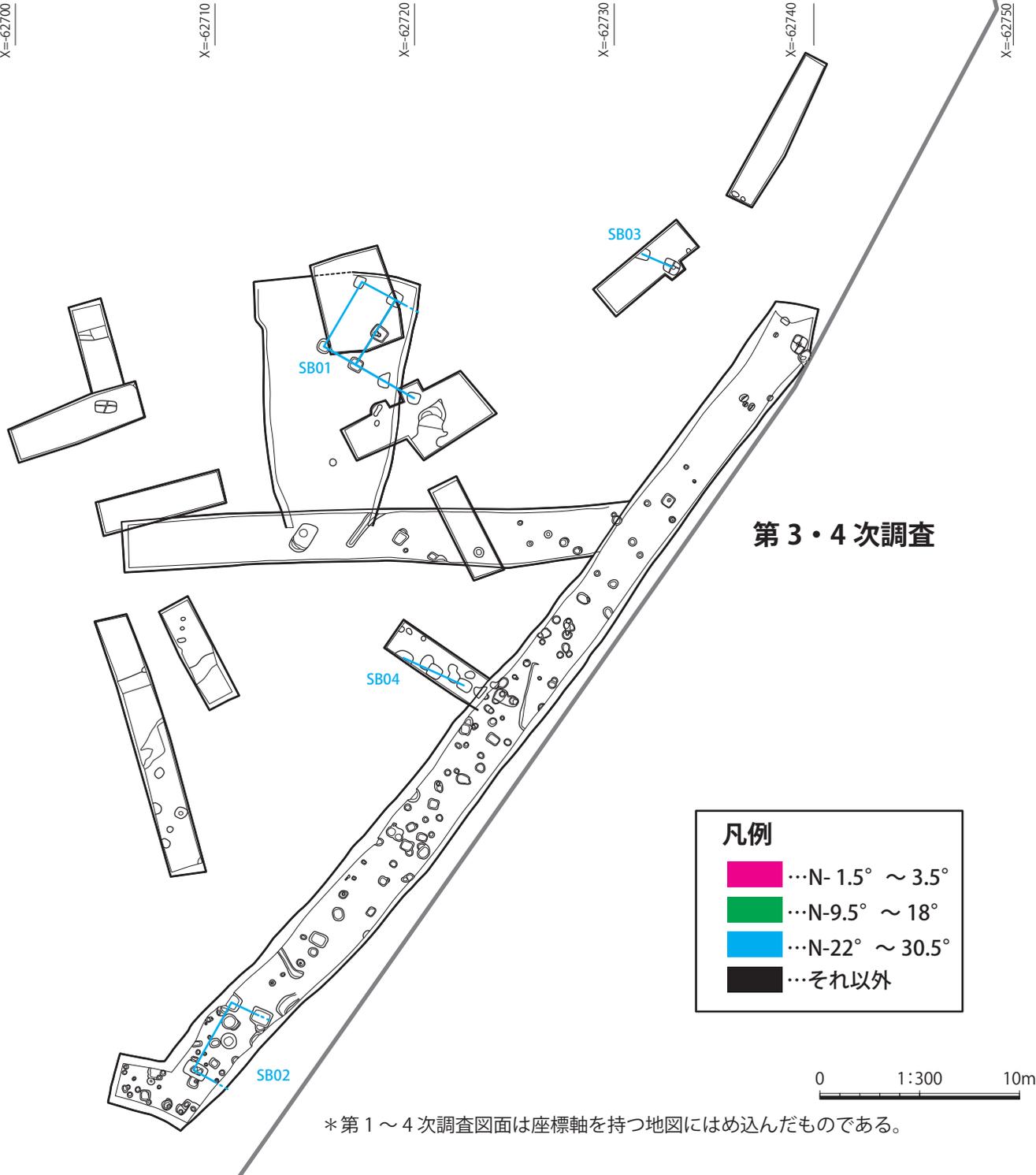
X=-62710

X=-62720

X=-62730

X=-62740

X=-62750



### 第3・4次調査

#### 凡例

- …N-1.5° ~ 3.5°
- …N-9.5° ~ 18°
- …N-22° ~ 30.5°
- …それ以外

0 1:300 10m

\* 第1～4次調査図面は座標軸を持つ地図にはめ込んだものである。

表2. 掘立柱建物跡 推定年代一覧

年代順	遺構名(調査次)	検出規模(面積)	主軸	出土遺物年代・切り合い
1	SB05(第2次)	2間×3間以上(19.83㎡～)	N-93.5° -E	SB03(第2次)より古い。
2	SB03(第2次)	2間×3間(37.46㎡)	N-18° -W	7C前半～9C前葉
	SB04(第2次)	2間×3間(13.22㎡)	N-66.5° -E	7C前半～
3	SB01(第6次)	2間×3間(12.68㎡)	N-2.5° -W	7C後半～9C前葉
4	SB01(第2次)	2間×4間(44.22㎡)	N-10° -W	8C第2四半期～9C前葉
	SB02(第6次)	1間以上×1間以上	N-16° -W	
	SB04(第6次)	3間	N-10° -E	SB01(第6次)より新しい。
5	SB02(第2次)	2間×3間(27.51㎡)	N-1.5° -E	8C第3四半期～9C前葉
	SB05(第6次)	1間以上×2間以上(5.78㎡～)	N-26° -E	
不明	SB03(第6次)	3間	N-9.5° -W	
	SB06(第6次)	1間×2間以上(10.93㎡)	N-3.5° -W	
	SB01(第3次)	2間×3間(19.44㎡)	N-30.5° -E	
	SB03(第3次)	1間	N-23° -E	
	SB04(第3次)	2間	N-23° -E	
	SB02(第4次)	2間×1間以上(6.08㎡～)	N-22° -E	

表 3. 遺物観察表

第 5 次調査 ( 試掘調査 )

遺物番号	調査区	種類	器種・部位	法量 ( cm )			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成		
6-1	T-1	須恵器	蓋環の蓋	(10.7)	—	(1.9)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 密、0.5mm 以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 青灰色 (10BG6/1) ~ 暗青灰 (10BG3/1) 内 明青灰色 (10BG7/1)	最大径 13.0cm つまみ欠損 国府編年 第 1 型式 7c 後葉
6-2	T-1	須恵器	皿	(12.2)	(9.0)	2.3	外 回転ナデ、底部回転糸切り 内 回転ナデ、ヘラケズリのキズ有	胎土 密、1mm 以下の砂粒を少量含む 焼成 普通	外 灰オリーブ色 (5Y5/2) 内 灰オリーブ色 (5Y5/2)	国府編年 第 3 あるいは第 4 型式
6-3	T-1	須恵器	壺 ( 底部 )	—	(10.2)	(3.2)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 密、0.5mm 以下の砂粒をわずかに含む 焼成 良好	外 灰色 (N4/1) 内 灰色 (7.5Y4/1)	高台が付く 胴部下側に沈線 1 条 長頸壺か
6-4	T-1	土師器	甗 ( 取手 )	長さ 6.5 最大径 3.1			ナデ	胎土 1mm 程度の砂粒 ( 石英・長石 ) を含む 焼成 普通	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
6-5	T-1	土師器	甗 ( 口縁部 )	(26.6)	—	(4.3)	外 ナデ 内 ナデ、ケズリ	胎土 0.5 ~ 2mm の石英・長石を含む 焼成 良好	外 橙色 (7.5YR7/6) 内 橙色 (7.5YR7/6)	
8-1	T-2	須恵器	蓋環の環身	(11.4)	—	(2.7)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 密、1mm 以下の砂粒を少量含む 焼成 良好	外 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 口縁部 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 内 明オリーブ灰色 (5GY7/1)	最大径 (13.5cm) 受部に重ね焼き痕 大谷編年 出雲 4 期 6c 末 ~ 7c 前葉
8-2	T-2	須恵器	蓋環の蓋	(10.5)	—	(1.5)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 密、0.5mm 以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 灰色 (N6/1) 内 灰色 (N6/1)	最大径 (12.9cm) 国府編年 第 1 型式 7c 後葉
8-3	T-2	須恵器	蓋環の蓋 ( つまみ部 )	—	—	(1.5)	外 回転ナデ、算盤玉状 内 回転ナデ	胎土 密、0.5mm 以下の砂粒を少量含む 焼成 良好	外 灰色 (5Y4/1) 内 灰色 (5Y4/1)	つまみ直径 2.8cm
8-4	T-2	須恵器	蓋環の蓋	(16.4)	—	—	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 密、0.5mm 以下の砂粒を少量含む 焼成 普通	外 灰色 (7.5Y6/1) 内 灰色 (N6/1)	つまみ欠損 国府編年 第 4 ~ 5 型式
8-5	T-2	須恵器	坏	12.4	8.6	4.4 ~ 4.6	外 回転ナデ、底部回転糸切り 内 回転ナデ	胎土 密、2mm 以下の長石を少量含む 焼成 普通	内外上部 灰色 (7.5Y4/1) 内外下部 灰白色 (7.5Y7/1)	内面底に高台が付くものの重ね焼き痕 底部中央わざと欠損か ( 内→外打突 ) 国府編年 第 3 ~ 5 型式
8-6	T-2	須恵器	皿	(13.8)	(8.0)	2.6	外 回転ナデ、底部回転糸切り 内 回転ナデ	胎土 5mm 以下の長石を含む 焼成 やや不良	外 灰色 (5Y6/1) 内 灰色 (5Y6/1)	国府編年 第 4 型式か
8-7	T-2	須恵器	高台付皿	—	(12.0)	(1.8)	外 回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内 回転ナデ	胎土 密、1mm 以下の砂粒を含む 焼成 やや不良	外 暗黄灰色 (2.5Y5/2) 内 黄灰色 (2.5Y5/1)	皿部欠損 国府編年 第 4 型式以降か
8-8	T-2	須恵器	高坏	—	—	(2.7)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 密、1mm 以下の砂粒を含む 焼成 やや不良	外 灰色 (7.5Y6/1) 内 灰白色 (10Y7/1)	スカシ 1 か所のみ確認 ( 2 方行スカシか ) 大谷編年 出雲 5 か 6 期 7c 代
8-9	T-2	須恵器	甗	(21.8)	—	(6.5)	外 ナデ、平行タタキ、カキ目 内 ナデ、同心円状タタキ	胎土 密、1mm 以下の砂粒 ( 長石か ) を含む 焼成 普通	外 灰色 (10Y4/1) ~ 灰色 (7.5Y6/1) 内 灰色 (10Y4/1)	

第 6 次調査 ( 本調査 )

遺物番号	調査区	遺構名	種類	器種・部位	法量 ( cm )			調整・文様の特徴		色調	備考
					口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成		
14-1	1 区	SB01	須恵器	高坏	—	—	(2.7)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm 以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 灰色 (N5/1) 内 灰色 (7.5Y6/1)	坏内 重ね焼き痕 切れ目状のスカシか 外 一部灰かぶり 大谷編年 出雲 6 期 7c 後半
14-2	1 区	SB01	須恵器	蓋環の蓋	(8.2)	—	(1.2)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 一 焼成 普通	外 灰色 (5Y6/1) 内 灰色 (5Y6/1)	最大径 (11.0cm) つまみ欠損 国府編年 第 1 型式 7c 後半
14-3	1 区	SB01	須恵器	蓋環の蓋	(11.6)	—	(1.6)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 3mm 以下の砂粒を少し含む 焼成 不良	外 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 内 にぶい赤褐色 (5YR5/4)	外 重ね焼き痕 ( 身を重ねている ) 国府編年 第 4 ~ 5 型式 8c 後半 ~ 9c 前葉
14-4	1 区	SB01	須恵器	蓋環の蓋	(15.2)	—	(1.4)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm 以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色 (N5/1) 内 灰色 (N5/1)	外 重ね焼き痕 国府編年 第 4 ~ 5 型式 8c 後半 ~ 9c 前葉
16-1	1 区	SB02	須恵器	蓋環の蓋	(14.0)	—	(2.1)	外 回転ナデ、ヘラケズリ 内 回転ナデ	胎土 1mm 以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色 (5Y6/1) 内 灰色 (5Y6/1)	宝珠つまみがつくか
16-2	1 区	SB02	須恵器	蓋環の蓋	(13.0)	—	(1.4)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm 以下の砂粒を多く含む 焼成 普通	外 暗灰色 (N3/1) ~ 灰色 (N5/1) 内 灰色 (N5/1)	
16-3	1 区	SB02	須恵器	蓋環の蓋	(14.9)	—	(1.2)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm 以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 灰色 (N5/1) 内 灰色 (N5/1)	外 口縁部付近 重ね焼き痕 ( 身を被せている )
16-4	1 区	SB02	須恵器	坏 ( 底部 )	—	(8.0)	(1.1)	外 回転ナデ、底部回転糸切り 内 回転ナデ	胎土 1mm 以下の砂粒を若干含む 焼成 不良	外 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 内 にぶい黄褐色 (10YR6/3)	焼成が悪く土師質になる 国府編年 第 3 ~ 5 型式 8c 第 2 四半期 ~ 9c 前葉
16-5	1 区	SB02	須恵器	甗 ( 胴部 )	—	—	(2.8)	外 平行タタキ 内 同心円状タタキ	胎土 1mm 以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色 (N4/1) 内 灰白色 (2.5Y7/1)	
19-1	1 区	SB04	須恵器	不明 ( 脚部 )	(14.9)	—	(3.5)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm 以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 暗灰色 (N3/1) 内 灰色 (7.5Y6/1)	

遺物番号	調査区	遺構名	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
					口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成		
21-1	3区	SB05	須恵器	蓋環の蓋	—	—	(1.9)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 灰色(7.5Y5/1) 内 灰色(7.5Y5/1)	つまみが付くか 口縁端部欠損 国府編年 第4～5型式 8c 第3四半期～9c 前葉
24-1	2区	加工段3・4	須恵器	環	(10.0)	—	(2.5)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(7.5Y5/1) 内 灰色(7.5Y5/1)	底部欠損 国府編年 第2型式 7c 末葉～8c 第1四半期
24-2	2区	加工段3・4	須恵器	高台付坏か皿	—	(11.4)	(1.3)	外 回転ナデ、底部回転系切り 内 回転ナデ	胎土 2mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 灰色(10Y5/1) 内 灰色(10Y5/1)	国府編年 第3～5型式 8c 第2四半期～9c 前葉
24-3	2区	加工段3・4	須恵器	甕(肩部)	—	—	(6.0)	外 平行タタキ 内 同心円状タタキ	胎土 2mm以下の砂粒を少し含む 焼成 不良	外 灰白色(2.5Y8/1) 内 灰白色(2.5Y8/1)	
24-4	2区	加工段3・4	須恵器	甕(胴部中央)	—	—	(10.2)	外 平行タタキ 内 同心円状タタキ、一部ナデ消し	胎土 0.5mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 暗オリーブ色(5Y4/3) 内 灰色(N6/1)	自然釉
24-5	2区	加工段3・4	須恵器	甕(胴部下側)	—	—	(11.4)	外 平行タタキ、カキ目 内 同心円状タタキ	胎土 2mm以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 灰色(5Y5/1) 内 灰白色(N7/1)	
24-6	2区	加工段3・4	土師器	甕(頸部)	—	—	(4.2)	外 — 内 ナデ、ケズリ	胎土 3mm以下の砂粒を多く含む 焼成 普通	外 黄褐色(10YR8/6) 内 黄褐色(10YR8/6)	摩耗のためケズリ方向不明 古墳終末～古代
24-7	2区	加工段3・4	土師器	甕(頸部)	—	—	(3.3)	外 縦方向ハケ目 内 ケズリ	胎土 3mm以下の砂粒を多く含む 焼成 普通	外 にぶい褐色(7.5YR6/4) ～にぶい褐色(7.5YR5/3) 内 褐色(7.5YR7/6)	古墳終末～古代
27-1	3区	SD01	弥生土器	甕(口縁部)	—	—	(3.2)	外 凹線文 内 ナデ、ケズリ	胎土 6mm以下の石英を多く含む 焼成 普通	外 明黄褐色(10YR7/6) 内 明黄褐色(10YR7/6)	松本編年 V-1 様式 弥生後期
29-1	1区	P3	須恵器	高坏(坏部)	(10.0)	—	(3.7)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 0.5mm以下の砂粒をわずかに含む やや不良	外 灰色(5Y6/1) 内 灰色(5Y6/1)	大谷編年 出雲5～6期か 7c 前半～中葉か
29-2	1区	P4	須恵器	坏(口縁部)	(13.0)	—	(1.7)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 黄灰色(2.5Y6/1) 内 灰色(10Y6/1)	底部欠損 国府編年 第3～5型式 8c 第2四半期～9c 前葉
29-3	1区	P5	須恵器	甕(肩部)	—	—	(4.0)	外 平行タタキ 内 同心円状タタキ	胎土 0.5mm以下の黒い砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 黄灰色(2.5Y6/1) 内 黄灰色(2.5Y6/1)	自然釉
29-4	1区	P6	土師器	甕(ひれ部)	(7.5) × (7.2) 厚さ 1.2～1.5			体部とひれ部の接合部に指頭圧痕	胎土 2mm以下の石英・長石を多く含む 焼成 普通	外 にぶい黄褐色(10YR7/4) 内 褐色(7.5YR6/6)	
31-1	1区	P7	須恵器	小壺	—	—	(3.2)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(N5/1) 内 灰色(N5/1)	最大径(11.7cm)
31-2	3区	P8	須恵器	甕(底部)	—	(5.4)	(1.2)	外 回転ナデ、底部ケズリ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(N5/1)～ 灰色(N6/1) 内 灰色(N5/1)～ 灰色(N6/1)	大谷編年 出雲5～6期 7c 代
31-3	3区	P9	須恵器	甕(胴部)	—	—	(7.0)	外 平行タタキ 内 同心円状タタキ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(N5/1) 内 灰色(N6/1)	
31-4	2区	P10	須恵器	甕(肩部)	—	—	(5.4)	外 平行タタキの上からカキ目 内 同心円状タタキ	胎土 5mm以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 黄灰色(2.5Y6/1) 内 灰色(N6/1)	灰かぶり
31-5	2区	P10	土師器	甕(口縁部)	—	—	(3.3)	外 ナデ 内 ケズリ	胎土 1mm以下の砂粒を多く含む 焼成 普通	外 褐色(5YR6/6) 内 浅黄褐色(10YR8/4)	風化激しい
32-1	3区	包含層	須恵器	蓋環の坏身	—	—	(1.5)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 不良	外 灰白色(2.5Y8/1) 内 灰白色(2.5Y8/1)	最大径(13.2cm) 大谷編年 出雲3か4期 6c 後半～7c 前葉
32-2	3区	包含層	須恵器	蓋環の坏身	—	—	(1.3)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 若干不良	外 灰白色(N7/1) 内 灰白色(N7/1)	最大径(16.0cm) 大谷編年 出雲3か4期 6c 後半～7c 前葉
32-3	1区	包含層	須恵器	蓋環の蓋	(8.8)	—	(2.0)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 黒い砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰白色(N7/1) 内 灰白色(N7/1)	最大径(11.1cm) つまみ・かえり欠損 乳頭状つまみか 国府編年 第1型式 7c 後葉
32-4	1区	包含層	須恵器	蓋環の蓋	—	—	(1.0)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 黒い砂粒と1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 灰白色(5Y7/1) 内 灰白色(5Y7/1)	最大径(11.0cm) つまみ・かえり欠損 乳頭状つまみか 国府編年 第1型式 7c 後葉
32-5	1区	包含層	須恵器	蓋環の蓋	—	天井径(6.0)	(1.6)	外 回転ヘラケズリ 内 回転ケズリの後、ナデ	胎土 黒い砂粒と1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 灰色(5Y6/1) 内 灰色(5Y6/1)	つまみ・かえり欠損 乳頭状つまみか 国府編年 第1型式 7c 後葉
32-6	3区	包含層	須恵器	蓋環の蓋	—	天井径(4.0)	(1.7)	外 回転ヘラケズリ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 灰黄色(2.5Y7/2) 内 灰白色(N7/1)	つまみ・かえり欠損 乳頭状つまみか 自然釉 国府編年 第1型式 7c 後葉
32-7	1区	包含層	須恵器	蓋環の蓋(つまみ部)	—	—	(1.2)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 不良	外 にぶい赤褐色(5YR5/4) 内 にぶい赤褐色(5YR5/4)	つまみ直径(2.5cm) 国府編年 第1または第4～5型式
32-8	1区	包含層	須恵器	蓋環の蓋	(12.6)	—	(1.1)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 暗オリーブ色(5Y4/4) 内 灰黄色(2.5Y6/2)	内外と断面に自然釉がかか (割れてから被熱) 国府編年 第3型式 8c 第2四半期

遺物観察表

遺物番号	調査区	遺構名	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・手先		調整・文様の特徴		色調	備考
					口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成				
32-9	1区	包含層	須恵器	蓋環の蓋	(16.8)	—	(1.5)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 黒い砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(7.5Y6/1) 内 灰色(7.5Y6/1)	国府編年 第4～5型式 8c 第3四半期～9c 前葉		
32-10	3区	包含層	須恵器	蓋環の蓋	(17.0)	—	(1.7)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 褐色(10YR5/1) 内 灰オリーブ色(5Y6/2) 黄灰色(2.5Y5/1)	重ね焼き痕 国府編年 第4～5型式 8c 第3四半期～9c 前葉		
32-11	3区	包含層	須恵器	蓋環の蓋	—	—	(1.7)	外 回転ヘラケズリのち 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 灰色(N6/1) 内 灰色(N6/1)	つまみ・口縁部欠損 大型か		
32-12	1区	包含層	須恵器	無高台杯	(12.2)	—	(2.5)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 灰色(7.5Y5/1) 内 灰色(7.5Y5/1)	国府編年 第3型式 8c 第2四半期		
32-13	3区	包含層	須恵器	無高台杯	(11.1)	(6.8)	4.1	外 回転ナデ、底部回転 系切り 内 回転ナデ	胎土 2mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(5Y4/1)～ 灰色(7.5Y6/1) 内 灰色(7.5Y6/1)	同器種の重ね焼き痕 国府編年 第3型式 8c 第2四半期		
32-14	1区	包含層	須恵器	無高台杯	—	(9.4)	(2.4)	外 回転ナデ、底部回転 系切り 内 回転ナデ	胎土 0.5mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 灰色(7.5Y6/1) 内 灰色(7.5Y6/1)	体部上半部欠損 国府編年 第3～5型式		
32-15	1区	包含層	須恵器	無高台杯	—	(9.1)	(1.9)	外 回転ナデ、底部回転 系切り 内 回転ナデ	胎土 1mm前後の砂粒を少し含む 焼成 不良	外 灰白色(7.5Y8/1) 内 灰白色(7.5Y8/1)～ 灰色(7.5Y6/1)	体部上半部欠損 国府編年 第4型式以降か		
32-16	1区	包含層	須恵器	無高台杯	—	(11.2)	(2.2)	外 回転ナデ、底部回転 系切り 内 回転ナデ	胎土 黒い砂粒を含む 焼成 普通	外 灰色(7.5Y6/1) 内 灰色(7.5Y6/1)	大きな目の環 内面擦っているか 体部上半部欠損 国府編年 第4型式以降か		
32-17	3区	包含層	須恵器	無高台杯	—	(9.4)	(0.8)	外 底部回転系切り 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 やや不良	外 灰白色(5Y7/1) 内 灰白色(5Y7/1)	体部上半部欠損 国府編年 第4型式以降か		
32-18	1区	包含層	須恵器	無高台杯	—	(6.9)	(2.0)	外 回転ナデ、底部回転 系切り 内 回転ナデ	胎土 細かい砂粒を少し含む 焼成 不良	外 灰白色(7.5Y7/2) 内 灰白色(7.5Y7/1)	国府編年 第4型式 8c 第3～4四半期		
32-19	1区	包含層	須恵器	無高台杯	—	(7.5)	(2.2)	外 回転ナデ、底部回転 系切り 内 回転ナデ	胎土 黒い砂粒を含む 焼成 やや不良	外 灰色(5Y6/1) 内 灰色(5Y6/1)	国府編年 第4型式 8c 第3～4四半期		
32-20	1区	包含層	須恵器	高台付杯	—	(8.9)	(1.7)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 不良	外 黄灰色(2.5Y5/1) 内 にぶい黄褐色 (10YR6/3)	内面擦っている 国府編年 第3型式 8c 第2四半期		
32-21	3区	包含層	須恵器	高台付杯	—	—	(2.2)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 灰色(N5/1) 内 灰色(7.5Y6/1)	国府編年 第3型式 8c 第2四半期		
32-22	1区	包含層	須恵器	高台付杯	—	(13.1)	(2.6)	外 底部回転系切り 内 回転ナデ	胎土 1mm前後の砂粒を含む 焼成 不良	外 褐色(10YR4/4)～ 灰色(5Y5/1) 内 灰色(5Y5/1)	内面底部の焼成痕 (同一器種を重ね焼き) 高台内 茶褐色の付着物あり 国府編年 第2型式 7c 末葉～8c 第1四半期		
32-23	3区	包含層	須恵器	高台付杯	11.7	7.8	4.4	外 回転ナデ、底部静止 系切り後ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む 焼成 普通	外 灰色(5Y5/1) 内 灰色(5Y5/1)	ふせて焼いている 国府編年 第3型式 8c 第2四半期		
32-24	1区	包含層	須恵器	高台付杯	—	(10.6)	(2.6)	外 回転ナデ、底部回転 系切り 内 回転ナデ	胎土 1mm以上の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(5Y6/1) 内 灰色(5Y6/1)	国府編年 第4型式 8c 第3～4四半期		
32-25	3区	包含層	須恵器	無高台皿	(14.7)	(11.8)	1.5	外 底部回転系切り後 ナデ 内 回転ナデ	胎土 2mm以下の石英を含む 焼成 やや不良	外 灰白色(2.5Y8/1) 内 灰白色(2.5Y8/1)	国府編年 第3～5型式 8c 第2四半期～9c 前葉		
32-26	1区	包含層	須恵器	高台付皿	(16.0)	—	(3.0)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 黒い砂粒を含む 焼成 普通	外 灰色(10Y5/1) 内 灰色(10Y5/1)	高台欠損 内面一部擦っている 国府編年 第5型式 8c 末～9c 前葉		
32-27	3区	包含層	須恵器	高台付皿	—	(11.4)	(1.6)	外 底部回転系切り 内 擦っている	胎土 2mm以下の砂粒を少し含む 焼成 やや不良	外 灰色(7.5Y6/1) 内 灰色(7.5Y6/1)	体部欠損 内面擦っている 国府編年 第4～5型式 8c 第3四半期～9c 前葉		
33-1	3区	包含層	須恵器	低脚無蓋高 環または 台付壺か	—	(5.4)	(1.4)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(N6/1) 内 灰色(N6/1)	スカシあり 大谷編年 出雲5期 台付壺なら8～9c代		
33-2	3区	包含層	須恵器	高環	—	—	(2.6)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(N4/1) 内 灰色(5Y5/1)	スカシか所残 大谷編年 出雲6期 7c後半		
33-3	1区	包含層	須恵器	高環 (脚部)	—	—	(4.7)	外 回転ナデ 内 回転ナデ、しぼり	胎土 0.5mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 灰色(N5/1) 内 灰色(N5/1)	内 ロクロ使用で斜めにしぼり目が入る スカシ確認できない 国府編年 第3～5型式 8c 第2四半期～9c 前葉		
33-4	1区	包含層	須恵器	高環 (脚部)	—	(14.4)	(1.9)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(N5/1) 内 灰色(5Y6/1)	最大径(14.8cm)		
33-5	1区	包含層	須恵器	瓶か小壺	—	—	(3.2)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(N6/1) 内 灰色(N6/1)	9c代		
33-6	3区	包含層	須恵器	壺か (肩部か)	—	—	(3.4)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 灰色(7.5Y6/1) 内 灰色(7.5Y6/1)	最大径(9.8cm)		
33-7	3区	包含層	須恵器	長頸壺か (肩部か)	—	—	(2.4)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 2mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 灰白色(10YR7/1) 内 灰色(N5/1)	突帯のある壺 自然物		
33-8	1区	包含層	須恵器	平瓶か壺	—	—	(2.6)	外 突帯下にカキ目 ナデ 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 灰色(N4/1) 内 灰色(N6/1)	断面M字状の突帯 平瓶なら国府編年 第5型式 8c 末～9c 前葉		
33-9	1区	包含層	須恵器	壺 (肩部)	—	—	(2.2)	外 タタキ、カキ目 内 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 灰色(N6/1) 内 灰色(N6/1)	高台が付くものか		

遺物番号	調査区	遺構名	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
					口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成		
33-10	1区	包含層	須恵器	壺	—	(13.0)	(4.9)	外 回転ナデ、カキ目 内 回転ナデ	胎土 1～5mmの砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(N6/1) 内 灰色(N6/1)	
33-11	1区	包含層	須恵器	甗 (口縁部)	(22.6)	—	(5.1)	外 ナデ、平行タタキ 内 ナデ、同心円状タタキ	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	外 黒色(N2/1)～ 暗灰色(N3/1) 内 暗灰色(N3/1)	
33-12	1区	包含層	須恵器	甗 (口縁部)	—	—	(8.0)	外 タタキ後ナデ 内 タタキ後ナデ	胎土 1mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 灰色(N4/1) 内 灰色(N4/1)	
33-13	1区	包含層	須恵器	甗 (口縁部)	—	—	(3.9)	外 ナデ 内 ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(N6/1) 内 灰色(N6/1)	
33-14	1区	包含層	須恵器	甗 (頸～肩部)	—	—	(4.7)	外 — 内 タタキ、ナデ消し	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 黄灰色(2.5Y6/1) 内 黄灰色(2.5Y6/1)	外 自然釉付着
33-15	3区	包含層	須恵器	甗 (肩部)	—	—	(7.4)	外 平行タタキ 内 同心円状タタキ	胎土 4mm以下の砂粒を若干含む 焼成 やや不良	外 褐色(7.5YR5/1) 内 灰色(N6/1)	提瓶か 円状のカキ目あり
33-16	3区	包含層	須恵器	甗 (胸部)	—	—	(6.9)	外 格子タタキ 内 青海波状タタキ	胎土 2mm以下の砂粒を若干含む 焼成 普通	外 灰色(5Y6/1) 内 灰色(5Y6/1)	タタキ繊細
33-17	1区	包含層	須恵器	甗 (底部付近)	—	—	(8.4)	外 平行タタキ 内 同心円状タタキ	胎土 1mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 灰色(5Y6/1) 内 灰色(5Y6/1)	
34-1	1区	包含層	須恵器	甗 (底部)	—	—	(8.4)	外 平行タタキのちカキ目 内 同心円状タタキ	胎土 2mm以下の砂粒を少し含む 焼成 普通	外 褐色(10YR4/1)～ 黄灰色(2.5Y6/1) 内 灰白色(N7/1)	焼きひずみ
34-2	1区	包含層	土師器	甗	(26.8)	—	(6.7)	外 風化 内 ケズリ	胎土 3mm以下の石英・長石を多量に含む 焼成 普通	外 浅黄褐色(10YR8/4) 内 浅黄褐色(10YR8/4)	
34-3	1区	包含層	土師器	甗	—	—	(2.5)	外 ナデ 内 ケズリ	胎土 2mm以下の石英を含む 焼成 普通	外 にぶい黄褐色 (10YR7/4) 内 にぶい黄褐色 (10YR7/4)	
34-4	3区	包含層	土師器	甗 (ひれ部)	(7.0)×(5.5) 厚さ(1.9)			指押さえ	胎土 2mm以下の砂粒を多く含む 焼成 普通	外 浅黄褐色(10YR8/3) 内 にぶい褐色 (7.5YR5/3)	指頭圧痕がよく残る
34-5	3区	包含層	土師器	甗 (取手)	長さ(4.2) 最大径(3.8)			ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を多く含む 焼成 普通	橙色(5YR7/6)	
34-6	3区	包含層	土師器	甗 (取手)	長さ(4.5) 最大径(3.2)			ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を多量に含む 焼成 普通	橙色(5YR6/8)～ 浅黄褐色(10YR8/4)	
34-7	3区	包含層	不明		(3.7)×(2.7)×(2.6)			不明	胎土 1mm以下の砂粒を含む 焼成 普通	にぶい黄褐色(10YR7/4) ～灰白色(5Y7/1) ～灰色(5Y4/1)	用途不明の窯体状の破片 還元焼成
34-8	1区	包含層	灰釉陶器	碗	—	(6.5)	(2.0)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 密 焼成 普通	外 灰白色(2.5GY8/1) 内 灰白色(2.5GY8/1)	内外一部灰釉 9c前半～11c

第6次調査(本調査)・石製品

遺物番号	調査区	遺構名	種類	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
24-8	2区	加工段3・4	白来待石・用途不明	13.7	6.8	6.2	509.60	手斧痕(3面)
34-9	1区	包含層	玉髓 二次加工ある石器	3.0	3.5	2.9	30.90	サイコロ状のものを縁辺つづれるほどたたいている 近世の火打石ではない 暗赤褐色(2.5YR3/6)
34-10	1区	包含層	玉髓 二次加工ある剥片	2.4	2.2	1.3	5.31	暗赤褐色(2.5YR3/6)

第2次調査(H16年度調査)

遺物番号	遺構名	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成		
38-1	SB01	須恵器	坏	(10.8)	—	(4.2)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 密、0.5mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 黄灰色(2.5Y6/1) 内 灰色(7.5Y6/1)	国府編年 第3～5型式 8c第2四半期～9c前葉
38-2	SB01	須恵器	皿	—	(10.0)	(1.5)	外 回転ナデ、底部回転糸切り 内 後未調整 回転ナデ	胎土 密、0.5mmの砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 灰色(10Y6/1) 内 灰黄色(2.5Y6/2)	国府編年 第3型式以降
38-3	SB02	須恵器	坏	(10.0)	(7.0)	4.0	外 回転ナデ、底部回転糸切り 内 回転ナデ	胎土 密、1mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 良好	外 灰白色(N7/1) 内 灰色(N6/1)	国府編年 第4型式 8c第3～4四半期
38-4	SB02	須恵器	高台付坏	—	(12.0)	(1.5)	外 摩擦激しい 内 摩擦激しい	胎土 密、1mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 不良	外 灰白色(2.5Y8/2) 内 灰白色(2.5Y8/2)	全体摩擦激しい 国府編年 第3～5型式 8c第2四半期～9c前葉
38-5	SB03	須恵器	蓋坏の坏身	—	—	(1.8)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 密、1mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 灰色(10Y5/1) 内 灰色(10Y6/1)	大谷編年 出雲5期 7c前半
38-6	SB03	須恵器	蓋坏の蓋	(14.8)	天井径 (9.6)	(2.0)	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内 回転ナデ	胎土 密、2mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 灰色(10Y5/1) 内 灰色(10Y6/1)	端部形態 丸く納める 国府編年 第5型式 8c末～9c前葉

遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成		
40-1	SK02	土師器	坏	(9.4)	6.8	2.8	外 回転ナデ、底部回転系切り 内 回転ナデ	胎土 密、1mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	外 浅黄褐色 (7.5YR8/6) 内 浅黄褐色 (7.5YR8/6)	国府編年 第7型式 10c 前半
40-2	SK02	土師器	高台付坏	—	(7.8)	(1.7)	外 摩耗激しい 内 摩耗激しい	胎土 密、1mm以下の砂粒を少量含む 焼成 普通	外 褐色 (5YR7/8) 内 黄褐色 (10YR8/6)	全体的に摩耗激しい 表面がはく離した感じ 国府編年 第7型式 10c 前半
40-3	SK02	土師器	鉢	(21.1)	—	(10.5)	外 ハケ目あとナデ 内 ヘラケズリ後ナデ消し	胎土 密、1mm以下の砂粒を少量含む 焼成 良好	外 にぶい黄褐色 (10YR6/3) ~ 黒色 (10YR2/1) 内 黒色 (10YR2/1)	外面肩部にハケ目残る 内外面 意図的に炭化か
41-1		弥生土器	甕 (口縁部)	(14.0)	—	(3.5)	外 ハケ原体による擬凹線、ハケ目、ナデ 内 ナデ、ケズリ	胎土 1~3mmの石英・長石を含む 焼成 普通	外 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 内 浅黄褐色 (10YR8/3)	内外 ふきこぼれすず付着 ビット (B-P25) から出土 松本編年 第V様式
41-2		弥生土器	甕 (口縁部)	—	—	(3.3)	外 ハケ原体による擬凹線、ナデ 内 ナデ、横方向ヘラケズリ	胎土 1mm以下の石英・長石を含む 焼成 普通	外 浅黄褐色 (10YR8/4) 内 浅黄褐色 (10YR8/4)	口縁部欠損 擬凹線摩耗激しい 松本編年 第V様式
41-3		弥生土器	甕 (口縁部)	—	—	(3.1)	外 ハケ原体による擬凹線、ナデ 内 ナデ、ケズリ	胎土 2mm以下の石英・長石を含む 焼成 普通	外 浅黄褐色 (10YR8/3) ~ 明黄褐色 (10YR7/6) 内 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	口縁部欠損 ビット (B-P90) から出土 松本編年 第V様式
41-4		須恵器	蓋坏の蓋	(14.6)	天井径 (7.0)	2.4	外 天井部回転系切り後つまみ 内 接合、ナデ 回転ナデ	胎土 密、2mm以下の砂粒を少量含む 焼成 普通	外 灰白色 (10Y7/1) 内 灰白色 (10Y7/1)	つまみ直径 (2.1cm) 国府編年 第4型式 8c 第3~4 四半期
41-5		須恵器	蓋坏の蓋	(17.4)	天井径 (7.6)	3.9	外 回転系切り後ナデ 内 回転ナデ	胎土 密、5mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 良好	外 灰白色 (N7/1) 内 灰色 (7.5Y5/1)	つまみ径 3.2cm 頂部中央を少し突出させる 盛り成形 国府編年 第4型式 8c 第3~4 四半期
41-6		須恵器	坏	(12.2)	(8.6)	(3.4)	外 回転ナデ、底部回転系切り 内 回転ナデ	胎土 密、1mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 良好	外 灰色 (N4/1) 内 灰色 (N5/1)	ビット (B-76) から出土 国府編年 第4型式 8c 第3~4 四半期
41-7		須恵器	皿	(14.0)	(10.6)	2.5	外 摩耗激しい、底部回転系 内 切り 摩耗激しい	胎土 密、0.5~3mmの砂粒を少量含む 焼成 やや不良	外 灰白色 (10Y7/1) 内 灰白色 (10Y7/1)	全体的に摩耗激しい 溝 (A-SD01) から出土 国府編年 第3~5型式 8c 第2 四半期~9c 前葉
41-8		須恵器	甕 (胴部)	—	—	(7.7)	外 平行タタキ 内 同心円状タタキ	胎土 密、1mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	外 灰白色 (10Y7/1) 内 灰色 (N6/1) 釉 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 灰かぶり 淡黄色 (5Y8/3)	外 自然釉・灰かぶり付着 胴部に M 字状突帯貼り付く
41-9		須恵器	長頸壺 (底部)	—	(8.4)	(3.4)	外 回転ナデ、底部回転系切り 内 回転ナデ	胎土 密、0.5mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 良好	外 明青灰色 (5BG7/1) 内 灰色 (N4/1) ~ 灰色 (N6/1)	貼付高台 ビット (F-P31) から出土 国府編年 第2~3型式 7c 末葉~8c 第2 四半期
41-10		須恵器	壺 (底部)	—	(14.6)	(9.2)	外 回転ナデ、横方向のカキ目、 内 底部回転系切り後指ナデ 回転ナデ	胎土 密、1mm以下の砂粒を少量含む 焼成 普通	外 灰色 (N6/1) 内 灰白色 (N7/1)	指紋残る ビット (A-73) から出土
41-11		須恵器	甕	—	—	(22.2)	外 ナデ、平行タタキ 内 ナデ、同心円状タタキ	胎土 密、3mm以下の砂粒を含む 焼成 良好	外 灰色 (N5/1) 内 灰色 (N5/1)	口縁部接合時の指頭圧痕あり ビット (B-P79) から出土
41-12		土師器	甕 (口縁部)	(18.4)	—	(4.9)	外 横方向ハケ目のちナデ、 内 縦方向ハケ目のちナデ 横方向ハケ目のちナデ、 ケズリ	胎土 1mm以下の石英・長石を含む 焼成 普通	外 褐色 (5YR7/8) ~ 黄褐色 (10YR8/6) 内 褐色 (5YR7/8) ~ 黄褐色 (10YR8/6)	ハケ目残る ビット (B-P27-4) から出土
41-13		緑釉陶器	碗 (口縁部)	(15.0)	—	(4.0)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 密 焼成 普通	釉 淡黄色 (7.5Y8/3) 素地 灰白色 (7.5YR8/1)	内外面施釉 ビット (A-P8) から出土
41-14		緑釉陶器	碗 (高台部)	—	7.0	(1.35)	外 回転ナデ、回転系切り後 内 ナデ 回転ナデ	胎土 密、0.5mm以下の砂粒をわずかに含む 焼成 普通	釉 オリーブ黄色 (5Y6/4) 素地 灰白色 (2.5Y7/1)	底部内面から外面畳付け まで施釉 9c ~ 10c

第2・3次調査 (H16・H18年度調査) 石製品・鉄滓

遺物番号	調査年度	遺構名	種類	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
38-7	H16	SB04	碗形滓	5.9	4.9	1.2~2.0	41.01	磁着はほぼない 下面に炉床土残存 平面不整形円形で断面は碗形 ガラス質部分 暗青灰色 (5B4/1) 滓 明黄褐色 (10YR7/6)
38-8	H16	SB04	羽口先の溶解物	3.4	3.5	2.1	10.28	内面 黒っぽくガラス化している 磁着なし ガラス質部分 青黒色 (10GB2/1) 滓 にぶい黄褐色 (10YR7/4)
41-15	H16		羽口先端	内径φ (2.5)		1.5	13.58	ビット (B-P35 柱痕跡) から出土 古代末~中世 土師器皿底部 須恵器蓋坏・蓋片 坏底部 ガラス質 灰色 (10Y4/1) ~ 淡黄色 (7.5Y8/3) 胎土 にぶい褐色 (7.5YR7/4)
41-16	H16		碗形滓	6.4	5.7	2.8	146.28	ビット (B-P19) から出土 内外 緑黒色 (5G2/1) ~ にぶい黄色 (2.5Y6/3)
41-17	H16		水晶 平玉	φ 1.3		6.5	1.59	ビット (B-P85 検出面) から出土 白濁しているため研磨途中のものか
42-1	H18		流動滓	7.8	7.1	3.4	249.08	

# 写真図版





調査地調査前全景(東から)



T-1 調査前風景(西から)



T-2 完掘状況(西から)

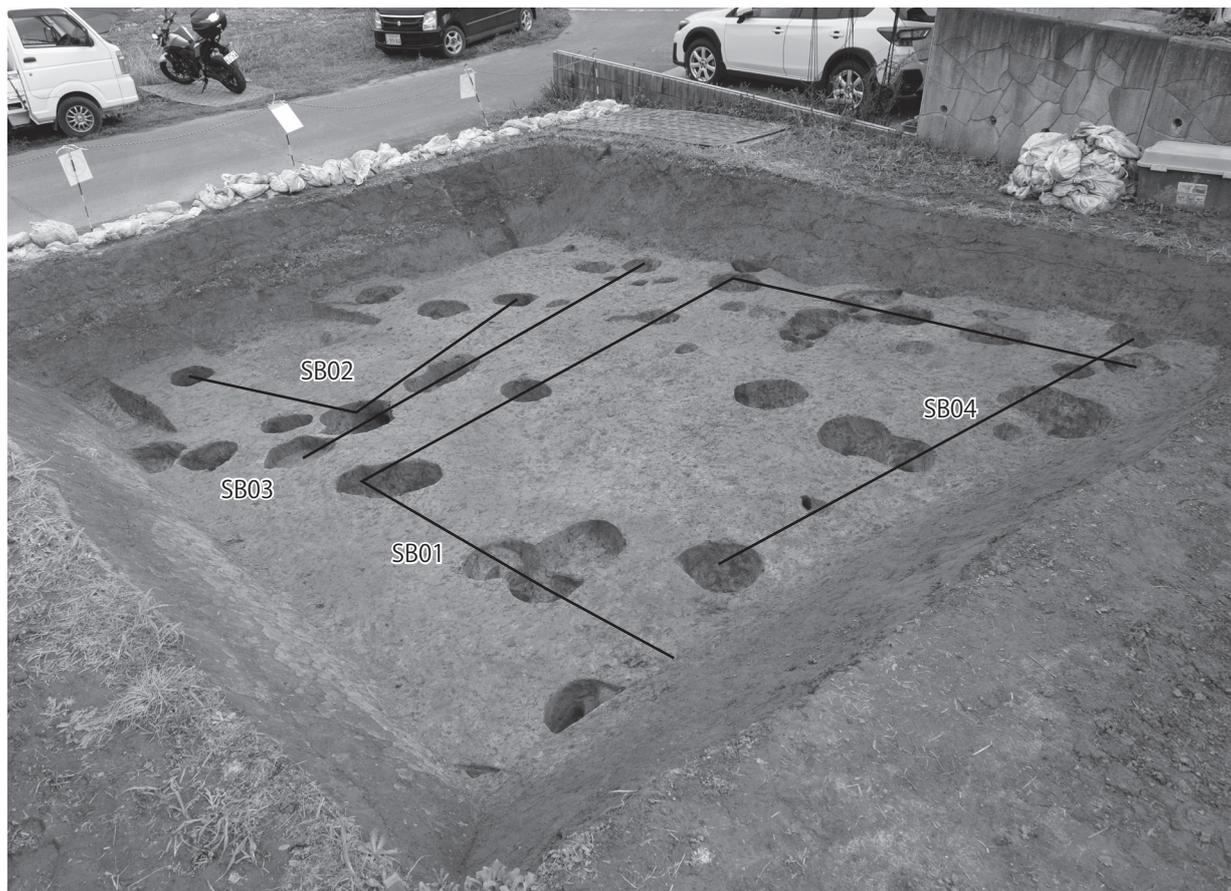


T-1 完掘状況(南西から)



T-2 P2 検出状況(北から)

図版2 第6次(本調査)



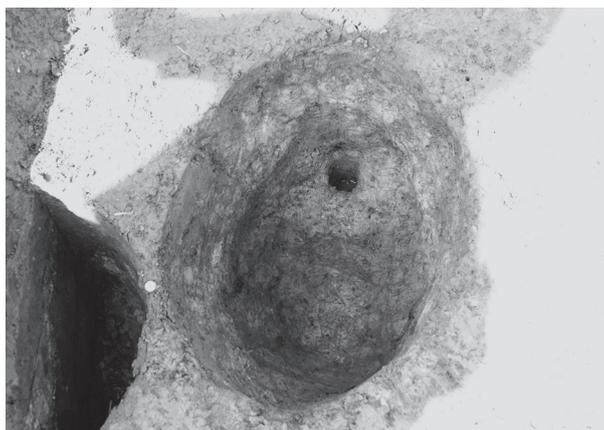
1区完掘状況(北西から)



1区完掘状況(南東から)



SB01-SP04 半掘状況(南東から)



SB01-SP04 完掘状況(東から)



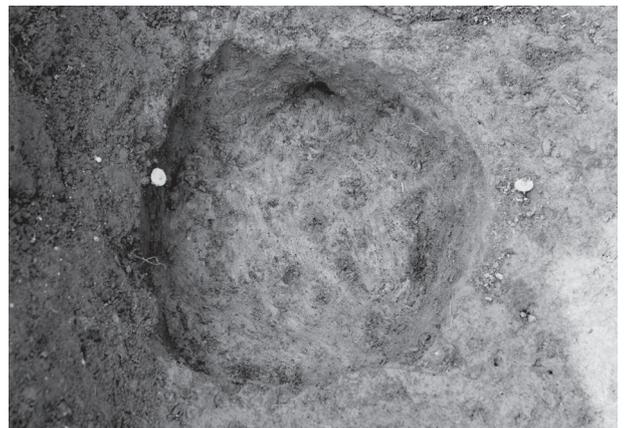
2区完掘状況(南西から)



2区完掘状況(東から)

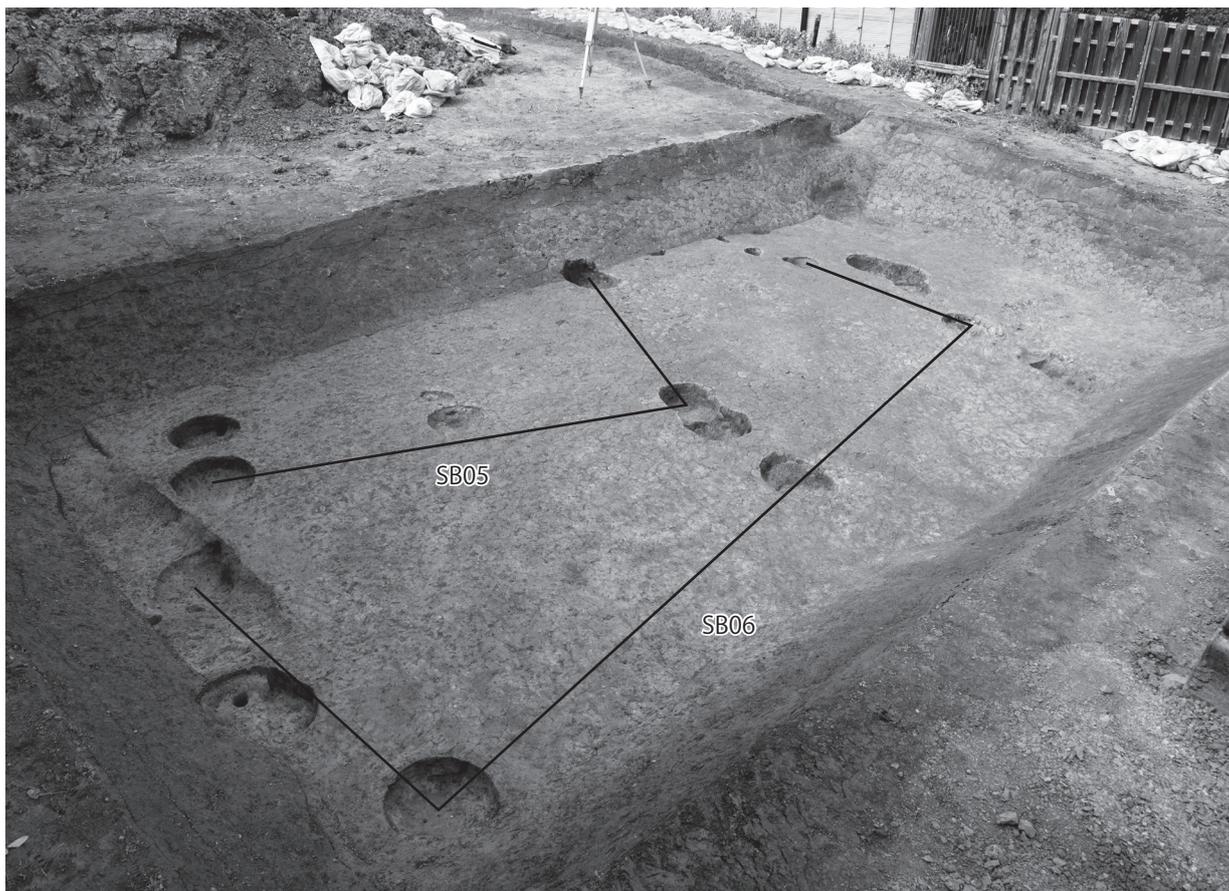


P10半掘状況(東から)



P10完掘状況(東から)

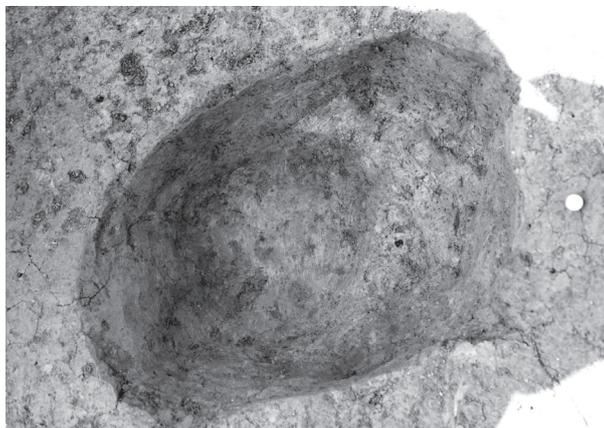
図版4 第6次(本調査)



3区完掘状況(南東から)



SB05-SP01 半掘状況(北から)



SB05-SP01 完掘状況(北から)



SB06-SP02 半掘状況(北から)



SB06-SP02 完掘状況(北から)



調査地全景(北から)



SB01・SB02・SK02 完掘状況(北から)

図版6 第2次(H16年度)調査



SK02 遺物出土状況(北から)



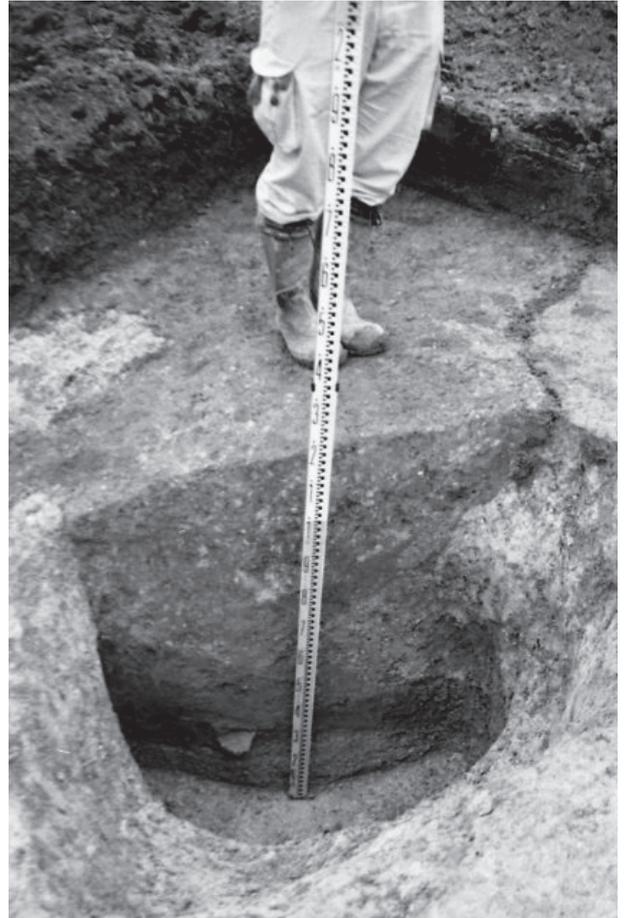
SB03 完掘状況(北から)



調査区東側ピット群完掘状況(北西から)



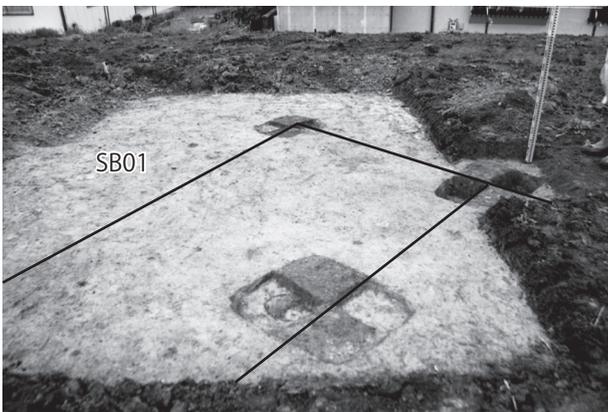
T-2 検出状況(南から)



T-2 貯蔵穴土層断面検出状況(南東から)



T-2 貯蔵穴半掘状況(南西から)



T-4 完掘状況(西から)



T-5 完掘状況(西から)

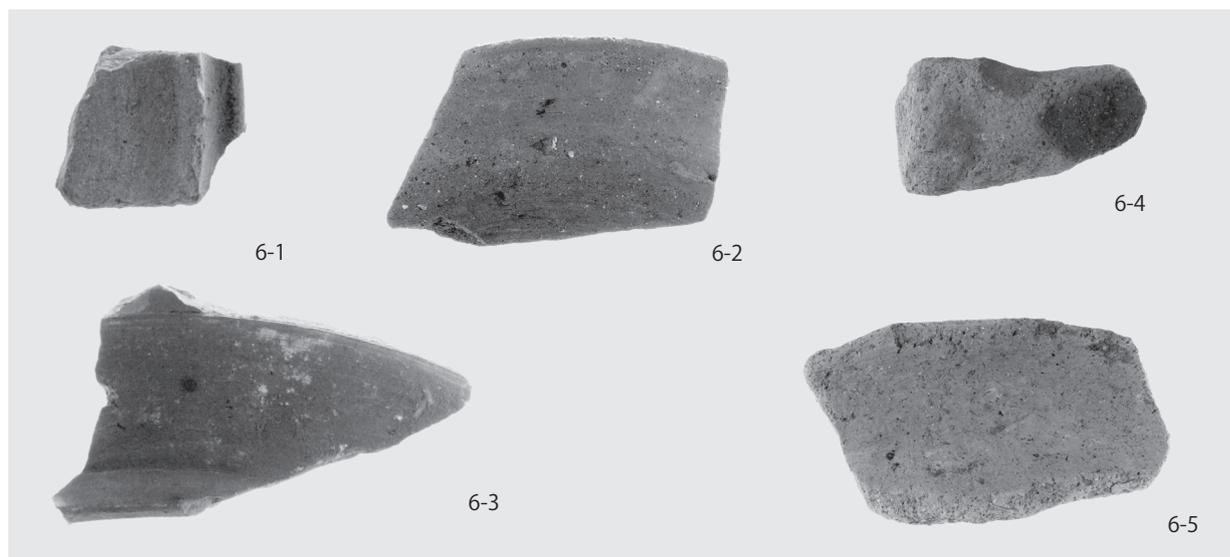


西側擁壁設置箇所(南から)

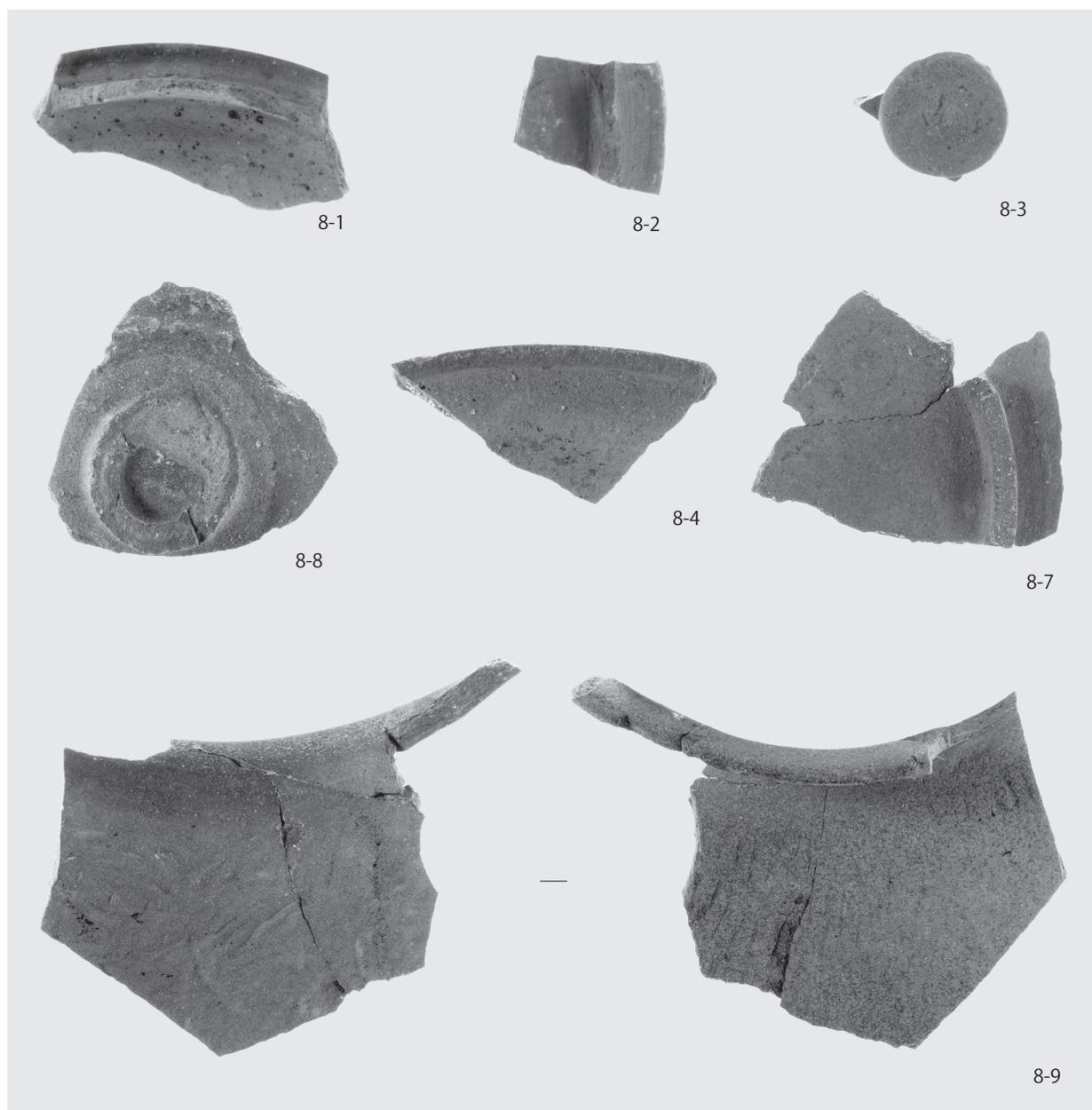


中央擁壁設置箇所(西から)

図版 8 遺物写真



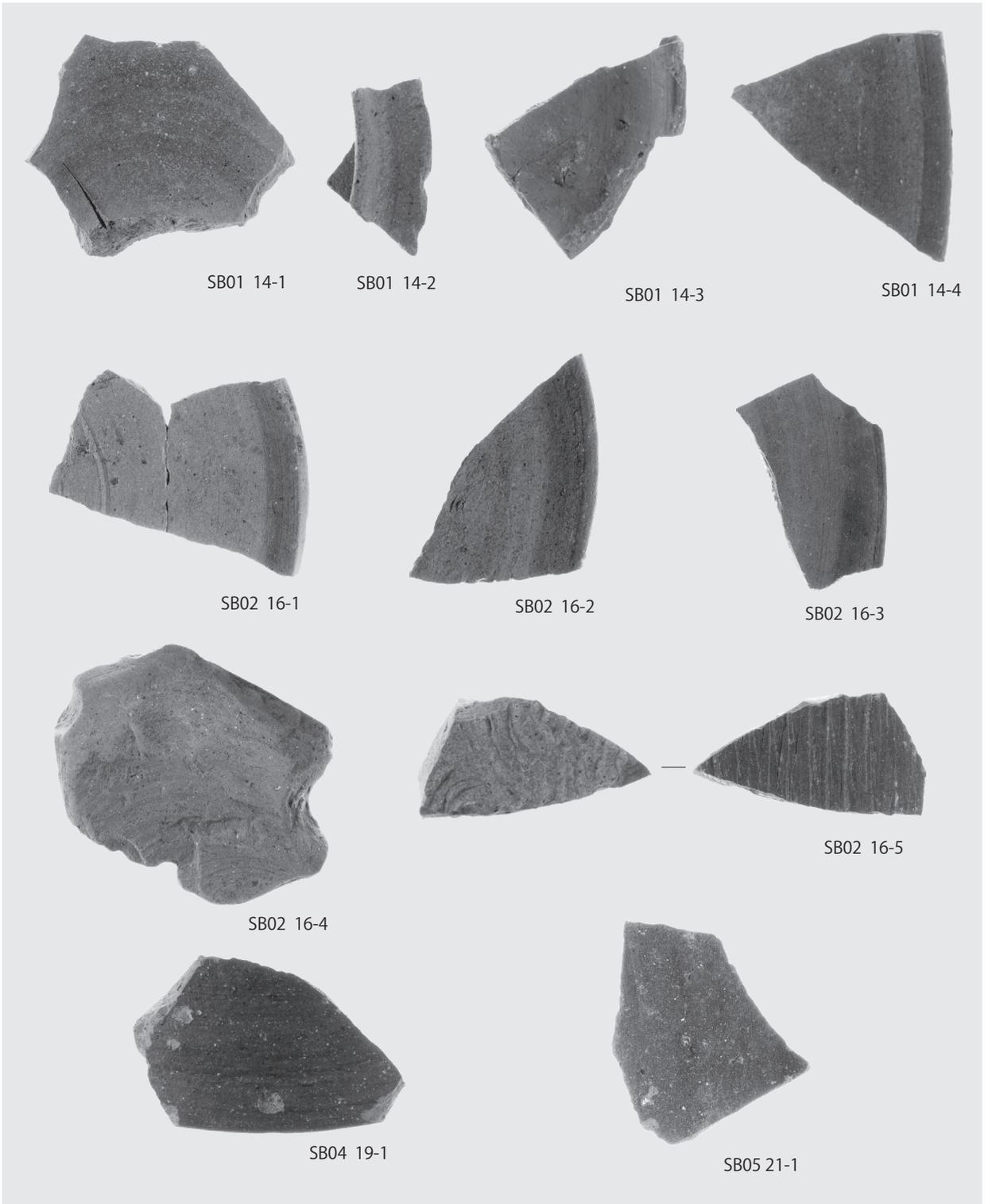
第 5 次 ( 試掘調査 ) T-1 出土遺物



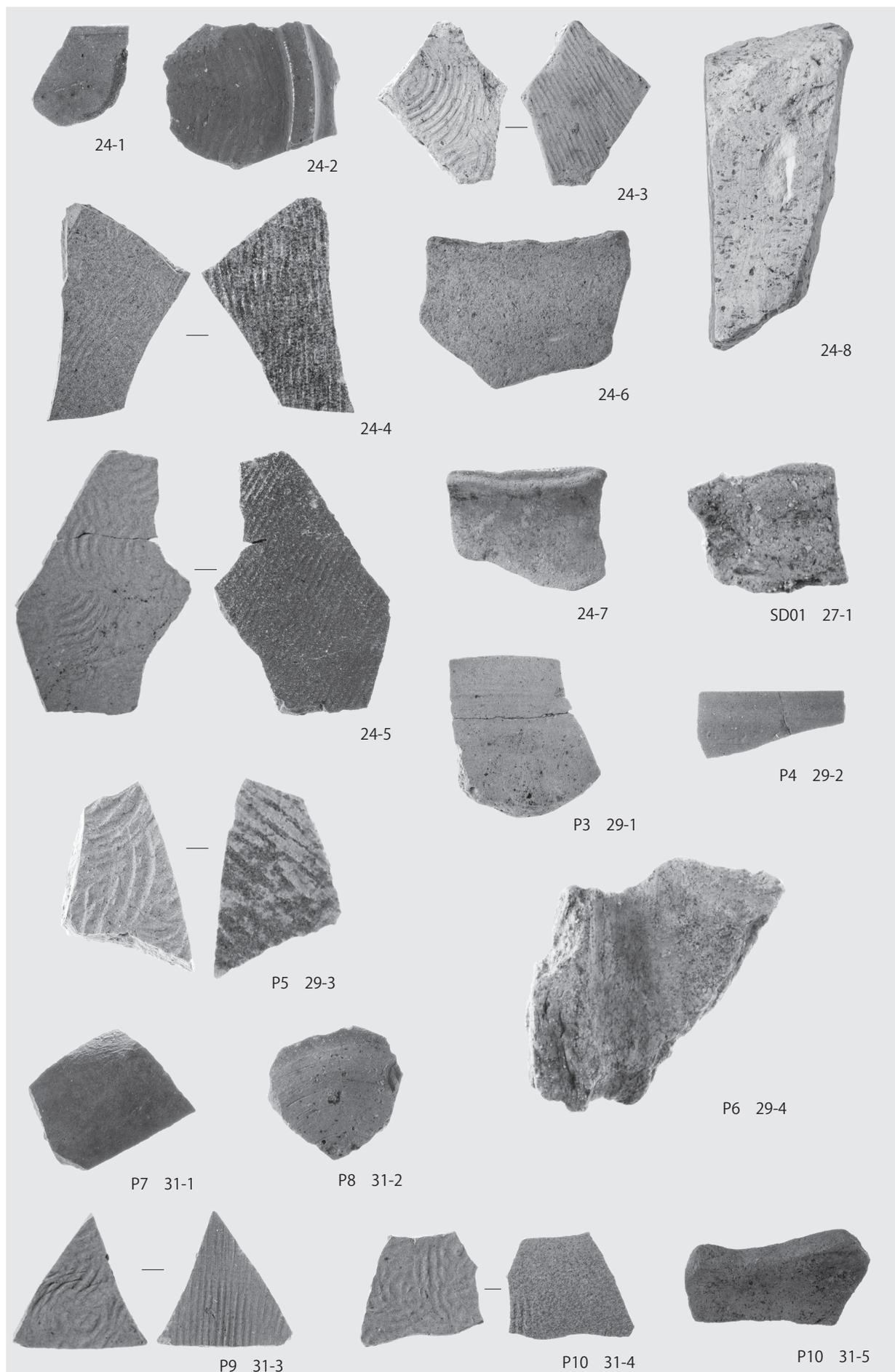
第 5 次 ( 試掘調査 ) T-2 出土遺物 ( 1 )



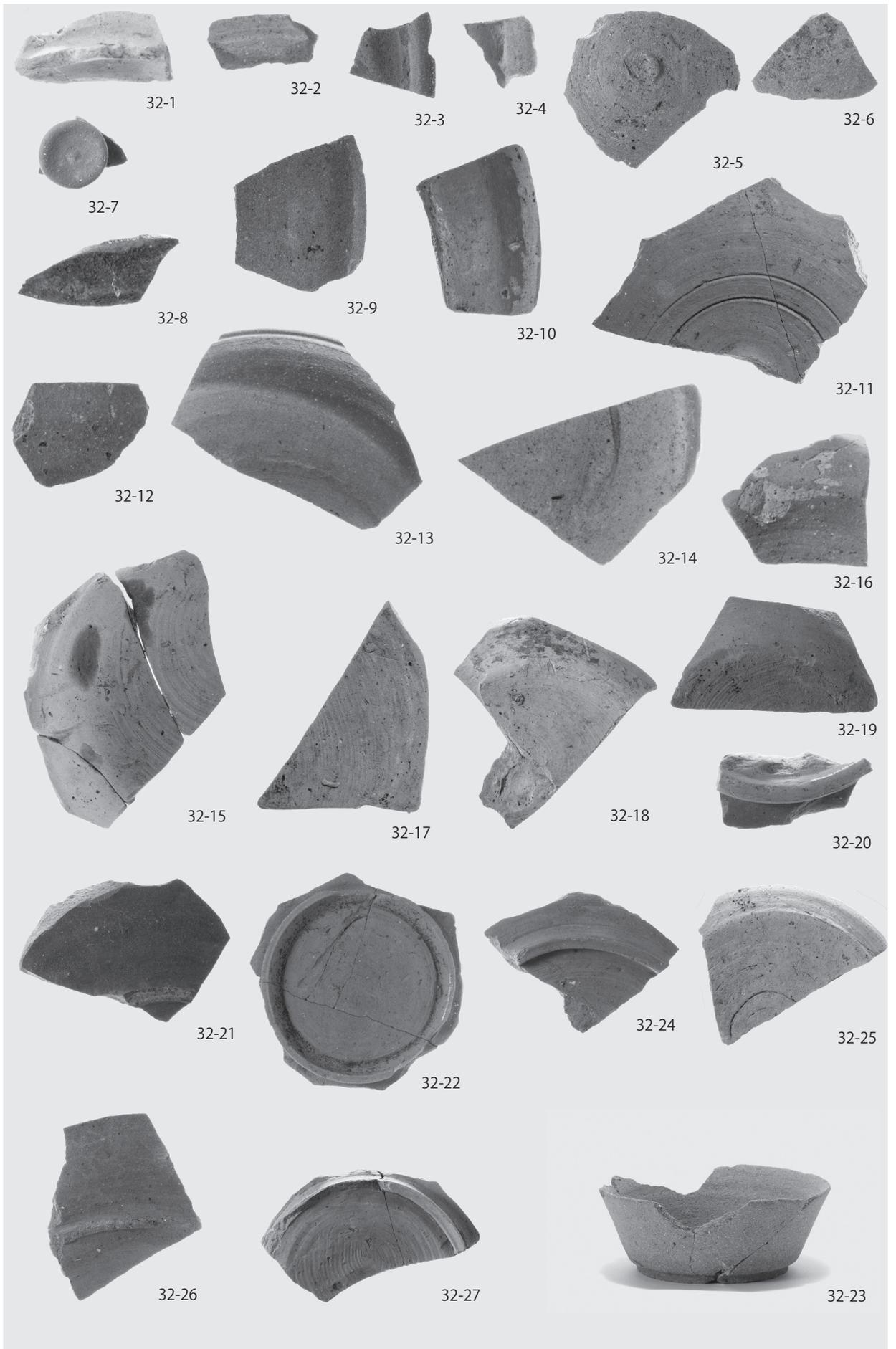
第 5 次 ( 試掘調査 ) T-2 出土遺物 ( 2 )



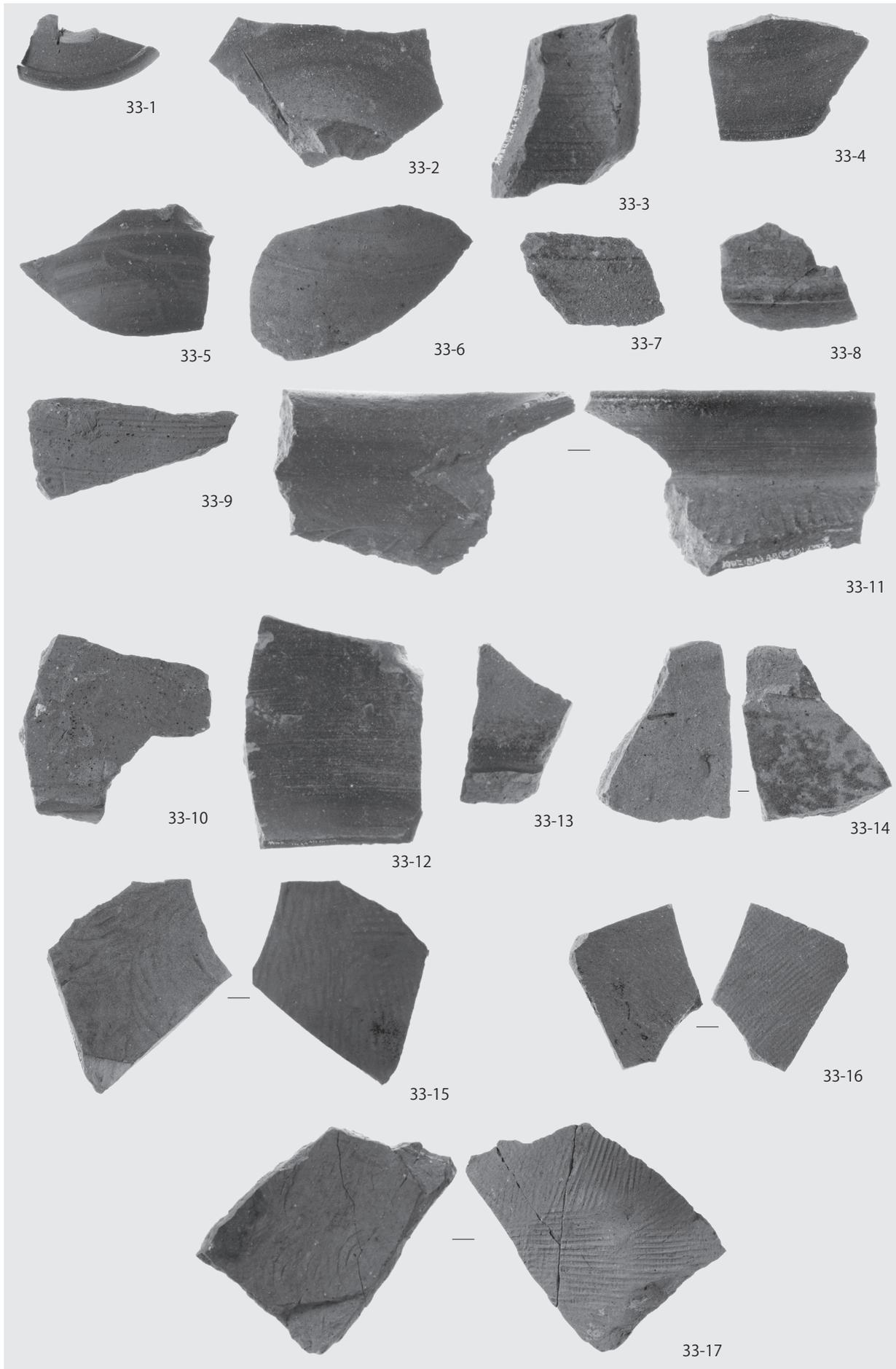
第 6 次 ( 本調査 ) SB01 ~ SB05 出土遺物



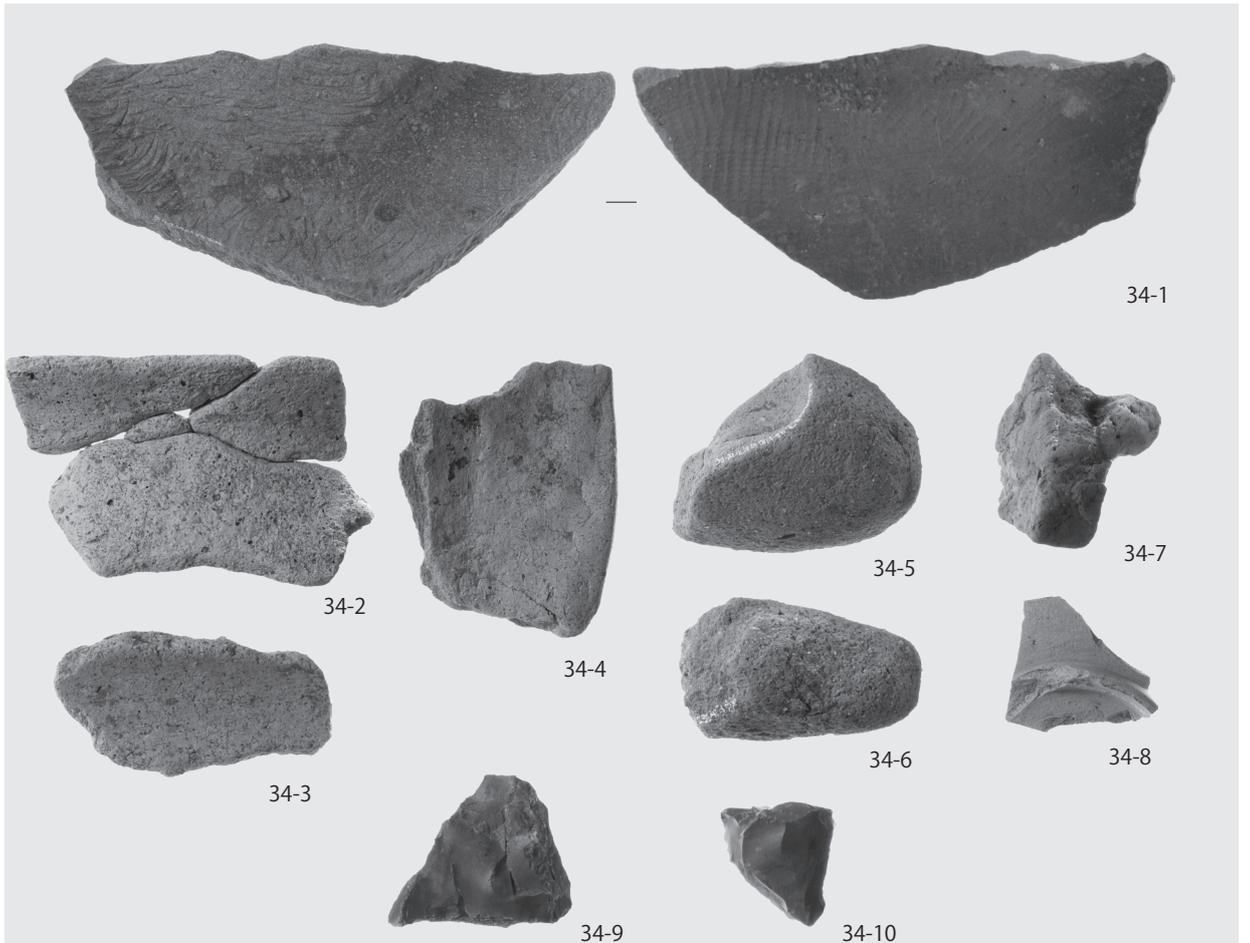
第6次(本調査)加工段3・4出土遺物/SD01出土遺物/P3～P10出土遺物



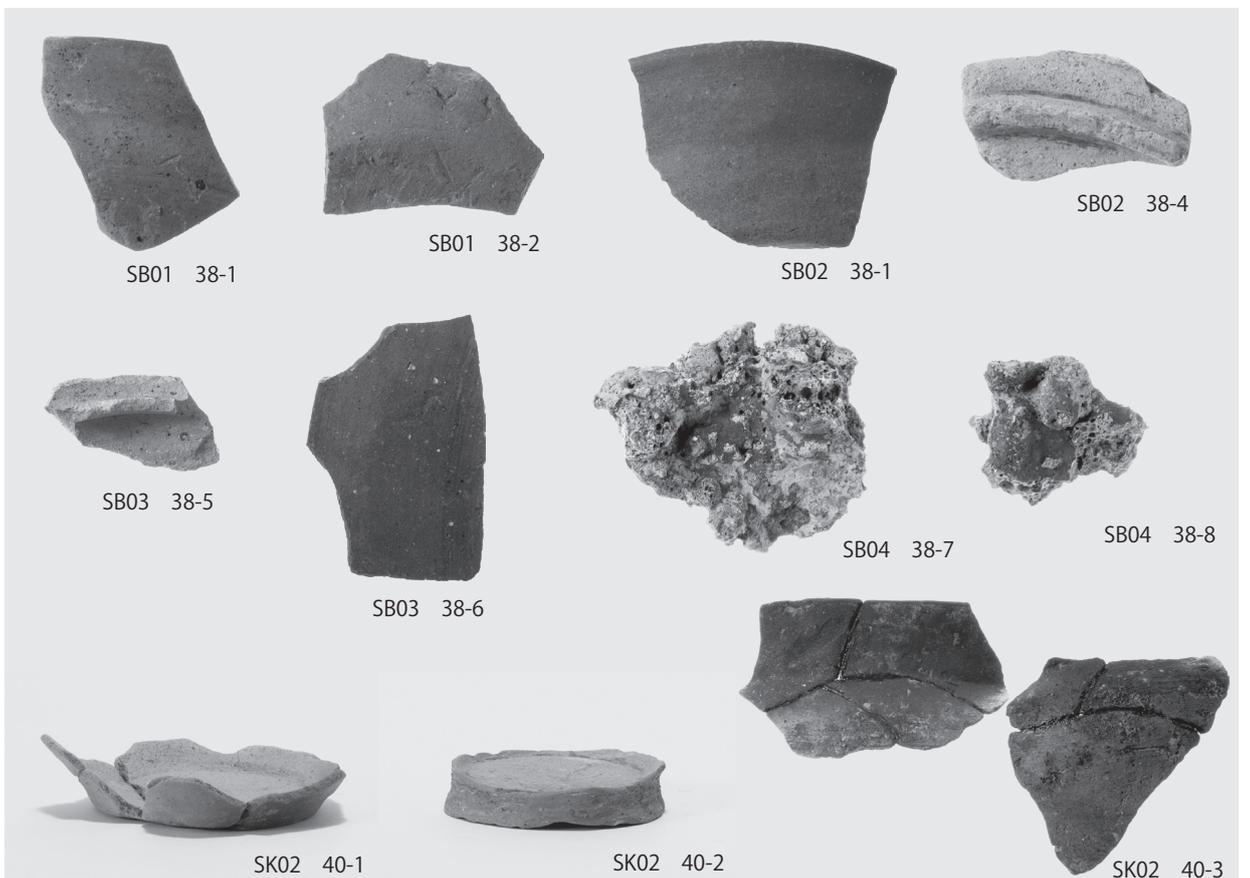
第 6 次 (本調査) 包含層出土遺物 (1)



第6次(本調査)包含層出土遺物(2)

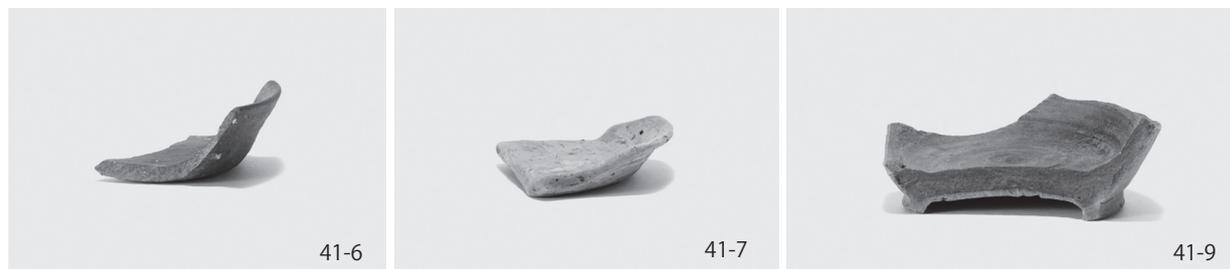
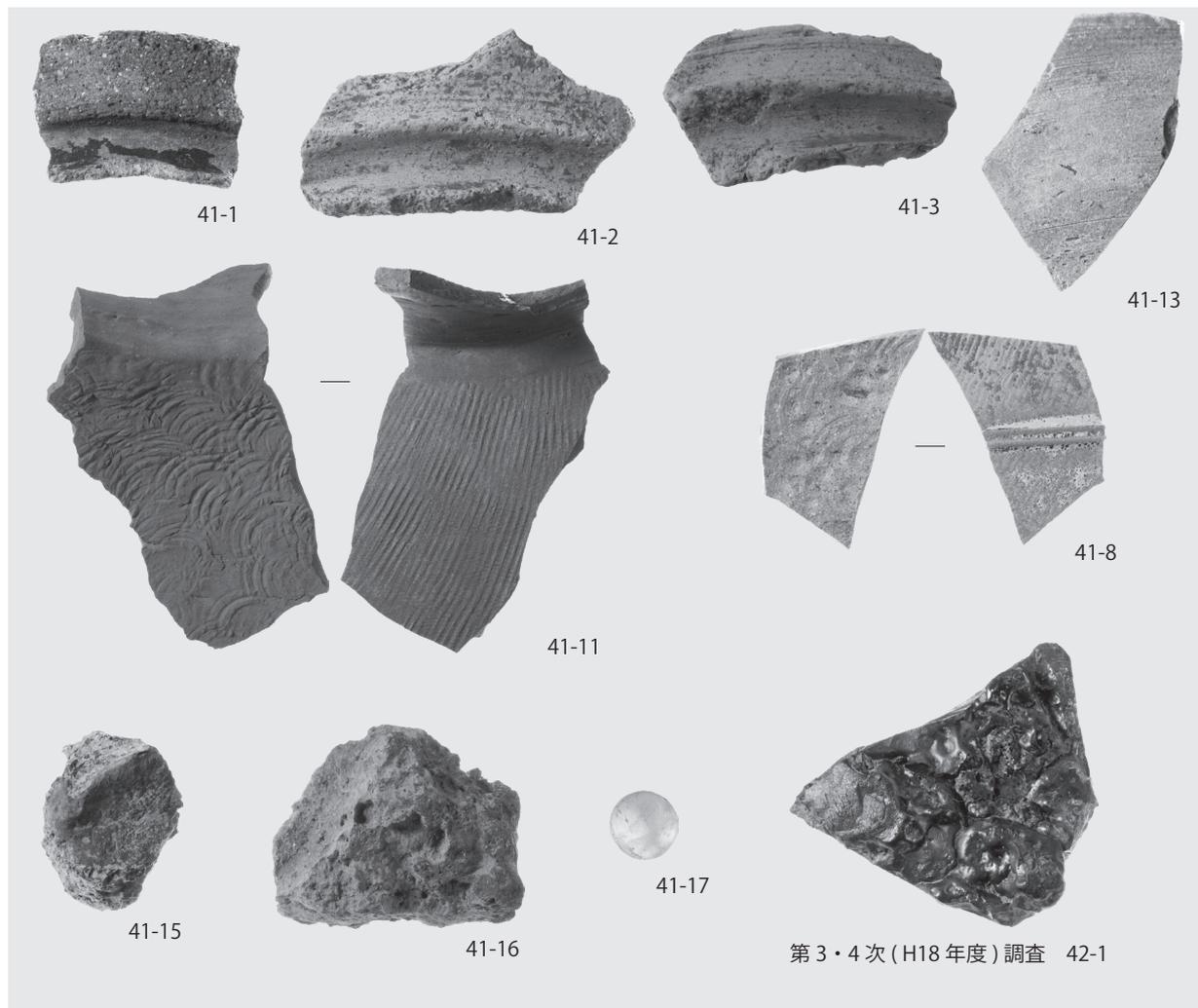


第 6 次 (本調査) 包含層出土遺物 (3)



第 1・2 次 (H16 年度) 調査 SB01 ~ SB04・SK02 出土遺物

図版 14 遺物写真



第1・2次(H16年度)調査 遺構内・遺構外出土遺物 / 第3・4次(H18年度)調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみでんにいせき						
書名	神田Ⅱ遺跡						
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第198集						
編著者名	徳永桃代						
編集機関所在地	松江市役所 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL:0852-55-5284						
	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 埋蔵文化財課 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL:0852-85-9210						
発行年月	2021(令和3)年3月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
神田Ⅱ遺跡	まつえし 松江市 おおぼちよう 大庭町 あざかみでん 字神田	32201	D-997	35° 25' 54"	2020.2.14 ～ 2020.3.26	107.87㎡	宅地造成 工事
				140° 44' 24"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
かみでんにいせき 神田Ⅱ遺跡	集落跡	弥生時代 ～ 奈良・平安 時代	掘立柱建物跡 加工段 柱列 溝	須恵器 土師器	古代を中心とする掘立柱建物跡を検出した。古代の須恵器、土師器が多く出土した。		
要約	<p>神田Ⅱ遺跡は、弥生時代後期に一度人的活動が行われ、古墳時代後期の6世紀後半～7世紀にかけて徐々にその活動が活発になり始める。そして、8世紀～9世紀前葉に本格的な集落が営まれていたと考えられる。9世紀前半～11世紀の緑釉陶器や灰釉陶器があるものの、その数は少なく、9世紀前半以降は衰退したものと推測される。</p> <p>緑釉陶器、灰釉陶器とともに水晶の平玉が出土していることから、一般的な集落ではない可能性が考えられる。</p>						

松江市文化財調査報告書 第198集

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

**神田Ⅱ遺跡**

令和3(2021)年3月

編集・発行 島根県松江市  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印刷 株式会社 高浜印刷  
島根県松江市東長江町 902-57